

ルネ・ケーニヒ

社会学の基本概念：フェルディナント・テンニェス
《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》について

René König, *Die Begriffe Gemeinschaft und Gesellschaft bei Ferdinand Tönnies* (1955).

(訳・解説)

河野 眞

Japanese Translation with commentary by Kono Shin

愛知大学元教授

Ex-Professor at Aichi University

[翻訳・紹介にあたって小解]

書誌データ；論者について；翻訳・紹介の動機；予備知識を兼ねて

[本文] 目次

I	テンニェスの生誕百年に因んで - 受容の現在	177
II	テンニェスの思念の振幅	182
III	心理学としての社会学とその系譜	186
IV	社会学の課題 - 純粹社会学と経験	191
V	意志の二類型 - スピノザと存在論	194
VI	二項概念の性格および《肯定された社会的関係性》をめぐって	201
VII	新たなゲマインシャフトの可能性	214
VIII	思想史と社会学におけるテンニェスへの影響源	223
IX	ゲマインシャフト概念の先行する諸例	229
X	ゲゼルシャフト概念の先行する諸例	238
XI	二律背反の検証	243
XII	社会学か哲学か	252

-以下次号-

訳注

解説 本編について a. 社会学雑誌の企画 b. 当時の学界状況 c. ルネ・ケーニヒの論説
本編への日本の反応：背景とその後
本編以後のドイツ諸学界と世論の動向

[翻訳・紹介にあたって小解]

本編は、ドイツの社会学者ルネ・ケーニヒの論考「フェルディナント・テンニエスの《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》の概念について」(1955年)の全訳である。邦訳にさいしてタイトルを僅かながら工夫した。なお雑誌論文としてはやや長文であるため二回に分けることとし、今回は本文の全文と原注である。訳注(*の人名・事項)と(訳出の意義を含む)解説は次回にゆずる。本編はかなり前のドキュメントであるが、今これを敢えて訳出したのには幾つかの明白な理由があった。なおその解説と幾らか重複することにはなるが、理解の目安のために、はじめに小解を置いた。先ず、掲載誌『ケルン社会学・社会心理学誌』を含めた書誌データは以下である。

René König, Die Begriffe Gemeinschaft und Gesellschaft bei Ferdinand Tönnies. In: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie = KZfSS 7(1955), S.348-420.

◇論者について

次に、テーマとなる二項概念の提唱者テンニエスと論者ケーニヒの経歴を最小限に絞って挙げる。

◇a. フェルディナント・テンニエス

フェルディナント・テンニエス (Ferdinand Tönnies 1855-1936) はユトランド半島の西海岸ノルトフリースラントの小村オルデンヴォルト (Oldenswort SH) に生まれ、キール (Kiel SH) に没した社会学者である。ストラスプール (在籍手続きはせず)、イェナ、ボン、ベルリンの諸大学において文献学・歴史学・哲学を学び、1877年にテュービンゲン大学で古典文献学の分野で学位を得、次いで1880年にキール大学でホップズの研究で教授資格を得た。1882年に同大学の私講師となり、後、1909年から社会学の教授となつて1916年に定年退官となった。名誉教授であったが、1933年にナチスによってその資格を否定された。幾つかの著作のなかで最もよく知られ主著にあたるのは、比較的早い時期に書かれた『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で、1887年に初版が刊行され、生前に8版まで数えた。その他にも大部な『世論批判』などもある。テンニエスの名前はその主著のタイトルでもある一対の概念と共に世界的に知られ、日本でも既に戦前に邦訳がなされ、以後も数種類が行なわれてきた。この《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》をめぐっては20世紀を通じて議論はかまびすしく、今日も余韻なしとはしない。今回、それを論じた二次文献を紹介するのも、学史上の欠かせないドキュメントだからである。なお必要に応じて参照したテンニエスの主著の邦訳は杉之原・訳であるが、これは学生の頃に読んだもので、半世紀を経て図らずも便宜を得ることになった。なお同書の邦訳を列記する。

(翻訳) ルネ・ケーニヒ「ゲマインシャフトとゲゼルシャフトについて」

- テニス (著) 鈴木晃 (訳) 『共同社会と利益社会 全譯』春秋社/松柏館書店 (発売) 1935 (春秋文庫 72); トエンニス (著) 鈴木晃 (訳) 『共同社会と利益社会 其他』(抄訳) 春秋社 1933 (世界思想全集 73); テニス (著) 鈴木晃 (訳) 「本質意志と選擇意志」In: スピノザ (著) 鈴木晃 (訳) テニス (著) 鈴木晃 (訳) 『悟性善導/本質意志と選擇意志』春秋社 1935 (世界大思想全集 82)
- テンニェス (著) 杉之原壽一 (訳) 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』理想社 1954
- テンニェス (著) 重松俊明 (訳) 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」In: 阿閉吉男 (訳者代表) 『ドイツの社会思想』(桑原武夫[他]編『世界の思想』第19巻 河出書房新社 1966)

◇ b. ルネ・ケーニヒ

次に本編の論者ルネ・ケーニヒ (René König 1906-92) である。マグデブルク (ST) に生まれ、ケルンに没した社会学者であった。父親はドイツ人、母親はフランス人で、パリとマグデブルクを行き来しつつ育った。ウィーン大学で哲学と心理学を、次いでベルリン大学で哲学・藝術学・ロマニスティク等を学び、1930年にフランスの自然主義藝術の研究で学位を得た。アルフレート・フィアカントやヴェルナー・ゾムバルトのアドヴァイスを得て教授資格論文としてエミール・デュルケームの社会学についてまとめはじめたが、時流に合わず提出に至らなかった。ベルリンの出版社の編集者となり、また社会学の論文を各誌に発表した。ややあってナチス=ドイツを逃れて1937年にスイスのチューリヒへ移り、チューリヒ大学でデュルケームに関する研究で教授資格を得た。戦後はしばらく米軍の委嘱で教育改革の仕事に携わった後、1949年にレーオポルト・フォン・ヴィーゼの後任としてケルン大学の社会学の教授となった。以後、ケルン大学で社会学科を主宰し、1974年に定年退官となった。スイスでの亡命生活の中で社会学の数百の術語を整理し、それは戦後のフィッシャー社版『社会学事典』(*Das Fischer-Lexikon, Teil: 10. Soziologie*. 1959年)に結実した。主要著作のコミュニティ研究『社会の基本形式: 町村体』(*Grundformen der Gesellschaft. Die Gemeinde*. Hamburg 1958)が各国語に訳されている他、デュルケームやマキャベリの研究がある。また家族や流行のテーマに取り組み、さらに定年後はアメリカ合衆国においてアメリカ・インディアンの調査研究にもたずさわった。なお邦訳には次の2書がある。

佐藤智雄・鈴木幸壽 (訳) 『現代の社会学』誠信書房 1957.

小川さくえ・片岡律子 (訳) 『マキアヴェッリ: 転換期の危機分析』法政大学出版局 2001 (叢書・ウニベルシタス 730)

◇ 翻訳・紹介の動機: 予備知識を兼ねて

専門誌に掲載されて以来65年を経た論文を今回訳した理由は、テーマとされる問題について本邦ではもうひとつ要点が押さえられていないように思えるからである。もっとも、これには補足を要する。実は本編は発表された直後に日本でも当時の代表的な社会学者数

人がただちに読んで、相応のコメントを加えていたのである。従ってその時点ですでに日本でも識知されていたことになるが、一口に言えば、ルネ・ケーニヒの本編は、テンニエスの《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》の二項概念を社会学の野から追放したことにおいて記念碑的である。しかし決して貶黜の意図にもとづくのではなかった。そして以後、ケーニヒが用意した大掛かりな理論装置や殊更な分析作業がそっくり受け入れられたわけではないにせよ、事態は概ねその方向で定まった。ちなみに近年のドイツ社会学となると、ニクラス・ルーマンやウルリッヒ・ベックの存在が大きく、なお十分に紹介されていないもののゲルハルト・シュルツェも話題になる。少し視野を広げればアドルノの社会学の刺激も続いている。他方、フェルディナント・テンニエスの名前やその提唱にかかる《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》の術語を聞くことはめっきり少なくなった。そうした今日の様相だが、そこへ至る経緯に日本ではある時点から関心が払われなくなったらしく、そのため一部で変則的な事態が起きている。したがって訳出の動機は、箇条書きにすると以下のようなことになる。

一つ目はフェルディナント・テンニエスの《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》が術語としてはよく知られていながら、それに密接に関係するドイツの諸学界の動向、とりわけ第二次世界大戦後から今日まで様相が本邦には必ずしも伝わっていないと思えることである。この二項概念が日本でまったく振り向かれなくなっているのであれば話は別だが、そうでもなさそうである。端的に言えば、ドイツの諸学界ではテンニエスの二項概念は基本的には過去のものとなっている。古典的な学説の一つに化しているとも言えるが、扱いは多少のリスクを伴うような近い過去である。それゆえ今日これが言及される場合には、それを考慮した何らかの補足がほどこされる。しかし日本ではそうした調整を欠いている場合がある。

二つ目に、ゲマインシャフトの概念についてはテンニエスと関わりなく使って差し支えないという発言も一部では聞かれるが、やはり適切ではない。と言うのは、それが用語として定着した過程においても、さらに特に学術用語としての流れにおいても、テンニエスによる提唱に起点をもとめる他ないからである。それゆえテンニエスに注目することは必須であるが、逆にそこに別の落とし穴がある。日本の近年の概念使用では、関心はテンニエスによる概念の提唱にばかり向かい、それをめぐる議論の推移への理解は低調である。振り返ると、日本でもすでに戦前からテンニエス批判はなされており、戦後も批判的な観点からの言及が現れた他、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の翻訳者自身がテンニエスの概念には多大の疑義があることを解説していたのだが、それらが正当に注目されなかったきらいがある。

三つ目の理由として、特に訳者が手を染めてきた分野の事情が関係する。ドイツ語圏の

民俗学であるが、そこでも他の分野と同じく、《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》は基本的には過去のものと化している。その克服のために多大の努力が払われ、それは取りも直さず第二次世界大戦後の方法論議の一齣であった。そしてそれを有機的に組み込みながら、今日の研究方法が成り立った。その辺りの事情は、民俗学史としてはこれまでも取り上げてきたが、そこで主にもちいたのはドイツ民俗学の基礎理論をめぐる諸文献であった。そのため概念を発生させた母体にあたるドイツ社会学のなかでの議論を覗いた上で、改めて民俗学との関係について案内を供する必要性を予ておぼえていた。関係する諸学界で共通知識となっている理解も元をただすと本編に由来するところが大きいのである。もとよりドイツ人の関係者でも、誰もが本編にあたっているわけではないであろうが、そこから導き出された結論ないしは方向は事典や概説書あるいは講義やゼミを介して素養として共有されている。

四つ目の理由は、このテーマがナチズム問題の一角を占めることにある。それは概念の提唱者テンニェスが直接的に関係するわけではなく（大局的な思想史から見てまったく無縁かどうかはともかく）、本人の晩年から没後に概念が独り歩きをして起きたことだった。しかし厳然たる事実として《ゲマインシャフト》はナチス用語の側面をもち、そのため今なお議論が絶えない。しかし他方では慣用的には今もさまざまな因由でもちいられており、その点で学術用語と日常語との間でずれが見受けられる。またドイツの世論の法学が関係する一つの脈絡であるが、《ゲマインシャフト》とその合成語は現在に至るも折に触れて頭をもたげるドイツの憲法論議のポピュラーな一項目でもある。しかしこれまたどこまで日本の論壇で意識されているであろうかと問うと、空白の印象がぬぐえない。

五つ目に、これに関連して目安として予め案内しておく方がよいと思われることがらがある。それは《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》あるいは《ゲマインシャフト》をめぐる論議は、ナチス＝ドイツ期を挟んで前半と後半の二つに分かれることである。日本の場合は、提唱者にばかり眼が行き、あるいは精々テンニェスの生前に起きた議論に視野は限られてきた。たしかにそうした前半の時期には、アルトゥール・フィアカントやハンス・フライヤーだけでなく、マックス・ウェーバーやヘルムート・プレスナーやハンス・シュタウディンガーまでが議論にかかわったが、これらを現在に直結させるのは、その後の流れを併せて視野に入れるのでなければ歪みをきたすリスクを負う。もとより今挙げた論者たちの重みは失われなくても、たとえばマックス・ウェーバーにおける《ゲマインシャフト的とゲゼルシャフト的》の意味となると、際立った独自性のゆえにまずはウェーバー研究として検討すべきであろう。要するに、次のナチス＝ドイツ期をはさんだことによって様相は一変したのである。もちろんナチズムは自前の思想ではなく、それ以前からのさまざまな思潮の寄せ集めというのも一方の事実であるが、それはそれとして、ナチス期に

おける特に《ゲマインシャフト》の語の濫用があり、それが第二次世界大戦の終戦直前期のアドルノを皮切りとするゲマインシャフト批判を不可避なものにした。すなわち論議の後半であり、現在に直接つながる脈絡として見ずにはすませられないのはこちらの方である。敷衍すれば、現代に近い時期の論議を視野の外に置いて、原典から直接得られることとして何かを言い立てるのがどこまで有意義かは疑問なのである。

六つ目は、ルネ・ケーニヒの主張である。たしかに、それはテンニエスのテキストの読解に一見絞られている。が、明らかに、テンニエスの措定した対比概念が時代思潮のなかでけみした波乱を踏まえている。もっとも、趣旨が、テンニエスを否定することにあるのか、それとも世論の攻撃から救い出す意図が勝っているのかは判断が分かれるだろう。ちなみに本編の翌年に早くも現れた日本の社会学界の論評では、《完膚なきまでの批判》と捉えられた。と共に、批判作業の落としどころも見逃されなかった。要するに、ケーニヒは、テンニエスの理論を、社会学ではあり得ず、むしろ哲学として受けとめるべきものと論じたのである。これが妥当な見方かどうかはともかく、ケーニヒはそれを比喩の形式でも表現した。すなわち、テンニエスが措定した諸概念は、魚を獲るための網ではなく、したがって魚が逃げてしまう（つまり現実に適用できない）と咎めるような性格のものでなく、そもそも《網は乾いた地面に投げ出されていたのだ》と言うのである（p.254）。この陸に投げ出された網という比喩は本編に接した者に鮮やかな印象をあたえたく、ケーニヒのテンニエス論のさながら繪看板となった。

七つ目として、本編の学史的な位置を端折って言うなら、二種の異なった思潮の広がりを見舞っていることにおいて砂時計のくびれに譬えられよう。すなわち、テンニエスの措定した概念が一般化しただけでなく本人の主観を離れて禍々しくも流行語化し、またそれが故に批判の噴出にも見舞われたが、それを見てテンニエスの出身母体であるドイツ社会学界が一旦引き受けるかたちで解決を図ったのが本編であり、次いでこれを心強い拠り所として幅広い分野での新たな議論へと推移したからである。なお本編が日本で逸早く論評されながらもその効果が持続しなかったのは、畢竟、随時たしかめることができる利便には距離があったからであろう。遅ればせながらドキュメントの提供を試みたのは、それを縮めることが共通知識への一助になろうかと思われたからである。むろん社会学の専門分野では蓄積された知見の一層を成すのであろうが、隣接学の諸分野にとっては、まんざら屋下に屋を架してはいないだろう。（30.XII / 2019 S.K.）

ルネ・ケーニヒ

社会学の基本概念：フェルディナント・テンニェス
《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》について

本文 (1955 年)

I テンニェスの生誕百年に因んで — 受容の現在*

フェルディナント・テンニェス (1855 年 7 月 26 日 -1936 年 4 月 9 日) の生誕 100 年は、この純粋な精神の持ち主を顕彰する機会であるだけでなく、その傑出した理論的功績が社会学の発展に及ぼした影響を総合的に顧み、とりわけこの学究によって特色づけられたゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念をめぐる今日の状況を概観するチャンスでもある。特にこの 40 年の間にドイツの社会学の本質的な部分が、彼の学問の継続と、それをめぐる論議と、またそれへの批判において進展したと言われるのももっともであり、そこに焦点を合わせるなら、この学究をいかに敬っても敬いきれないほどである。今日の私たちがそこから離れて、まったく異なった道をたどる必要があるとしても、依然それは変わることがない。もっとも、テンニェスのゲマインシャフトとゲゼルシャフトなる対立概念は矛盾した仮説であることを明らかにすることだけでなく、論者が普遍的な哲学史的知見にもとづいて 17 世紀から 19 世紀に至る (アルトウジウス⇒p.228、ホップズ⇒p.228) 精神史のなかに位置づけていることを見るなら、テンニェスの体系性の基本線の検証は、狭い意味での批判を超えて、社会学の体系の精神史的な刷新の試みになるだろう。後述するように、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対立概念は、それに限定して検討することはできない。なぜならこの対立概念は、20 世紀初め以来のある種の問題性を、17 世紀の問題性と関係させているからである。同時にテンニェスの体系は、フランス・イギリス・アメリカの社会学の動向を絶えず考慮しつつ発展したもので、その点で、分析はすぐれて世界的な視野に立ってなされており、独りドイツの問題性として扱うのではすまない。事実、テンニェスの後継者その他の人々は、その概念をそれぞれの才覚によって発展させ、また改変を試みてきた。

ところで、すでに小論のこの冒頭において、決して些細とは言い切れない奇妙な事態に注目をしたい。ドイツでは、テンニェスへの言及は頻繁かつ好んで行なわれ、そのカテゴリーの (時には適切でなかったにせよ) 適用もなされてきたが、他方、私たちが知るところでは、1930 年代初めから、と言うことはテンニェスの 80 歳とそれからまもなくの逝去

*原文は区分だけであるが、便宜的に小見出しを加えた。

の時期に当たるが、その頃から、テンニェスへの言及は影をひそめ、1920年代末にゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念をめぐるなされた白熱した議論を総括し結論をも導こうとする動きは絶えて見られなくなった。賛否をめぐる議論はすっかり忘れられ、代わって現れたのは(今日テンニェスの概念を口にする)人々がそうであるようにまったくナイーブな使い方である。しかもそのさい、テンニェスのオリジナルが基底におかれることはなく、テンニェスに帰着する概念でありながら、その水膨ればかりが闊歩する事態になった。そうした動向が現れたのは、*青少年運動の影響の下、また第一次世界大戦後の世界観の潮流や文化批判の流れにおいてであった。テンニェス自身はそれをいたく嘆き、抗議の声を挙げることも一再どころではなかった。これについては後にふれることになる。

テンニェスの概念の故土における関心の低下は私たちには奇妙と映るが、それは、全世界での関心の高まりと対照的である。1940年にアメリカでは、*チャールズ・P・ルーミスによる英語訳が出版され、その翻訳は1955年にはイギリスでも刊行された。1944年にはパリで、*ジョゼフ・ライフによる入念なフランス語訳が現れた。またライフはその直前、フランスが大戦を終えるか終えないかの時点でテンニェスについて興味深い一文を発表していた。さらにその前ではフラマン人の*ヴィクトル・レーマンスがやはりフランス語で小文を草していた¹⁾。テンニェスが注意を喚起していたことに、広く世界は報いていたのである。社会学の基本概念の議論となれば、テンニェスは常に顧みられる存在であったことが、それをよく示している。もっとも、その概念への批判も含まれていた。フランスの*ジョルジュ・ギェルヴィッチ、アメリカの*タルコット・パーソンズなどである²⁾。その動向をよく示すのはアメリカの『社会学百科事典』(1935)にテンニェスの名前が載っていない、それでいながら同じくアメリカの『社会学事典』(1940)にはドイツ語の"Gemeinschaft und Gesellschaft"が挙げられていることであろうが、その先導役はパーソンズであった³⁾。

-
- 1) Charles P. LOOMIS, *Fundamental Concepts of Sociology: Gemeinschaft und Gesellschaft*. Translated and Supplemented. New York 1940.; Roulledge and Kegan [Paul Ltd.]; Joseph LEIF, *Communaute et societe*. Paris 1944 (Presses Universitaires de France); DERS., *La sociologie de Tönnies*. Paris 1946. ; V. LEEMANS, *F. Tönnies en de duitsche sociologie*. Brugge 1932.; DERS., *F. Tönnies et la sociologie contemporaine en Allemagne*. Paris 1933. ; Raymond ARON, *La sociologie allemande contemporaine*. premier ed.1936, 2.ed. Paris 1950, p.20-28. ; 最近では、ベンディクスによる翻訳の中に、「テンニェス」及び「身分と階級」の項目が入っている。Alfred VIERKANDT, hrsg., *Handwörterbuch der Soziologie*. Stuttgart 1931, In: Reinhard BENDIX and Seymour Martin LIPSET, *Class, Status and Power. A Reader in Social Stratification*. Clencoe (Ill.) 1953.
 - 2) Georges GURVITCH, *Lavacation actuelle de la sociologie*. Paris 1950, p.101, 103ff. ; フランスとの比較について詳しくは次を参照, Talcott PARSONS, *The structure of Social Action* Glancoe (Ill.) 1949 (初版1937), p.686-694.
 - 3) [訳者補記] 原注が長大であるのと、テンニェスの受容に関わるデータであるため本文に組み込む。

[原注3] Talcott PARSONS, a.a.O.; Hery Pratt FAIRCHILD, *Dictionary of Sociology*. New York 1944, p.128, 130. この事典は短文であるが筆者ハワード・ベッカー (Howard BECKER) は精力的にテンニェスを取り上げ、またテンニェスに大きな影響を受けたとも記している。参照, Harry Elmer BARNES and Howard BECKER, *Social Thought from Lore to Science*. 2Bde., New York 1938, p.888ff. その他頻出; 総じてテンニェスは今日のアメリカで引用されることが多く、追跡が難しいほどである。またその70歳の誕生日に因んで多くの賛辞がアメリカで現れた。たとえば次がそうである。Louis WIRTH, *The Sociology of Tönnies*. In : *The American Journal of Sociology*, vol.XII (1926), p.412-422. コメントの最後で論者は次のように記している。《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (Community and Society) は》 (p.422) 。; また逝去に因んでやはり多くの追悼文が現れた。; その後の言及については次を参照, Rudolf HERBERLE, *The Sociological System of F. Tönnies: "Community and Society"*. In : Harry Elmer BARNES, *An Introduction to the History of Sociology*. Chicago 1948. この記事は元は追悼文として次の専門誌に掲載された。参照, In: *The American Sociological Review*, II (1937). なお生誕百年にあたって記事が予定されている。; また戦後まもなく、テンニェスの意義を強調した記事として次を参照, Albert SALOMON, *German Sociology*. In: G. GURVITCH and W.E. MOORE, *Twentieth Century Sociology*. New York 1945, p.593-596.; 最近ではまた次の論考が書かれている。Rudolf HERBERLE, *Das soziologische System von Ferd. Tönnies*. In : *Schmollers Jahrbuch*, 75.Jg(1955). ; J.P. KRUIJT, *Gemeenschap als sociologisch begrip. Een kritiek op Tönnies*. In : *Mededelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, Afd. Letterkunde*. Amsterdam 1955. ここでのテンニェスへの批判は注目すべきもので、論の方向はこの小文と基本的に一致する。しかし本稿がすでに印刷中に届いたため、残念ながら僅かしか言及できなかった。

それに対してドイツでは、1920年代から議論はまったく止んだ。そのため1952年に、社会科学の分野で高い評価を受けていた専門誌にゲマインシャフト概念に関する論考が掲載されたとき、テンニェスの名前は見当たらず、論者にもそれを問題と認識する気配がうかがえなかった⁴⁾。

ドイツでのテンニェスのかかる完全無視は、少なくとも二通りが考えられる。先ず、ドイツの社会学は、1933年以後、ナチズムによってまったく中断してしまったことが大きな原因と言える。加えてテンニェスは不屈かつ筋金入りのリベラリストで、ナチス＝ドイツの下では《好ましからざる人物》として容赦ない攻撃の対象となっていたのである⁵⁾。

[原注5] たとえばキールの新聞『民の戦い』 (*Volkskampf*) は1933年1月6日付で「屋根の上に老いばれ・・・」の見出しからも見紛いような容赦ない弾劾の記事を載せた。

4) Waldemar MITSCHERLICH, *Vom Wesen und Bau der Gemeinschaft*. In : *Ztschr.für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd.108 (1952).

5) [訳者補記] 原注が長大であるのと、テンニェスの受容に関わるデータであるため本文に組み込む。

これは、テンニェスが1932年12月31日付の『フォス新聞』(Vossische Zeitung)に掲載したプレスラウ大学におけるアンティ・セミティズムの逸脱を指摘した記事への反論であった。テンニェスは《野蛮への逆戻りの危機》を説いたのである。またこれには*アンナ・ジームゼンもテンニェスの側に立った。それへの指弾として、また『フェルキッシャー・ベオバハター』([訳注]ナチスの党機関紙)は1933年1月13日付で、これまた興味深い攻撃を加えた。《我々は野蛮人だって、面白いじゃないか、キールのフェルディナント・テンニェスやイエナのアンナ・ジームゼンなど精神の巨人というの尻馬に乗って文化だとか言って空っぽのデモゴギーで騒ぎ立てているとなれば》。その後の推移は、誰が正しかったか明らかである。テンニェス自身は、攻撃に対して1933年1月25日付の『フォス新聞』紙で反論した。また予めナチスに対しては警戒を説いていた。1932年7月29日付の『シュレースヴィヒ=ホルシュタイン民衆新聞』紙上で選挙にあたり社会民主党への支持を表明してこう説いた。《このNSDAP(=国家社会主義ドイツ労働者党:ナチス)は政党ではないと言い張っているが政党以外ではないだろう。事実、我らの事情を何も存ぜぬ外国人を総統とやらにいただく政党。しかもその御仁たるや、現実を皆目御存知ないまま不明瞭で熱にうなされたようなお考えで、弱い頭で問題の解決を妄想していなさる。それらの問題は、過去何世紀にもわたり、国民中の賢明な人々が少なくとも幾百年にわたって孜々と取り組んできたものに他ならない。片や、今言うところの党の最終目標は諸関係全てを破壊することにしかなるまい。状況が徐々に改善されていたところで、世界危機に見舞われたのだが、それには富を誇るアメリカ合衆国すら難渋している。況や貧しきドイツ国に於いておや……》。

その80歳の誕生日には記念論集と『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の第8版、それに著作*『近代の精神』が刊行された。しかし*ゲオルク・ヤーンが当時のドイツの代表的な雑誌に載せる予定であった記念エッセイはもはや印刷されず、そのため出版社は広告を長文にして配布するという苦肉の策をとった⁶⁾。逝去にあたっての追悼文もドイツでは僅かしかみられず、*ハンス・フライヤー、*ヴェルナー・ゾムバルト、*ピョートル・ストルーヴェ、*レーオポルト・フォン・ヴィーゼ、*ヴェルナー・ツィーゲンフスなどにとどまった。またフライヤー、ピョートル・ストルーヴェ、ツィーゲンフスはふれる程度であった。さらに大方は沈黙に徹し、追悼文を寄せなかった⁷⁾。それが当時の政治的な状況だったのである。

[原注7] Hans FREYER, *F. Tönnies und seine Stellung in der deutschen Soziologie*. In: *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd.44 (1936).フライヤーはこう記している(S.9)。《我らがドイツの目下の政治的信

6) *Reine und angewandte Soziologie. Eine Festgabe für F. Tönnies zu seinem achtzigsten Geburtstag*, hrsg. von Ernest JURKAT. Leipzig 1936.; F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8. Verbesserte Auflage. Leipzig 1935.; F. TÖNNIES, *Der Geist der Neuzeit*. Leipzig 1935.

7) [訳者補記] 原注が長大であるのと、テンニェスの受容に関わるデータであるため本文に組み込む。

条・意志で彼(=テンニェス)を意味づけしようとするのは愚かで不遜なことである》。; Werner SOMBART, *Der wissenschaftliche Geist: Zum Gedächtnis von F. Tönnies*. In: Kölnische Zeitung, Nr.195 vom 17.April 1936.; DERS., *Soziologie: Was sie ist und was sie sein sollte*. Berlin 1936. ここでは、テンニェスは、終始、自然科学的社会学の枠に入れられている。; Peter STRUVE, *Ferd. Tönnies (1855-1936). Zur Würdigung seines sozialphilosophischen und soziologischen Schaffens*. In: Ztschr. für Nationalökonomie, Bd.VIII(Wien 1937). 非常に真摯で深みがあり、と共に政治的にはプラスの影響もマイナスの影響も期待しえなかったテンニェス評であり、それはこの時期にはウィーンがまだ自由であったことを映している。; Leopold von WIESE, *Ferdinand Tönnies Einteilung der Soziologie*. In: Frankfurter Zeitung, Nr.192/3 vom 15. April 1936. ただしここでは論者は、テンニェスに対する批判として何度も繰り返してきた、テンニェスがポジティブな《非敵対的な》関係性にしか本来の《社会的sozial》(であること)をみとめなかったことには触れなかった。; Werner ZIEGENFUSS, *F. Tönnies*. In: Rundschau des Reichsbundes der deutschen Verbrauchergenossenschaften, 33.Jg. Nr.17. (25.April 1936). しかしツイーゲンフスは、テンニェスが生活協同組合(Genossenschaft)に関心を寄せたことを根拠に、テンニェスをアンチ・マルキストに仕立てることを必要とみなした。しかし次の一文はまことにグロテスクである。《テンニェスの社会理論は、詰まるところ、社会現実のリベラリズム的でメカニク的な読解・形成に抗って、真正のゲマインシャフト精神と人間意志の生きた作用を貫徹ための戦いである》。

この他の当時はなお存続していたドイツの社会科学の雑誌を見渡して、どれがテンニェスへの追悼文を載せ、どれが載せなかったかを調べるのは興味深い企てになるだろう。たとえば、「総合国家学雑誌」は、追悼文を載せなかった不名誉のゆえに記録されることになるだろう。もっともまったく無言ではなく、次の論考を載せた。Andreas PFENNIG, *Gemeinschaft und Staatswissenschaft. Versuch einer systematischen Bestimmung des Gemeinschaftsbegriffes*. ここにはやはりテンニェスの名前は挙げられていない。代わって、次のようなまことに記念碑的な解説がついている。《ゲマインシャフトが立脚するのは<精神>に非ずして<人種>である》(S.312)。In: Zeitschrift für die gesamt Staatswissenschaft, Bd.96 (1936)。; また自由な空気のウィーンらしい批判的を呈したのはマックス・アドラーだった。Max ADLER, *Das Rätsel der Gesellschaft. Zur erkenntniskritischen Grundlegung der Sozialwissenschaft*. Wien 1936.そこでは、論者なりの観点から、テンニェスの基本カテゴリーの対立性に疑義を呈し、特に(これを論じた数少ない一人として)ゲマインシャフトの形而上学的な根拠を指摘した(S.183-185, 204/5)。; 重要なのはカール・ディールの見解である。Karl DIEHL, *Der Einzelne und die Gemeinschaft*. Jena 1940. ディールは、マックス・アドラーと同じく、《ゲマインシャフトもまたゲゼルシャフト的な現象である》と言う(S.14/15)。

第二次世界大戦後のドイツでは、テンニェスへの批判的な言動は実際にはほとんど聞かれなくなった。基本概念の位置づけについて議論を続ける必要性の著しい減退は見紛いようがない。それゆえたとえグラボフスキーは、ゲゼルシャフト無きゲマインシャフトが考えられないだけでなく、逆に本来は純然たるゲゼルシャフト的な諸関係も(長期にわたって慣れたものなると)ゲマインシャフト的・《有機的》性格を帯びる可能性があることを強調した(これはすでにマックス・ウェーバーが力説していた)。参照, Adolf GRABOWSKY, *Die Po-*

litik, ihre Elemente und Probleme. Zürich 1948, S.14/15.; 最近ではフリードリヒ・ビューローが事典の項目にこれらの概念をあらためて取り上げたが、そこに付けられた文献の乏しさからも、20年以上にわたってドイツの論壇には発展が無かったことが強く目を惹く。参照, F. BÜLOW, Art. „Gemeinschaft“ und „Gesellschaft“ In: W. BERNDORF und F. BÜLOW, Wörterbuch der Soziologie. Stuttgart 1955.; それに対して意義があると思えるのはティーゲンフスの取り組みである。参照, Werner ZIEGENFUSS, *Handbuch der Soziologie*. Stuttgart 1955, S.146-156. ここでティーゲンフスは、予て示唆していた観点を改めて明示した。参照, DERS., *Gesellschaftsphilosophie*. Stuttgart 1954.; なお補足しておくべきだろうが、社会学のこれらの基本概念をめぐって、一聯のなおも空疎な解釈がみられることである。ロマン主義的・イデオロギー的な解釈では次を参照, Max RUMPF, *Das gemeine Volk*. 3 Bde. Stuttgart 1933-36. また民俗学からの解釈では次を参照, Max Hildebert BOEHM, *Das eigenständige Volk*. Göttingen 1932. あるいはナチズムの解釈では*M.H.ベームを参照, Gunter IPSEN, *Programm einer Soziologie des deutschen Volkstums*. 1933. これらは事実即ち本質性が皆無であるために退散させて然るべきと言ってよい。また最後に挙げたナチズムに染まっていることではブローパイルも同工である。参照, Wolfgang BROBEIL, *Die Kategorie des Bundes im System der Soziologie*. Diss.(Frankfurt) Gelnhausen 1936.

二つ目の見方はハンス・フライヤーが指摘したもので、すでに1930年に明言されていた。すなわち《その影響は広く一般的で……そのため名前は表に出ず、またほとんど地下の底流となっている》というのである⁸⁾。たしかに、成功とは、一般的で疑問の余地なく教養の一部となることで、本来の著者への追憶などは消えてしまうような状況にあるとは言えるだろう。しかし他方で、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは余りに多く議論の対象となり、とりわけ《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》の二極性が正しいかどうか疑義が投げかけられてきたため、疑問の余地なき通念と言えよう状況ではなかった。さらに今日の私たちは、当時の激しい確執から遠くなっている。そのため、問題の全体を改めて検討することができると共に、検討しなければならない。以下の考察は、スケッチ程度ながら、深い分析を要する込み入ったこの問題性を概観する試みである。

II テンニェスの思念の振幅

厄介な二つ目は、テンニェス自身が、その基本理解において必ずしも一定していなかったことにある。それは、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の初版(1887)と第2版(1912)のタイトルを比較することからもうかがえる。初版のサブタイトルは「経験的文化形式としての共産主義と社会主義」(*Abhandlung des Kommunismus und Sozialismus*)

8) Hans FREYER, *Soziologisches als Wirklichkeitswissenschaft*. Leipzig 1930, S.185. この言い回しは、彼の業績が得た万人承認の語としてテンニェスが保存したもので、ここでは次の箇所からの引用である。F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie*. Stuttgart 1931, S.14.

als empirischer Kulturformen) であった。のみならず、1880-81年に書かれた草稿のサブタイトルは「文化哲学の理論仮説」(*Theorem der Kulturphilosophie*) であった⁹⁾。これは、すでにこの著作の構想段階でテンニエスの考えが必ずしもまとまっていなかったことを推測させる。もっとも、版を重ねても改変はほとんどなされなかったにも拘らず。しかしすでに初期にあらわになっていたように揺れ動きはあったと言うべきだろう。その振幅は、違ったサブタイトルごとに見てゆくと、全体の意味のニュアンスが異なってくる点にある。すなわち、それぞれによって異なった前提でテキストを読むことになるのは避けられない。それだけでなく、主著をテンニエスの他の著作と比較すると、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトから導き出せることがらも、またとりわけ二極対立としての問題性のシステム構造も常に同じではないために、困難はさらに大きくなる。

もとより、テンニエスの全体像を、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの問題性が含む諸側面から突きとめるのはここでの課題ではない。それは非常に多く頁を要する作業になってしまうだろう。それゆえ最も本質的で最も欠くべからざることがらに限定するのもやむを得まい。と共に、それはこの天才的な着想に胚胎する根本の問いにより深くかかわる可能性を得ることにもつながる。基本的には、今日までテンニエスをどう見るかに関して、見方は非常に静的であった。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトをめぐる、テンニエスの考え方は1887年当時も以後も（ただ一つ、1931年の「社会学入門」がテンニエス最後の転回を映していることを除けば）同じとみなされていたのである。事実として、テンニエスの思考は、当初は明らかに変転のなかにあった。それは1880-81年から1887年に至る時期と、より強烈な色合いを呈する1887年から1912年に至る時期に分けられる。後者は『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の初版から第2版への期間である。後年の見解の変化を別にすれば、第2版においてはじめて本来の基準的なものが得られたと言ってよい、サブタイトルの意義大きい変化はそれを示しており、しかしまたそれ以後は不変であった。これについては、両版の間に書かれた比較的小さな論文において準備され軌道が敷かれていた。

1880-81年の草稿のなかでは、特に二つの思念群がみとめられる。一つはゲマインシャフトとゲゼルシャフトの心理学的な基礎付けの試み、二つ目は歴史学的な要請である¹⁰⁾。

9) テンニエスの著述の最良の目録（他所では見つからない数々のデータを細かく収録している）はエルゼ・ブレンケ (Else BRENKE) によってまとめられ、次の雑誌に掲載された。参照, *Reine und angewandte Soziologie*, S.383-403.; また『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の各版につけられた序文と、ここで言及した予備的な研究は次に収録されている。参照, F. TÖNNIES, *Studien und Kritiken*, Bd.I. Jena 1925.

10) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Theorem der Kulturphilosophie*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.I, S.33.

ここに提示した概念を人間が共に生きる歴史的現実ならびに現今の現実近づけ、いずれの概念をもこれらの現実に応じた目安として措定することだが、それによって、経験の事実は、すなわちそれらへの関係のあり方において表現されることにより（もとより数式のような厳密さには程遠いが）、少なくともその輪郭から言えば学問的省察の最初の諸条件、すなわち比較可能性が得られることになる。

そこにおいて、《現実実態が（ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの）概念に照応する》ことが証明されると言う。それゆえ「文化哲学の理論仮説」の要点は正にここにあったのだが、しかしそうしたものとしてのテンニエスの試みは後に屢々誤解を受けることになった。その一つとして、テンニエスを主要に*オスヴァルト・シュペングラーと同じ軌道にあると見る人々が現れた。他方で、一種の客観精神の哲学がみとめられるという人々もいた。この点で強調しておくべきは、テンニエスが初期には社会学に対して幾分気後れを見せており、それが「文化哲学の理論仮説」という言い方になったことである¹¹⁾。このほか、軽微ながらも進化論の音調がところどころで響くが、これは時代状況を反映していると言ってよい。それともかく、本来の根本概念の問題性を第二版のサブタイトルにおいて取り出そうとしても、あまりうまく行かない。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、当初、他の諸概念と並んでいたのである。つまり、理念型（あるいはテンニエスの意味での理想型や規準概念）はまだ生まれていなかった。なおテンニエスははるか後年、《テキストのなかで<規準概念>の語をもちいたのは一度だけだが、問題点はすでに常に睨んでいた》とのコメントを聞かせたことがあった（1931年）¹²⁾。しかしこれを持ち出してもあまり役立たない。むしろテンニエスの観点の全体は、たしかに「文化哲学の理論仮説」におけるパースペクティヴからもみとめられるとしても、後年のそれとは開きがある。

とまれ、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』初版のサブタイトル「経験的文化形式としての共産主義と社会主義」は基本的には最初期の「文化哲学の理論仮説」の直接的な延長線上にあり、それはその序文からも明らかである。それに対して特に強調しておきたいのは、その序文と本文の間にはコントラストが見られることである。本文では、すでに（テンニエスの意味での）イデアルテュプスが実際には論じられていると見てよいが、「序文」の方は、むしろ（引用されていることから）*オーギュスト・コントや*ハーバート・スペンサーや、*ヘンリー・サムナー・メイン卿、*ヨーハン・ヤーコプ・バッハオーフェン、さらに*ルイ・M・モーガンや*カール・マルクスの意味での発展史的な意味合いで

11) F. TÖNNIES, a.a.O., S. 6. 第3節の終わり

12) F. TÖNNIES, Soziologisches Symposium. In: Ztsch. für Völkerpsychologie und Soziologie, VII (1931), S.138.

ある¹³⁾。なお後年、特に第三版(1919年)の「序文」では、テンニェスは、サブタイトルの変更についてやや詳しく解説する必要を覚えたことと記し、特に初版のサブタイトル《社会主義と共産主義》の語義をより鮮明に説明している。そこでは、ある種のあいまいさの解消につながる理念型(イデアルテュプス)の概念が明言される¹⁴⁾。

これら諸々の概念に学問的内実をあたえることを意図した。その内実は、語法の正しさを裏付けると同時に、現実の特定の現象、ならびに人間に関する観念・理念^{イデアル}(びったり重なりはしないが)近いイデーの性格を有すべきであった。

ちなみに第二版の「序文」では、《純粹社会学》の語が一度だけ現れる。それも、純粹社会学を《経済学の補助学的一种》とする明快な意味においてである¹⁵⁾。しかしサブタイトルが決定的に変更された後であることから、むしろ重要なのは、その以外の説明であろう。それが、誤解を避けるためとして綴られるのは、さらに後の「社会学入門」(1931年)の冒頭での明快な説明と同工である¹⁶⁾。なおこの設問に関する自己説明では、19世紀末から『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』第二版(1912年)までの間に、ホップズ論に次いで書かれた一聯の論文が重要であろう。そこに含まれるもので先ず挙げるべきは1899年の「社会学序説」で、そこでは《中心的な二律背反》が理念型的な概念形成体として明瞭にあらわれる¹⁷⁾。なおそれに先立ってテンニェスは、古い発展史的な考え方とはきっぱり袂を分かち説明をしており¹⁸⁾、その立場を明らかならしめる上で大いに裨益する。それが1907年の重要な論考「社会学の本質」で、そこではじめてテンニェスの視点が明言された¹⁹⁾。

この理論仮説([訳者補記]ゲマインシャフトとゲゼルシャフトを指す)については、たとえば生物学者が樹木と草を分けるように、また動物学者が脊椎動物と無脊椎動物を分けるように分類をほどこしているとの理解や分析がなされてきた。こうした分

13) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 1. Auflage* (1887). In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.42/3.

14) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 3. Auflage* (1919). In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.58/9.

15) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 2. Auflage*. (1912). In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.56.; なおS.55には、社会的諸関係の二種の《類型(Typen)》の語が注目される。

16) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S.VI.

17) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899). In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.65-74.

18) F. TÖNNIES, *Herbert Spencers soziologisches Werk*. In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.75-104.; DERS., *Die Anwendung der Deszendenztheorie auf Probleme der sozialen Entwicklung*. In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.133-329, Preisschrift von 1900.

19) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907). In: Studien und Kritiken, Bd.I, S.350-368, bes.353.

析は、私の考えているところではない。ここでもちいた手続きについて私が比較のために挙げるとすれば、化学者が理論的な科学としておこなう種類のものであろう。そこで重要になるのは、実地区分よりもむしろ理論区分である。社会的諸関係という現象はその諸元素に分解し、この諸元素を概念的に呈示するのだが、そのさい、現実のなかで諸元素が純粋な形状において現れることがあるのか否かは、どちらでもよい。(強調は引用者=ケーニヒによる)

III 心理学としての社会学とその系譜

とりわけ今日の読者を屢々困惑させる二番目の障碍は、テンニェス自身が、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二概念を心理学的に導き出す試みを何度もおこなっていることである。テンニェスのこうした初期の書き物はすこぶるプリミティヴと言えるが、そう言ったからとて、批判のための横柄な批判とは聞かないでいただきたい。それらの書き物が相照らすのは、始まりつつあり通念でもあった時代思潮で、それは、社会学をもはや自然科学(生物学・生理学・地理学など)としてではなく、心理学そのものとして位置づける趣旨にあった。テンニェスが、その師表と仰いだ*ショーペンハウアーの個人主義に即した心理学を社会科学的思考に接近させるところまで行っていたとしても、彼の視点は、差し当たりその段階であった - すなわち、今日の進展した状況を踏まえた論議から言えば、古いタイプのナイーヴな意味での心理社会学の視点にとどまっていたわけである。加えて、テンニェスの場合、さらに二つの問題群がからんでいた。それは多くの場合必ずしも明瞭にみとめられるわけではないが、それを取り上げるのは、テンニェスを理解する上でも、また今日の私たちがなお関わる一般社会学の問題にとっても意義あるためである。この二つの問題群はほとんど認識されないが、その一番目は、テンニェスの初期の(多くは人目にふれなくなった)エッセイ類で扱われていたものでもあった。特に哲学のターミノロジーをめぐる懸賞論文で、もとは1897年に執筆され、ようやく1906年に印刷された。あるいはよく名前が挙がるがほとんど読まれもせず評価されることもない*『世論批判』である²⁰⁾。この著作がテンニェスにとって他の著作に比べて重要性が低かったと考えるのは誤りであろう²¹⁾。二番目の問題群は、これまたほとんど注目されてこなかったが、それは、心理学と哲学をめぐる当時のある種の一面性から(これは新カント派的な見方が優勢だったことによるが)、テンニェスの業績の独自性がまったく視野に入らなかったことである。実際にはテンニェスは、これから見てゆくように、すでに現象学と存在論の方向をとって

20) F. TÖNNIES, *Philosophische Terminologie in psychologisch-soziologischer Ansicht*. Leipzig 1906.; DERS, *Kritik der öffentlichen Meinung*. Berlin 1922.

21) J. LEIF., *La sociologie de Tönnies*. Paris 1946, p.214/5.

いたのだった。

テンニェスの初期の1880-81年期の心理学の試みについては、差し当たっては、まったく踏み込まないでおきたい。それは、もっぱら歴史学が重みをもつ問題へ誘惑されかねないからである。ただ注目しておきたいのは、テンニェスが、非常に抽象的かつ構成的な心理学、それどころか(*ヴィルヘルム・メッツガーが『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』第二版への書評²²⁾で強調した)《観照的》な心理学をたずさえて、成功への野望を遂げることができると考えていたとすれば、要請の実際との間に明らかな不一致が存したことがある。その原因は、他でもなくテンニェスが徹頭徹尾《内省》の方法による心理学に没頭したことにあり²³⁾、それは彼に(そうした行き方がテーマとして明瞭に踏み出されたのではあったが)現実への道をまたもや閉ざすほかなくさせた²⁴⁾。

倫理的な概念は、それが人間の心情の中に存すると考えられる限り、またそれに違反する性向も併せて、理論的な考察の対象そのものである。しかし哲学にとって大事なものは、それらと他の意志方向との関連を認識することであり、さらに、他の人間的あるいは人間の外部の事態との関連を認識することである。

この文章の前半は経験的なエートス研究の方向に向かっているのに対して、後半は、構築的・心理学的な省察にとどまっている²⁵⁾。

この点から見ると、基本的に社会学と社会心理学により近かったのは、若き*デイルタイであった。とりわけ、1875年の「人間・社会・国家に関する諸学の歴史研究」である²⁶⁾。

22) Wilhelm METZGER, *Bespr. von «Gemeinschaft und Gesellschaft»*. In: *Weltwirtschaftliches Archiv*, II (1913), S.185.

23) 次の発言は典型的である。《精神の事実については誰もが自ら一人で経験することができるが、それが他者一般にも存在することについては推論による認識によるしかない》。F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Theorem der Kulturphilosophie* (前掲注10), S.12.

24) 同上,S.11.; 同じ意味での同様の言い回しは次の箇所に見出される。F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.351. 《人間の生の営み、それと共に人間が共に生きていることは、〈外から〉観察することができる。しかしその理解は〈内から〉しかありえない。すなわち私たち自身の自己認識から解説しなければならない。それを通じて私たちは、人間が何か激しい衝動によって必然的に規定されること、すなわちこれらの衝動が促されたりあるいは阻まれたりすることに伴う強い感情を、そして人間が自らの意味感覚および意味感覚が集まる場である理性を、感じるもの・覚るもの・警告するものとして駆使し、それによって友愛や敵意、また快適や危険を遠隔からも予め弁別するのである》。

25) 呈示と価値づけにも言い得ることは次を参照, J. LEIF., *La sociologie de Tönnies* (1946 前掲注21), 13ff, bes.p.18.

26) Wilhelm DILTHEY, *Ges. Schriften*. Bd.V. S.59/60. [邦訳]『精神科学序説(デイルタイ全集1)』(法政大

社会の根本的な力を精密に確定することがいかに困難であるとしても、理論家であれば誰でも、この力が複合的で派生的な事実であると当然承認せざるをえないであろう。しかし*[ヴェイルヘルム]・アルノルトがさらに後退して、個々人の心に生得的な三つの根本衝動が心理学的事態であると主張するなら、この仮定は、思弁哲学のあまりに大胆な構成物以上の何ものでもない。・・・・・・・・

改めて押さえておくべきだが、テンニェスは抽象的心理学を決して克服してはいなかった。それは初めからしっかり根付いており、(後に示すように)時に別の要素が顔を見せることがあっても、そちらの方は二次的な役割しか果たさなかった。中心は、展開力とは無縁な教条的な心理学で、それが、現実とふれ合わないまま言葉ばかり活発なのである。

思想としては副次的ながら、これを理解するために、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』初版で言及される*カントと*ヒュームへの瞥見も必要だろう。ヒュームの名前が挙げられることから、テンニェスは合理主義と経験主義を調整しようとしたとの印象が起きようが、最後にはカントの考え方が《より深みがある》と共に唯一正しいものとされる。しかし他方でテンニェスは、ヒュームとカントが結びつく交点をも指摘していた。

(ヒュームでは因果律が)規則的な時間的継起の知識の獲得を通じて(理解されている)。事実を押さえるなら、初めは緩やかで最後は頻繁な繰り返しが習慣であるようなあらゆる聯関が固定し、そして必然的すなわち因果性として解されることになる。因果律は、事物から抽出され、人間のことがらに置き直されたものだが、それを理性のカテゴリーとして措定したカントによって確立された。()はケーニヒ

同時にテンニェスはヒュームを批判した。ヒュームは《萌芽から成長しゆくと共に力や性向などの素質を含む精神のイデーによる根拠づけ》を怠った、と言う。なおテンニェスがこれと同じ言い方で歴史主義を批判したことについては後にふれる。またショーペンハウアーが選りによって*スピノザとの関聯で挙げられるが、そのショーペンハウアーから心理学者として受けた影響の件りではまた、《純粋な》先験哲学の用語が、《我々の理性の構造のなかに成長した永遠の機能》としての本源的意志素質という教説のために応用される²⁷⁾。この哲学的批判(特徴的なことにこれをテンニェスは心理学的批判とも呼んでいる)

学出版局 2006) 所収 (p.551-599) 同論文は伊藤直樹(訳)、引用箇所はp.581-582。なお人名アルノルトには名前を補い訳注をほどこした。

27) 各版の序文は次に収録されている。F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 1. Auflage*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.I. (前掲注13)

が、(それが学問である限りでは)、類型学、それも合理主義的かつ経験的であるような類型学のなかで現実化する、と言う。と共に、これまたテンニェスが後年おこなった合理主義と歴史主義の統一とアナロジーの関係に立っている²⁸⁾。次のような論説である²⁹⁾。

経験論的方法と弁証法的方法とは互いに促進し合い補完し合う。両者は、互いに出遣い・闘い・結びつくという端的な傾向を示す。それは心理的リアリティとして把握し得るだけでなく、むしろ広く知られていることがらでもある。なぜなら私たちは、人間的意志を私たち自身の意志として知っており、また人間の歴史が、(歴史以外の)爾余の自然によっても(変転しつつしかも厳格に)制約されているなかではあれ、そうした意志の総和であることを知っている以上、如上の傾向は、人間の全般的かつ個的な心理のなかではじめて確証される。全般的な心理という事実は、歴史的な文化やアクチュアルな文化、言い換えれば人間の共生とその価値に他ならない。

しかしこれによって、私たちは、純粹に個人に即した心理に、またそれに伴い心理社会学へ立ち返ったことになる。さらに、特に、《素質》にかかわる本来の心理学へ戻った。なおここで言われるような心理学は、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの心理的根拠づけというかたちで、その初版から第八版までまったく変更が加えられずに保持された。それは、(この後取り上げるような)テンニェスの姿勢を勘案すると驚くべきことである。と言うのは、1887年の初版の直後、テンニェスはこれとは別の一聯の見方による作業にたずさわっていたからである。とは言っても、それが主著に及んだわけではなく、その点では、1880-81年時点の諸要素は、まったく19世紀風にわずかに変化が加えられた基本を1935年まで持ち続けた。と共に、テンニェスは、その間にまったく違った平面へ移っていた。たしかにこれは、ある種の誤解を醸成するのに本質的にはたらいた。なおここで強調しておくべきであろうが、私たちは、今のところ、なお本質意志と選択意志の二極関係の議論へは進んでおらず、テンニェスのまったく個人(あるいは普遍的)素質心理をとりあげているだけである。

少し前になるが、テンニェスの基本概念はカントにおける先験的(アプリアリ)カテゴリーでもなく、事実を踏まえた帰納的考察の成果でもないとのまことにもっともな指摘がなされた³⁰⁾。しかしそのさいジョゼフ・ライフがもともと探らなかった問いがある。なぜテンニェスの場合はそうなのか、である。これについて言えば、ゲマインシャフトとゲゼ

28) 同上, S.39/40.

29) 同上, S.40.

30) J. LEIF., *La sociologie de Tönnies* (1946 前掲注21), p.119ff.

ルシャフトの概念は、それが《意識一般》からではなく、(心理学によって明白に定義されるような)《人間の自然(本性)》に発するということだけでも、カントの意味でのアプリアオリを呈示するのではない。しかし他面では、経験論的な行き方に帰着するのでもない。なぜなら、テンニエスの心理学は、徹頭徹尾、構成的な素質心理学だからである。これは強調しておきたいことだが、本能理論の意味で(たしかにテンニエスは、時に、その方向の言い方をするとしても)受けとめる必然性はない。実際、テンニエス自身、その説くところの本質意志が、*ヴィルヘルム・ヴントの言う意識無き《衝動》と混同されることには反撥した³¹⁾。《自然な》結集("natürliche" Verbände)も、常に《我々の意識のなかで、また我々の意識に向けて》のみ結ばれる、とされる。さらにテンニエスは、人間の自然な衝動は決して意志と無関係ではなく、人間の意志を《合理的欲求》(appetitus rationalis)と考えていたことは、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』のなかのクラシックな命題とも照らし合う(第二部第一章[一])³²⁾。

人間のあらゆる精神的活動の特質は、それに思惟(Denken)が参与している点にあるとされるから、思惟を含むところの意志と意志を含むところの思惟とが区別される。各人は緊密な一つの全体をなしており、種々様々な感情や衝動や慾望がこの全体の中で統一されている。しかしこの統一は、前者の意味においては実在的・自然的な統一として、後者の意味においては観念的・人為的な統一として理解されなければならない。わたしは、前者の意味における人間の意志を本質意志(Wesenswill)と呼び、後者の意味におけるそれを選択意志(Kürwill)と名づける。

これを見れば、後世テンニエスに帰せられた、ゲマインシャフトを《意識無き》あるいは《意識下の》あるいは《欲望の》その他の共に生きるにあたっての非合理的な形式ととらえあらゆる不当な試みは排除されよう。ゲマインシャフトもまた合理性の形式をもっていることについては、後にふれたい。

しかしこの対立は本来のアプリアオリとは解し得ず、さりとて経験的な概念でもないとするれば、どのように整理すべきか、との問いが浮上する。この点でライフが、テンニエスの《批判的》基本概念は(全ての基本概念が一般にそうであるのと同じく)これらの理念型

31) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 2. Auflage* (前掲注15), S.55. 同く S.53 (本文); さらに次の箇所をも参照, F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, Jena 1926, S.269/70. その他類出

32) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8.Aufl. 1935, S.87, [邦訳] p.124. この命題は、近似した表現で、それどころか同じ表現で何度も繰り返される。

の総合性からも、また特にエレメントという様態からも区別される³³⁾、と強調したのはもともとである³⁴⁾。

しかしこれらのエレメントは、社会生活をその多様性において把握し得るには余りに数が少ない。しかし特に見逃せないのは、ゲマインシャフトのなかのネガティブな社会的諸関係の数々がこれによつては総じて把握し得ないことである。

この点には、後にもう一度立ち返りたい。差し当たってコメントを加えておきたいのは、テンニェスが理念型と呼んだものが現実のなかには現れないからとて、テンニェスの立ち位置はいささかも揺るがないことである。これがテンニェスによって論議されなかったことはともかく、そもそも理念型的な概念形成の本質にそれは含まれている。しかしまたこうも言われよう。社会的存在の概念には、この概念の決定的・総合的な構成部分にあたる諸特徴が属しているわけだが、それには（テンニェスによつても把握されていたように）ラディカルな対立的な特徴もあり、そうである以上、この対立は総合的な次元においてそれ相応のものを現実として見出すはずである、と。これに対して言うべきは、これら諸々の概念のすべてがまちがって形づくられたことで、当面、ちらとでも、これらの本質性によってとらえられた《諸々のエレメント》に思いをいたすべきことである。システムティックなもの及び現実の平面における対立の並行性の意味には、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念の哲学的土台を検討するさいにもう一度立ち返ろう。ここで言うべきは、すでに心理的な基礎付けにおいても、古い構成的な心理学を脱して本質的な歩みを進めることができるには、あまり一般的に哲学的なエレメントが加わって作用していることである。特に主著は初版から第八版に至るまで、その誹りを免れ得ない。

しかしここでは、テンニェスについてはそれ以外にも検討すべき諸点があるのかどうかを洗っておきたい。

IV 社会学の課題 — 純粹社会学と経験

事実、テンニェスには他にも可能性が広がっている。1907年の『社会学の未来について』では、一方では、《概念的基礎に接続して、推定された因由のあり得べき現実的な作用を純粹な図式において呈示する演繹的方法》について述べられる。しかし他方でテンニェスは、帰納的方法、すなわち観察と実験、それを通じて事実を収集し分類することを課題と

33) J. LEIF., *La sociologie de Tönnies* (前掲注21), 128ff.

34) J. LEIF., *La sociologie de Tönnies* (前掲注21), 129-138.

する行き方をも説いている³⁵⁾。また短い論説「社会学の課題」(1909年)では《純粹社会学》についてこう論じられる³⁶⁾。

(純粹社会学は)もっぱら概念すなわち我々の思考の形成体にかかわり、たとえ経験に依拠することがあっても、本質的に経験からは離れている。純粹社会学は、経験のなかにあつて比較されるべき内実の相互の諸関係を表現するうえで尺度としてはたらくことに適するものでなければならない。この目的に向けたそうした諸概念のシステマティックな活用が応用社会学となる。それゆえ筆者は、応用社会学については、何らかの実践をめぐる技術の教説をまったく考えてはいない……それは、動きのある諸現象と推移についての厳格に理論仮説的な呈示ならびに説明である。

従来、経験の位置にあつたのは構成的な心理学であつた。ここで問いを立てたい。どのようにしてテンニェスは経験に至る道を探り、またそれを見出したのか、と。

先にふれたもう一つの小文「哲学のターミノロジー」のなかで、テンニェスは《心理学と哲学のターミノロジーにおいて現今みられる不明瞭と混乱の原因》を追跡するために、本質的には語義論的な検討作業に取り組んだ。この問題そのものは私たちの興味を惹かないが、そこで言われる《自然な》標識から《人為の》標識への展開が正にゲMAINシャフトとゲゼルシャフトと重なることには注目される。その諸々のいずれをも横に置いておくにせよ、この対比はまた慣習(Sitte 仕来り)と法(Gesetz)にも拡大され、そこでは語の活用の方での言語使用について特に分析が加えられる³⁷⁾。これによって、*行事と慣習(Brauch und Sitte)の語義論的な意味合いが明るみに出され、このためそこからは行動学(Ethologie)そのものへ入ってゆく道をも見せる位であつた。のみならず、あらゆる抽象的心理学や抽象的倫理学からもまったく自由になり得たと考えられるのは、その少し後に刊行された『慣習(Sitte)』(1909年)にこの上なく明瞭にその音調が響いているからである³⁸⁾。テンニェスの『世論批判』の出現もその軌道上でのことであつた。

しかしこの方向へは、なお一步先へ歩むことができる。テンニェスは、『ゲMAINシャフトとゲゼルシャフト』において前兆が見えていた抽象的な心理学や抽象的な倫理学から次第に離れ、歴史に沿つた行動学の方をとり、そればかりか、出発点の心理学でも歴史的な現実心理学(Realpsychologie)の方を撰んだ。後者は、特にヴィルヘルム・ディルタ

35) F. TÖNNIES, *Zukunft der Soziologie*. In: Studien und Kritiken, Bd.II, S.114.

36) F. TÖNNIES, *Die Aufgabe der Soziologie*. In: Studien und Kritiken, Bd.II, S.122/23.

37) F. TÖNNIES, *Philosophische Terminologie*, §§31ff.

38) F. TÖNNIES, *Die Sitte*. Frankfurt 1909.

イによっても構想されていた領域である。のみならずテンニェスは、さらに現象学の方向へも進んでいった。この二つの進展は、テンニェスを理解する上で意義が大きいと思われる。それが先ずは、その基本概念を適切に評価することを可能にするからで、それゆえここでしばし足をとめようと思う。

すでに『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の第二篇「本質意志と選択意志」の最後の第三章が「経験的意味」(empirische Bedeutung)のタイトルであること見出す³⁹⁾。この章では、《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》というカテゴリーの《女性と男性》への関係、《藝術家的な人間と技巧的な人間》への関係、《青年と老人》への関係、《庶民階級と教養階級(Volk und Gebildete)》への関係が検討される。これはただちに、《現実の共同生活の諸類型》(「附言：結論と概観」の§4)につながる。なおこの考察の結論への取り組みがなされたのは、テンニェスの最後の重要著作『近代の精神』(1935年)においてであった。またそこで特別の重要性を持つのは、その少し前の1931年にテンニェスが呈示していた《自画像》の記述である⁴⁰⁾。そのさいテンニェスは、日頃の流儀に反して、人間が結合する諸形態を挙げるだけでなく、一般心理学的な解説をもほどこしている。知己と隔意、親近と疎遠、信頼と不信、聯繫と孤高である。これに注目しつつテンニェスの他の発言と突き合わせると、テンニェスが初期の強度に構成的な心理学と並んで他の可能性にも目を開いていたことがうかがえる。のみならず、すでに論説「社会学の本質」(1907年)においても具体的な調査について論じていた⁴¹⁾。

現に行なわれている物の見方や判断、特に慣習(仕来り)的な尺度、交流の形式と合言葉、要するに全ての因習。なぜなら因習とのその範囲を認識することは、少なくとも社会的希求の本質と力の少なくとも意義多い側面だからである。

これが特に顕著になるのは、1913年の「社会学と歴史」においてで、そこでは歴史社会学的な心理学かつ(こう言ってもよければ)社会心理学的な歴史研究が促される⁴²⁾。

歴史の社会学的把握は心理学的でもなければならない。それは、純粋社会学にとっても前提となる諸民族心理学あるいは大衆心理学というかたちではあれ主要には社

39) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8.Aufl. 1935, S.146-168.

40) F. TÖNNIES, Art. "Gemeinschaft und Gesellschaft". In: A. VIERKANDT, Hrsg., *Handwörterbuch der Soziologie*. Stuttgart 1931, S.180-191.

41) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.359.

42) F. TÖNNIES, *Soziologie und Geschichte* (1913). In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, S.194.

会的な意味におけるそれである。

V 意志の二類型 — スピノザと存在論

構成的心理学と折にふれての歴史社会学的心理学への動きと並んで、同時にテンニェスにおいては、非構成的な心理学など他の形式への関心もみとめられる。すなわち《分析的》心理学で、それはヴィルヘルム・ディルタイの『記述的・分析的心理学のための諸理念』によっても代表される行き方である⁴³⁾。しかしテンニェス独自の理解は(ディルタイの)体験心理学(Erlebnispsychologie)の方向においてではなく、むしろ(かなり自由なところがあるが)帰納的・直覚的な分析においてであったことは、*ヘルマン・シュマーレンバッハのテンニェス評が指摘している通りで⁴⁴⁾、正に現象学的手法と言ってもよいくらいである。なおこうした理解は図らずもライフによって確かめられることになった。ライフは、テンニェスを全体として評したさい、テンニェスの社会的《本質 Wesenheiten》の分析をスピノザのそれと突き合わせることを、延いては論の赴くところ*エトムント・フッサールとも重ねることを力説した⁴⁵⁾。なおそうした見方は、ライフより20年早く*ルイス・ワースが呈示していたところでもある⁴⁶⁾。そこから改めて見えてくるのは、テンニェスのカテゴリー的思考はカントのそれとは実際には無縁なことで、これについては先にふれた。自明性に関するスピノザの思念は、事実として、カントの先験的カテゴリー理論の方向よりも、現象学的な本質観照の方向にあると言ってもよい。同じことは、テンニェスが帰納あるいは演繹とは離れたところに立っていたこととも照らし合う。彼の諸概念の特質は、ある種の直覚的に把握された複合的本質が新たな現実と直面することによって常に新しい・親近な概念を生成させるところにある。

ここで考えるべきは、そうした概念の正しさが証かされるのは、唯一、スピノザの命題が真理と仮定されるときである。スピノザによればいずれの観念にも観念構成されたものが照応し、*《諸観念の秩序および聯結は物の秩序および聯結と同一である》(『エチカ』第二部定理9[系])。そうであれば、テンニェスにおいても存在論の契機が否定しようもなく現れるのを見ることになる。これは今日までたいい看過されているが、その実、テンニェスの考えを本質的に明らかにすることにもなる。それゆえ今少しこれをたどる必要がある。テンニェスがスピノザに何度も言及していることは別にしても、自伝的なスケッチのなかでもスピノザを頻繁に、またスピノザについて講義をおこなったのは、特に親近

43) W. DILTHEY, *Ges. Schriften*, Bd.V, S.139ff.

44) Herman SCHMALENBACH, *Soziologische Systematik*. In: *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd.XXIII, 1926, S.1-15.

45) J. LEIF., *La sociologie de Tönnies* (1946 前掲注21), p.164ff., 167.

46) L. WIRTH, *The Sociology of Tönnies* (1926 前掲注3), p.419.

感をもっていたことを示している⁴⁷⁾。

スピノザがその体系を適切に説き、繰り広げるときには、自然科学に発しながらも自然科学の条件や限界を認識し、それゆえ自己と人間精神を根柢づけるにふさわしい思考の奥にある世界観が滔々と流れ出るのを見ないわけにはゆかない。

テンニェスとスピノザの哲学的な立場の(すでに指摘した)並行関係には、テンニェスがスピノザに頻繁に取り組んだことも併せて、内的な結びつきがあることをこの引用箇所は示していよう。それはテンニェスが自覚するところでもあった。

もとより、こう読み解いたとて、テンニェスが存在論を構築する意図をもっていたと言うわけではない。もしそう読むなら、却って彼の中心的な関心を見誤ることになりかねない。しかし言うておくべきであろうが、(これからそれをより鮮明に見ることになるが)テンニェスの思考のなかには、精神史の新旧の要素がからみあった特定の層があり、その中の唯一つよい関心である社会的相関の存在論的要素を押さえることが大事である。しかもこのテーマにテンニェスはめったにないほどの執着をもって取り組んだことも特筆しておきたい。そればかりか、テンニェスは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトという救いようのないナイーブなカテゴリーよりも、むしろ存在論的なこの上なく重要な座標軸を明るみに出すことに、より多く成功した。同時に、(ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの)概念の二極性を唯一ただしく価値づけるのも、この存在論的座標軸と言ってよいであろう。一口に言えば、テンニェスの全問題性の核心にある不足も、ここから明らかになる。

その論説全体の冒頭、《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》の導入口となる記念碑的な定義がなされ、またそこではテンニェスの存在論的な根本問題がこの上なく明瞭に表明される⁴⁸⁾。

人々の意志は、相互的なさまざまな関係性に立っている。そうした関係性はいずれも、一方からの働きかけ、あるいは一方が与えるかぎりにおいて、他方が応じ、あるいは受取るところの相互作用である。しかし、これらの作用は、その性質上他人の意志または身体を保存する傾向をもっているか、あるいはそれをそこなう傾向をもっているかのいずれかである。すなわち、肯定的なものであるか、あるいは否定的な

47) F. TÖNNIES, *Selbstdarstellung*. In: Raymund SCHMIDT, *Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen*. Leipzig 1922, S.233 (35 des Sonderdruckes), s. a.S.213 (15) dien und Kritiken, Bd.I, S.72.

48) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8.Aufl. 1935, S.3.参照. [邦訳]『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 p.16.

ものである。この論文では、相互肯定の関係だけが研究の対象としてとりあげられるであろう。このような相互肯定の関係はいずれも、多における一または一における多を表現している。それは、意志およびその力の源泉とみなされるところの、相互にとりかわされる援助、救済、給付から成っている。この肯定的な関係によつて形成される集団は、内および外に対して統一的に働く存在または物とみなされ、結合体 (Verbindung) と呼ばれる。この相互肯定的な関係そのものには、したがつてまた結合体には、実在的有機的な生命体と考えられるものと、観念的機械的な形成物と考えられるものがある。— 前者がゲマインシャフトの本質であり、後者がゲゼルシャフトの概念である。

この一對の対立が正しいかどうかの問い、また二項が適切かどうかの問いはさておき、この引用文では基礎付けの秩序が示唆される。その規則の下、《社会的関係》はその二つの現象のあり方 (スピノザの意味での属性と言いたくなるほど) であるゲマインシャフトとゲゼルシャフトに**存在論的に整理される**。同時に、結合体あるいは存在体は (《物》とまで言われるにもかかわらず) 手で触ることができるようなものではなく、むしろこうである⁴⁹⁾。

それが目にされたり把握されたりするには、そうした存在体をかたちづくり名付ける個々の人間の共通の思考を媒介にするほかない。この共通の意志を通じてのみ、それらは現存するのであり、それゆえ常にその意志に依存して把握される以外にはない。

この存在体の存在根拠は、とりわけ肯定の行為において表明される共通意志である。他方、認識根拠は、諸個人を互いに結び合わせる共通の同じ志向にある。存在根拠と認識根拠の**同一性** (スピノザの“因果性もしくは理性”) が私たちに、ここで存在論の方向を語ることを促してもいる。さらに、テンニエスの特徴であり、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』初版以来絶えずあらたな言い方で繰り返された意志と思惟の同一性も加わる。かくして、一方では意志と思惟の同一性の脈絡、他方では相互に肯定しあう関係の脈絡、その二つがたいていの場合ないまぜになって姿をあらわし、そこではかくして、多種多様な可能性からゲマインシャフトとゲゼルシャフトが導き出されるが、それは一方の思惟の中に意志が含まれ、他方、意志の中に思惟が含まれるのと同工である。

49) F. TÖNNIES, *Einteilung der Soziologie* (1924). In: Studien und Kritiken, Bd.II, S.433.

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』では、先に挙げた有名な一節がある（第二部第一章[一]邦訳 p.124）。

人間のあらゆる精神的活動の特質は、それに思惟（Denken）が参与している点にあるとされるから、思惟を含むところの意志と意志を含むところの思惟とが区別される。各人は緊密な一つの全体をなしており、種々様々な感情や衝動や慾望がこの全体の中で統一されている。しかしこの統一は、前者の意味においては実在的・自然的な統一として、後者の意味においては観念的・人為的な統一として理解されなければならない。わたしは、前者の意味における人間の意志を本質意志（Wesenswill）と呼び、後者の意味におけるそれを選択意志（Kürwille）と名づける。

1899年の論考では、これは次のように言い表わされた⁵⁰⁾。

（意志の）二つの形態を、私は、どこまでも思惟する人間と関係づける。それゆえ、思惟を、人間的意志の決定的なメルクマールと名付ける。しかし本質意志は思惟を含んだ意志であり、選択意志は、思惟されたものとして存するだけの意志である。共通のメルクマールは、対象への思惟による（意識的な）肯定あるいは否定である。

また他の論説（1907年）では、同じ考え方が、次のような形で表出される⁵¹⁾。

社会学の視点が本質的に、そして第一にかかわるのは、相互肯定の事実と筆者が呼ぶところの事実（Tatsache）である。社会学が究明するのは、この狭義かつ本来の意味における社会的事実であり、またそのモチーフを分析する。筆者の力説する如く、社会学は、何よりも意味大きい差異に注意を向けなければならない。目前の感情モチーフあるいは目前の思惟モチーフの根底に相互肯定がはたしているかどうか、である。この観点から筆者が本質意志から選択意志への進展と名付けている推移を追跡しなければならない。本質意志は生成した意志であり、選択意志は造られた意志である。人間は本性上人間を肯定し、人間と結びつく傾向がある。それは、たとえこの上なく強度の衝動によるのであっても、本能によるのではなく、高貴な感情と理性的な意識によってである。この性向から欲求が成長し、断固たる肯定がなさ

50) F. TÖNNIES, *Zur Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.72.

51) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.351/2.

れる。その肯定が、肯定された対象の価値を認識し、対象との関りで、全体としても持続するものとしても自己を屹立させる。

同じ論説の中では、社会的なものの存在論的メルクマールを呈示する方向そのものと位置づけてよいくさぶる啓発に富んだ発言を聞くことができる⁵²⁾。

社会的結合体 (Verbindung) は、先ずは、直接社会的結合体は、先ずは直接的に、人間のまとまりをもった (従って社会的 sozial) 意志のみによるあり方の如きものを有する。そこでの人間は、そのあり方を措定し考案することによって、そこに属しているのである

さらに1926年 ([訳者補記]原文の1919年を補正) には、同じテーマで次のように表明された⁵³⁾。

社会的形成体の最高度の分割原理は、人間の意志の多様な性状において認識されなければならないが、それは、意志は社会的形成体のなかに存すると同時に形成体に生存原理を提示するからである。これがさらに明るみに出るのは、完結したものであるとしての欲求 (perfektives Wollen) に代わって肯定する (Bejahen) という動詞の現在人称形を措定し、それによって社会的諸関係・社会的価値・社会的結合の肯定を話題にするときである。ここにおいて、概念的に先鋭この上ない対比が成り立つ。すなわち、一方には形成体そのもの肯定、他方には外形的な目的だけに即した肯定という対比である。私は、前者のあり方での意志を本質意志 (Wesenwill)、後者を恣意 (Willkür) あるいは (私は最近では) 曖昧さを避けるために、むしろ選択意志 (Kürwill) と名づけている。この見解は、集団 (Vereine) すなわち結社 (Vereinigung) を純然たる外面の観察にもとづいて無意識によるか欲求によるか恣意によるかで区分するといったあちこちで見かける理論とは別である。そうした理論では、たとえば人がそこに生まれつきである家族などを例にして、成員たる個人が《意志無き》ものとされ、個人による決断も決定もないまま集団・結社が生成するとされる。しかし事実として規準事例を挙げるなら、家族は全情念をもって肯定されるのであり、言い換えれば人間はその本質意志を以て家族を措定する。同様に人間は、選択意志を

52) 同上, S.361, dto. S.363ff.

53) F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft* (1926前掲注31), S.269.

以て商業ゲゼルシャフトを措定する。なおこの商業ゲゼルシャフトとは、人間がその託した資金から持ち分ならびに能うかぎり多くの利得を得るという限定的な目的のみをもつものを言う。

1931年にテンニェスは、同じ構成要件を、部分的にはまったく同じ言葉をも三度ももちいて繰り返した。一番目は*リヒャルト・トゥルンヴァルトが企劃した「社会学シンポジウム」、二番目は*アルフレート・フィアカントの編集による『社会学事典』への寄稿、そして三番目はテンニェス自身の『社会学入門』の一節である⁵⁴⁾。

共通の欲求からのみ、すなわち相互肯定から、狭義かつ厳格な意味での社会的生活は導き出され得る。これが意味するのは、そうした共通の欲求を通じて、欲求する人々の思惟の意識のなかにある特殊な存在性 (Wesenheit) が現出していることである。言い換えれば、存在性は、先ずは、そして直接的に、そうした欲求のなかで集まる人々を通じて措定される。そして正にこの点に関わるのが、純粹社会学の基本概念である。

この後さらに取り上げる問題性はさておき、今引用した箇所にはさらに付け加えることもできようが⁵⁵⁾、そこで表明されるのは、本質意志と選択意志が常に同列で対置されるわけではないことである。両者の差異は、先ず非常に一般的には、意志が思惟を内包し、あるいは思惟が意志を内包すること、したがって詰まるところ、一つの事柄の二つの局面である。スピノザの言い方を借りれば、一者ニシテ二様ニ現ハレタル物 (una eademque res duobus modis expressa) である。二番目に、本質意志と選択意志が分かれるのは、一つのものを見るのに《現実的か、それとも自然的か》という見方の違いという限りである。言い換えれば、現実措定の二つの仕方である。三番目に、相互肯定が起きるのは、所与の感情モチーフあるいは所与の思惟モチーフを土台にしてであり、そこでの一方は自生的意志、他方は作られた意志である。またこの場合には、モチーフに明らかな差異がある上に、感情が意志の代わりに現われるように思われる。これによって四番目の意味が開示される。

54) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposion* (1931前掲注12), S. 131.; DERS., *Art. Gemeinschaft und Gesellschaft*. In: A. VIERKANDT, Hrsg., *Handwörterbuch der Soziologie*. Stuttgart (1931前掲注40), S. 186/7 (*Das soziale Verhältnis*).; DERS., *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S.5 その他類出。

55) 例えば次を参照, F. TÖNNIES, *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jahrhundert* (1908). In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, S.98; 次も非常に重要な箇所として参照, F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.435. 他の箇所についてはこの問題の論議との関係で適宜後出する。

しかしそれは、意図せざる（自生的な）結合体と、欲せられて成り立った結合体が対比的に存在するとの要請を措定してそれに照らすとしても、めったに顕在化するものではなく、テンニェスにおいても後景に退いている。事實は、意図せざる結合体も端的に欲せられ肯定されたのであり、目的結社以外ではない。しかし注意しなければならないのは、テンニェスの場合、語法が屢々自らの理論設定から逸れることで、非常に多くの箇所で、そうした受けとめ方を助長させている。これは、肯定がそれ自身のためになされるのか、それとも何らかの目的のためになされるか、それを問うことに本質的なものをみとめるのが五番目である。こう問うてもよい。非常に多くの（部分的には）非常にかけはなれた、あるいは少なくとも相互にわずかしち重ならない意味合いをこれらの基本概念に詰めこむことが、明瞭ならしめるのに資するのだろうか、と。それと言うのも、これらの基本概念は、徹底して単純で、なろうことなら一義的に相互に区分されてこそ、はじめて役立つものになるからである。

心理学として社会学の心理学的根拠づけもここから導かれ⁵⁶⁾、それどころか時には社会学の生物学との関係もふれられる⁵⁷⁾。が、それはともあれ本質的な問題点は、社会的存在の特定の存在論的基本メルクマールの確定が明らかに試みられていることである。これら（存在論的基本メルクマール）は根幹かつ本質的には肯定の営為として取り上げられ、さらにその二律背反的な構造が本質意志と選択意志あるいはゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対比として表出される。この観点は、それに照応して、いつ社会的諸関係について語ってよいのかについての目安としても活用されよう。別の言い方をすれば、**特定の物と価値を共に肯定する人々、これは社会的に共に結びついていると見てよいことである。これはまた近似した言い方の一聯の言説に接続する。**オーギュスト・コントが《コンセンサス》(consensus)を社会的聯関のきわめて対象カテゴリー的な目印（あるいは存在論的メルクマール）としたことなどである。また、特定の数々の物や価値を同じように見て価値づける人々をツサエティと名付けた*アレクシ・ド・トクヴィルの有名な規定も近似している。それに対して特に*エルネスト・ルナンが、《国 Nation》の定義のなかで実際に繰り返される《投票》(un plebiscite de tous les jours)に言及したのも肯定の特殊な性格を指摘した点で似通っていた。しかしここで取り上げているのは（後にも立ち戻るが）、テンニェスが多くの場合この肯定を《友好的》集まりかそれとも《非友好的》集まりかと表現しているこ

56) 心理社会学 (Psychoisozologie) と社会心理学 (Sozialpsychologie) の違いについてはシュトルテンベルク (H.L. STOLTENBERG) との接続がみとめられる。参照, F. TÖNNIES, *Einteilung der Soziologie* (1924 前掲注49), S.432.

57) 三者が重なる領域に関するテンニェスの見解については次を参照, F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.351.

とで、そのためネガティブな社会的関係一般もテンニエスのカテゴリー装置に入っていたのか、それとも入っていなかったかが問題になるのは厄介である。しかし他面で非常に明らかなのは、テンニエスが、社会的存在の二種の異なったあり方を区別するだけでなく、この両者を存在論的基礎づけから等分に導き出していることである。とは言え、これがテンニエスを新カント派の意味での先験的演繹に誘導するのではないことは（*ゲオルク・ジメルはこれを看過することが多いが）、テンニエスが哲学ではスピノザに、さらに突き詰めれば*ヘーゲルに依拠することから確かめられよう。

VI 二項概念の性格および《肯定された社会的関係性》をめぐって

基本概念の二極性が本質的にこの自己肯定の意志と思惟の構造と関聯している限り、以上のような存在論的な思考脈絡はテンニエスの核心的な問題性と不可分である。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、一方は意志が思惟を含み、他方は思惟が意志を含むというかたちで、この共通の土台に立つ相互に厳しく排斥する二項対比である。もとよりそうであるのは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトが《規準概念》あるいはイデアルテュプス的な構図を呈する限りである。現実にはこの関係は、テンニエス自身にとっても（これは後に示さなければならないが）違っている。対比する二項はまじりあって現れるからである。私たちは、このイデアルテュプス的事実構成を論理学の意味で表現しようとすれば、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトを絶対矛盾的な二項対比と見なければならぬだろう。その場合は、この二項対比への*クリストーフ・ジークヴァルトの批判学説を手掛かりにしてもよい⁵⁸⁾。

絶対矛盾的対比は・・・二種の規定が対置し、したがって一方の否定によって他を規定するほかない関係を言う。直線ではない線は曲線である他ない。それに比べて相対的対比では、多くの規定が、ちょうどさまざまな色彩のように等しく並んでいる。

対比とは、等しいカテゴリー枠に立つときのみ意味があるとするジークヴァルトの教説は正しく、その図式はかなり厳密にテンニエスにあてはまる。テンニエスにとって、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは本質意志と選択意志として、意志あるいは思惟のなかにひとつになっているからである。この純然たる論理学からのコメントは決して無駄話ではなく、そこにはテンニエスを理解する上での（特に価値づけの上での）中心的な問いが隠れている。それはこの後すぐに示したい。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトが絶対矛盾

58) Chr. SIGWART, *Logik*. 5. Aufl., hrsg. von H. MAIER. Tübingen 1924, Bd. I, S. 185.

的な一対の概念であるとするなら、それに因んで企図されたカテゴリーの枠組みの中には**第三の概念の余地はない**。これはテンニエスの考え方とも重なると思われる。それに対してゲマインシャフトとゲゼルシャフトを相対的対比ととらえるなら、**二つの極の間には一箇の（あるいは数箇の）媒介者が存するはずになろう**。今の場合で言えば、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトのカテゴリーは、それ自体である限りでは、社会学の基本概念ではあり得ず、他にも基本概念があってもおかしくない。事実、この対比概念を離接的（論理和的）並列に変換する試みも常におこなわれてきた。しかし私たちはさしあたり、第三の可能性を指摘しなければならず、それはこうなるだろう。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、そもそも、ジークヴァルトの批判的意味での真正の対比ではなく、むしろそれを目安にするなら、対比にある両形式は**統一的なカテゴリー構造のなかでのみ可能になる**。もしこの一対の一項が、他の項ではない（すなわち A ではない）ことによるのみ規定されるなら、どちらの項目もそれ自体はポジティブな規定が無くてもよいことになるだろう（B 対 A）。対比のこの形式は、たとえば代数学と草の緑を対比させるようなもので、まったく無意味であろう。しかしこの無意味が目飛び込んでこないような他の可能性もある。一つは例えば、対比の各項が、同じカテゴリー構造に属していると見られる場合で、そうであれば一般論で言えば、**上で見たようなかたちでは真正の対比にはならない**。ちなみに、この観点からゲマインシャフトとゲゼルシャフトの一対のカテゴリーをなじったのが、*カール・ドゥンクマンであった⁵⁹⁾。そこでの見解についてはこの後取り上げよう。

そこで、一つの特異な経緯に注目しておきたい。テンニエスの基本概念への批判で、この二つ以外にも基本概念はあり得るとの議論を踏まえつつ、上に挙げた存在論的メルクマルである肯定への攻撃と結びついて起きた動きである。たとえば、端的に*マックス・ウェーバーがそうであった。もっともウェーバーは、テンニエスとの表立った応酬を明らかに回避した。たとえば、次のように一種括弧に入れるようなコメントをウェーバーはほどこしている：《私の概念構成が、これらの著者や、F. テンニエスの今日なお重要な著作[ゲマインシャフトとゲゼルシャフト]・・・とは異なっているとしても、それは必ずしも見解の相違を意味するものではない》⁶⁰⁾。この 1913 年の論説『理解社会学の若干のカテゴリー』でもちいられた概念、《ゲマインシャフト行為》と《ゲゼルシャフト行為》が分岐するのは、合理的規則ないしは制定律の有無である。ゲマインシャフト行為の場合、個々

59) Karl DUNKMANN, *Die Bedeutung der Kategorien Gemeinschaft und Gesellschaft für die Geisteswissenschaften*. In: Kölner Vierteljahresshefte für Soziologie, V.(1925/26), S.39.

60) Max WEBER, *Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie*. In: Ges. Aufsätze zur Wissenschaftslehre. Tübingen 1922, S.403, Anm.1. [邦訳] マックス・ウェーバー（著）海老原明夫・中野敏男（訳）『理解社会学のカテゴリー』未来社 1990, p.6.

人の行為は、直接、感覚的に他者に関係する。それに対してゲゼルシャフト行為は、制定律化された規則に沿ったゲマインシャフト行為である。さらにウェーバーは、ゲマインシャフト行為もゲゼルシャフト行為も（さらに両者の中間にある了解行為も）必然的に《団結》ではなく、それゆえ双方の肯定ではない、として、こう論じる⁶¹⁾。

ゲゼルシャフト行為もまた決して、われわれが「闘争」と呼ぶ人間のゲマインシャフト行為とあい容れないかたちで対立するものでもない。闘争というのは - ごく一般的にいえば - 他人の行動についての予測に準拠しながら、その反抗する意志に逆らって自分の意志を貫徹させようとする努力のことであるが、そうした闘争は可能にはむしろ、およそあらゆる種類のゲマインシャフト行為にふくまれるものである。ゲゼルシャフト関係形成というひとつの実行行為を例にとってみても、当事者たちの主観において（場合によっては個々人で異なっているかもしれないが）平均的に抱かれている目的に照らしてみると、それが実際のところ第三者に対抗する連帯の表現を意味するのか、あるいは利害の妥協を意味するのか、また闘争形式・闘争対象を当事者たちが望んでいたように変更するだけのことにすぎないのか、といったことは別個の事例によって異なる事例であり、これらすべての要素がいくらかずつ含まれている、ということもしばしば見られるのである。たとえば性愛的・慈善的關係のように、無限の献身の感情と結びつけられた諒解ゲマインシャフトであって、そうした感情にもかかわらず、相手を容赦なく抑圧するという要素を含まぬものは存在しない。他方においておよそあらゆる「闘争」について考えてみると、その多数は、何らかの程度のゲゼルシャフト関係や諒解を含んでいるものである。このようにそれぞれ異なった社会学的概念にあてはまる複数の現実の事態が部分的に重なりあってしまうこと、しかもそれが、異なった観点から考慮されているから異なった概念に含ませられるだけで実は同一であるメルクマールゆえに重なりあうということは、社会学の概念においてはしばしばみられる事態である。

敵との何らかのかたちでのゲマインシャフト行為を全く含まない闘争というのは、極限事例でしかない。

ゲマインシャフト行為とゲゼルシャフト行為が交差する闘争のカテゴリーがと並んで、《暴力》も《権力による整序された強制の威嚇という形式》が説かれる⁶²⁾。

61) Max WEBER, 同上, S.429/40.[邦訳] p.102-104

62) Max WEBER, 同上, S.429/40.[邦訳] p.104-105.

物理的な暴力行使が後退する、という意味での「平和化」が段々と進展するにつれて、暴力行使は背景に押しやられるとはいえ、暴力行使にうったえることが完全に排除されることは決してない。ただ歴史発展の経過においては、暴力の行使がますますある特定の種類のゲゼルシャフト関係あるいは諒解ゲマインシャフトの、すなわち政治ゲマインシャフトの強制措置によって独占され、そして実力者による、さらに最終的には、形式上中立なものとしてふるまう権力による整序された強制的威嚇という形式へと変化していったのである。

別の言い方でこうなる。

物理的なものであれ心理的なものであれ「強制」が何らかのかたちでほとんどすべてのゲマインシャフト関係の基礎にある・・・

非常に多くの場合、事態は単純で、諸個人は《特定のゲマインシャフト行為》へと《義務づけられて》いる⁶³⁾。

個々人は通常、自分では何もしていないのに、ゲゼルシャフト行為に関与させられ、したがって彼についても、かの人為的な秩序に行為が準拠させられているという例の予想があてはまる、ということである。そのような形態にとって構成的なゲマインシャフト行為は、まさに次のような事態によって特徴づけられる。すなわち、ある人に特定の客観的要件が備わっていれば、その人がゲマインシャフト行為に関与すること、したがって特に、その人が自らの行為を秩序に準拠させることを予想でき、しかもその予想は、平均的には、当該の個々人が当のゲマインシャフトにとって構成的なゲマインシャフト行為への参加を「義務づけられている」ものと経験的にみなされうるという理由から、そして場合によっては、彼らは反抗したとしても「強制措置」によって参加を（たとえどんなに穏やかな形式においてであれ）強いられる可能性が存するという理由から、根拠をもつという事態である。

これは特に国家あるいは教会のタイプの《アンシュタルト（機関）》において顕著であるが、また原生的な家ゲマインシャフトや、預言者と弟子のゲマインシャフトその他類似の《結束》においてもみとめられる。そのさい、近代文明のなかでは、あらゆる結束行為を合理

63) 同上 [邦訳] p.108-109.

的秩序によって少なくとも部分的には規則づける明白な傾向がはたらいっている。なお、これらの秩序は、全成員の自生的な一致によってつくられることは極めて稀で、たいていの場合は上から授与されることになる⁶⁴⁾。

「授与」が意味するのは、特定の人間が、制定律を団体に関与する行為あるいは団体によって規制された行為について妥当するものとして布告し、アンシュタルト構成員（あるいはアンシュタルト権力に服従する人々）が、多少とも一義的に自らの行為を意味上忠実に制定律に準拠させることによって、実際多少とも完全にそれに従うことである。……（中略）

アンシュタルトも結社も、すべての制定律の圧倒的多数は、起源の点からいえば協定されるのではなく授与されたものである。つまり、何らかの理由から実際にゲマインシャフト行為に自分の意思どおりに影響を与えることができた人間または人間集団が、「諒解予想」にもとづいて制定律をゲマインシャフト行為に課すのである。

これまた《諒解されている状態》とは区別される。後者は、ゲマインシャフト行為も諒解行為もゲゼルシャフト行為も必然的に《結束》でないとのコメントに接続する。そしてこれらすべては、強制と服従がないまぜに作用することを通じて最終的には**支配の概念**へ進んでゆく。力で圧倒された者たちが正統性関係に属するのは、彼らが支配関係を主観的にも自己に結びつくと見ることによる。しかしそれと並んで、相互関係無く力に圧倒された者たちもいる。この二つのカテゴリー、闘争と強制は、所与の秩序の肯定というテンニエスの観念と一緒ににはできない。それらのカテゴリーは、少なくともその契機の手直しを要する。そのさい私たちは、マックス・ウェーバーの上記の論文はテンニエスに対する隠れた唯一の論難であったとの印象をぬぐい得ない。隠れた、と言うのは、論文の冒頭の原因を除いてはテンニエスの名前は挙げられないからである。

いずれせよこの契機はマックス・ウェーバーによって《経済と社会》へと発展させられた。そのさい、術語がテンニエスを想起させることについて、テンニエスはそれらを《自己の目的に合わせて……、ここで私たちの目的に向けてもちいているよりも基本的にははるかに特殊な内容を付与した》とウェーバーは（またもや遠慮がちに）コメントした⁶⁵⁾。かくして同じ諸概念が活用されるのだが、そこでの印象を言えば、純粹社会学に接近する限りでは、ウェーバーはテンニエスに較べて、より高い抽象度を示した。

64) 同上, S.444/5. [邦訳] p.114-115, 中略を挟んで p.116.

65) Max, WEBER, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 2.Aufl., Tübingen 1925, S.22.

マックス・ウェーバーの後、この観点を取り上げたのは特にレーオポルト・フォン・ヴィーゼであった⁶⁶⁾。フォン・ヴィーゼの言説はここでの関係でも重要だが、それはテンニェスが二度にわたって反論へとうながされたからで、またその反論ではそれ以前のほとんどのコメントよりも自説を直截に表明しているからである⁶⁷⁾。フォン・ヴィーゼによれば、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念は《発見法的原理》として認めるべきものであり、社会的諸関係のなかで暮らしている多くの人間がそれらの諸関係を《現にある恒久的な》関係として肯定しているわけではない。さらに授与された関係にも強く注目して、《ミツバチじゃあるまいし》とウィットきかせたコメントをほどこした⁶⁸⁾。加えて、そうした相反的カテゴリーでは安易に価値づけに走りかねないとも指摘したが、これについては後に取り上げる。ちなみに後年、フォン・ヴィーゼは見解を次のようにまとめた⁶⁹⁾。

社会学のために取り置くのは内的結合の体験の研究のみとするのは、多くの人間のあいだでの事象をトータルに把握することの断念になり、狭視化をきたすだけではない。なぜなら、そもそも実際活動の出入は絡み合って、厚い網目をつくっており、それゆえ紐帯からのみ導き出すとすれば、あらゆる混合を誤ってとらえることになるからである。

それゆえ、こうした（テンニェスの）社会的（das Soziale）の理解は基本的に社会倫理的なものであるとの指摘はもっともである。

社会学の語法は、社会倫理に依拠した使い方から解放されねばならないのは、《sozial》では多くの人々が関係の総体ではなく結合体だけを捉えているからである。

この見解は、以下の件りのように、マックス・ウェーバーと重なるところも大きい⁷⁰⁾。

ゲマインシャフト形成は、一般の感覚では通常《闘争》へのこの上なくラディカル

66) Leopold von WIESE, *Allgemeine Soziologie*. I. Teil: Beziehungslehre. München und Leipzig 1924.; DERS., *Tönnies Einteilung der Soziologie*. In: Kölner Vierteljahresschrift für Soziologie. V (1925/26).; DERS., *System der allgemeinen Soziologie*. 2. Aufl. München und Leipzig 1933.; DERS., *Geschichte und Hauptproblem*. (初出)1926, 4..Aufl. Berlin 1950.

67) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposium* (1931前掲注12).; DERS., *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8).

68) L. v. WIESE, *Tönnies Einteilung der Soziologie* (1925/26前掲注66), S.452.

69) L. v. WIESE, *System der allgemeinen Soziologie*, S.54/55.

70) Max WEBER, *Wirtschaft und Gesellschaft*, S.22.

な反対極を意味する。しかし、この上なく親密なゲマインシャフト形成の中でも精神的に自分より弱い者たちへの暴力は事実として通常である。またゲマインシャフトのなかで諸類型の選別が起きるのは、他のどことも同じであり、それによって造り出される生き方と（他を圧倒して）生き延びるチャンスに差異が現れる。

テンニェスは、フォン・ヴィーゼのこの異論に、イデアルテュプス的な構成の問題性に立ち返って答えた。《規準概念》の中では諸関係は現に存し持続するものとして肯定され得るが、またこういう事情もある、と言う⁷¹⁾。

現実の社会的諸関係のなかには、このタイプから遠いものもあり、それらを同じ名称では呼べないだろう。（外的なものであれ内的なものであれ）欲求に強制が加えられる場合などである。もっとも、周知のように、ローマ法には《強イラレタルモ自ラ欲スル者（Quamquam coactus tamen voluit）》の用語が入ってはいる。

マックス・ウェーバーが《授与》と名付けたものが過たず捉えられていることは、《同じ名称では呼べない》の一句が如実に示している。

それだけにテンニェスが、相互肯定という自己の前提にとらわれ、示唆に富んだ諸見解に理解を示さなかったことが注目される。たとえばハーバート・スペンサーは未開の諸民族のあいだでのこととして《強制された協働体すなわち本質的に身分の原理に依拠しているのだが、それは自由な人々契約の原理に立つのと等しい》と論じていた。これへのテンニェスの対応はこうであった⁷²⁾。

身分と契約の対比、これについては私もサー・H・メインの定式を確認するのだが、その対比は現に存在する。それがみとめられるところではどこでも、身分（Status）は自然な・家族の・性向と習慣によって肯定された脈絡である……

そのさいテンニェスは決定的なことを忘れていた。すなわち未開の世界では、性向と習慣によるのではなく、行動を規定しているのは、魔法によって確かにされた秩序から逸れることによる不気味な結果への恐怖だということである。同様の無理解は、テンニェスの場合、他の脈絡でも見られ、要するに自説を繰り返しているだけなのである⁷³⁾。総じてこの脈

71) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposion* (1931前掲注12), S.138.

72) F. TÖNNIES, *Neuere soziologische Literatur* (Berichte 1891/92). In: *Studien und Kritiken*, Bd.III, S.153/54.

73) F. TÖNNIES, *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jh.* (1908前掲注55), S.98.

絡ではテンニェスはやはり社会倫理学の視点を強くみせる。たとえば命令と服従の分析においてそれへの肯定は、意志の自己規律の意味で解される（そこには、友人でもある*フリードリヒ・パウルゼンの影響もあった）。それと並んで、無条件の屈服を要求する命令の形式は無言のまま無視された。つまり次のように明言されるのである⁷⁴⁾。

命令は、個々人によっても、決定を共にする多数者によってもなされ得る。多数者が一緒に事にあたり、強制を進め、完全にそれを成し遂げる得るときにも、その多数者は、社会的欲求という自然をもっている。そのさい、いかなる動機で《他者たち》が従うのかは、つまり彼らは命令する者たちと社会的な関係にあるのか、それとも単に打倒された敵すなわち奴隷であるのかは、どちらでもよい。しかし他者たちもまた、個々人として人格であり得、そのまどめられた欲求が命令として現れる社会的欲求を形成する。そしてこれが、社会学の考察において重要である。すなわち人間は互いのなかで命令しあい、互いの中で服従し合う — そこでは、命令者としては社会的であり、服従者としては個人的に反応する。（強調体は引用者＝ケーニヒ）

これが偶々みつけた発言でないことは、同じ考え方がテンニェスでは頻繁に繰り返されることによって確かめられよう。そこから、テンニェスは、たとえば処刑を前にしてギロチンに口づけするような行動に最高度の肯定をみとめるのかもしれないと考えてしまう位である。事実、『社会学入門』では次のように説かれる⁷⁵⁾。

もし私が誰かに私に命令する権利をあたえるなら、これは、私とその人物にたわいのない言葉を語る権利をあたえる以上のものであり、私はそれをすべきことになる。それは同時に、私は命令されたことがらを自ら行ないたい、ということでもある。そして《自分は・・・ねばならない》ならびに《私は・・・べきである》という感情が解き放たれる限りでは、この感情は《私は・・・したい》へ入ってゆく。すなわち行為の欲求を超えて当為を欲求することになるが、これが義務の感情あるいは意識である。私が自分自身の命令に従うなら、当為の感情は直接的に義務感情である。なぜなら、それは《私は・・・したい》という感情と違わないからである。したがって、他者が私に命令する権利をもち、私が服従を義務と感じる度合いに応じて、他者の命令は、あたかも私が自分に命令しているかの如く重なってくる。私たちが欲

74) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.356/57.

75) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S.192ff., bes.S.194.

求と当為に関して単一であることによって多かれ同一性に接近するような関係が私たちの間にあることが肯定に当たる。逆に言えば、そうしたポジティブな関係（これは正に社会的関係と呼べる）から、禁令あるいは命令に関わる一者あるいは両者共の権利、すなわち服従に関わる一者あるいは両者共の義務が生成する。

すでにこれ以前から、テンニェスは、近似した決定的な発言、あるいは意味においてまったく同じであるような発言を行っていた。1924年の重要な論文「社会学の区分」の一節もそうである⁷⁶⁾。

対比的かつ共通に欲せられた関係としてのあらゆる社会的関係の本質に属しているのは、一方の関係者から、他者の（規則に沿ってか、それとも何かの機会の折か、どの程度持続的にかはともかく）行動への要求がなされ、それが有効となり、それと共に期待された側の自由な意思からそれへの期待が抱懐され、その者の願望や意志（関心）に合っているようにまでなることを言う。従って、社会的関係にとって本質的な共有され統一した意志がもとめ命じるのは、かかる相互行動に他ならない。その意志は、（その関係が本質体の形式のなかで思念される限りは）関係それ自体の意思として示される。従ってこの関係は、義務と服従を生み出し、それに見合う促しを高め、その赴くところその関係はこの義務に抵触する自由行動を否定し禁じる。

しかしこの顕著な立ち位置は、テンニェスが、ここで論議されている種類の現象をまるで把握していないことの証かしそのものと言ってもよい。少なくとも、純粋社会学の枠においてはそうである（テンニェスが純粋社会学をこれとは違った場で取り上げていることに、この後すぐに注目しようと思う）。命令や暴力は、**それらが正に一面的な関係となる傾向をもつ**ことによって顕在化するのである。怯え、脅し、暴力行使、打倒、略奪、奴隷化、これらは本質的に肯定によって成り立っているのではないことは、*羊が己れを抹殺するナイフを肯定し得ないのと同じである。人間の歴史に消長した幾多の暴力に屈した者たち、略奪に泣いた者たち、屈服させられた者たち、抹殺された者たち、これらの人々はその事実自己を表出することがほとんどできなかった。それを以て、彼らには言うべき何もなかったと結論づけることはできない。事実は、人間の社会において、暴力は本質的に、またその核心において、一面的な関係である。それが暴力をも双方の関係を特徴づけてい

76) F. TÖNNIES, *Einteilung der Soziologie* (1924前掲注49), S.4335/6.

る。しかしテンニェスはこれとは違った土台に立って、こう力説する⁷⁷⁾。

私は、関係があるということでは、肯定的な動きも否定的な動きも理解しようとした、社会的関係としては双方の肯定を以て典型的と解する……私は、否定的な（すなわち補充的な関係性）を純粋社会学から排除しようとした。それは、純粋社会学を、社会的な関係性に限定するからである。

こうした社会倫理的な論説は、テンニェスの「社会学入門」において、圧倒的な明快さにおいて表明される。なお言い添えたいのは、社会倫理的な観点は、先ずは究極の価値づけを含むのではなく、社会的存在の存在論的メルクマールを呈示するという非常に特定の手法を示していることである。つまり、こうである⁷⁸⁾。

筆者の出発点は、社会的な生の営みそれ自体を対象とするということは、人間および人間結合のあいだのポジティブな関係性に絞って考えられていることにある。

たしかにテンニェスは、彼の見解が《倫理的》とされることを否定しており、その哲学的・存在論的であることから、受けられないわけでもない。テンニェスは、社会性の概念は、徹頭徹尾、《ポジティブで非敵対的な関係性》による結びつきであり、そのため《別の》言い方は考えられない、と言う⁷⁹⁾。

内的な結びつきを以て、私は、社会的現実の本質と見てきた。それは、あらゆる外面的な言合わせとも、一緒にいるだけとも違ったものである。

さらに、こうも繰り返される⁸⁰⁾。

社会の本質と私が呼ぶすべて、すなわち関係・集まり・団体は、どこまでも、そうしたあり方を肯定する人間の欲求によって規定されている。つまり逆に言えば、あらゆる断念、亢進する弱さ、詰まるどころ強度の無欲求によっては否定されてしまい、解体に瀕し、崩壊する。

77) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposion* (1931前掲注12), S.139/40.

78) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S.13.

79) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), a.a.O.S.75/77.

80) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), a.a.O.S.75/77.

そして最終的には、いたく驚かされるような告白に至る。すなわち肯定の立場こそ一般社会学の不動の起点である、として併せてこう説くのである。

長期にわたって敵対的な関係が生成するような敵対的な関係性は、社会心理学において、したがってまた包括的な社会学において扱われる。なお言い足せば、それらは、私が応用（特殊）社会学と呼ぶものにおいて呈示されるべきものと思われる。

これによってテンニェスは、またもや、同じく（重要度の低い幾らかの変更はほどこされるにせよ）先にふれたような思考脈絡に入っている。すでに1913年の論文「社会学と歴史学」において論じられていたネガティブな社会的諸関係である⁸¹⁾。

生物学と社会学に共通の概念、しかしその価値がおそらくほとんど認識されていない概念は闘争である。そのさい、何らかの圧迫や反抗に抗した生存のための（物質的・心理的あるいは文化的）格闘であるか、同種のファクターどうしの闘争であるかはともかく。これを言うのは、私たちにあって、社会的生活のなかで、闘争はこの社会的生活の否定として、すなわち存在の否定として起きるからである。諸民族のあいだの闘争、民族の部分どうしの闘争、集団どうしのいがみ合い。内乱や反抗に至るまでの敵対勢力との抗争、一国民のなかの層と層との抗争、身分間や階級間の抗争、これらが（政治的な）革命や復古のかたちで新たな社会的関係の新しい形状へと進むか、あるいは古い形状を再建へといたるかはともかくとして。

このテーマは、論考「諸学の体系における社会学」（1915年）においても一度取り上げられた。そこでは、純粋社会学と社会心理学とが区分される。何を以て社会学と言うのだろうか⁸²⁾。

社会学が関わるのは、専ら、やや厳格かつ狭義の意味での社会的事実、すなわち《社会的 sozial》、言い換えれば人間相互の少なくとも平和な姿勢である。しかしそれはさらに進んで（そこで自己を表現するところの）相互の肯定を作り上げ、それが（そこから本来の形成体が成立する限りで）研究の対象となる。その形成体は、客体として見る事ができるものであり、またそうしたものとして共に生きる人々によっ

81) F. TÖNNIES, *Soziologie und Geschichte* (1913 前掲注42), S.195.

82) F. TÖNNIES, *Soziologie im System der Wissenschaften* (1915). In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, S.240/41.

て自ら措定され主張される。

《社会心理学》はこれとは異なる。

片や、社会心理学に対しては、あらゆる共通の思惟・感情・欲求は、現象の一面にすぎない。すなわち、個人であれ（思惟等々を共有する）集団であれ、反撥しあう思惟・感情・欲求として、観察の別の側面をとなる。反目も一致も、人間が共に生きることの心理的側面に属する。いがみあいとなごみ、戦争と平和も、賃金闘争のような競争と契約と協働は、互いの肯定であるとともに互いの否定である。双方からの肯定として常に社会学を指向し、それはここに新しいエレメントが加わっても同じであるのが、それとは違ったものとして双方からの否定・喧嘩・いがみ合い・戦争・隔意がある。それは、社会心理学の特殊にまとまった領域、すなわち社会学が（それを否定することに社会学は生命を得ることになる）その弁証法的な母体とみなしてもかまわない領域である。

最後の言い回しは、特に耳に響くが、それは、万人が万人に対して戦っている場である《自然状態》の克服に近いものを響かせているからである。ちなみに、すでに1880/81年期の予備的な論考においても⁸³⁾、さらに1907年の重要な論文「社会学の本質」においてもそれは言及されていた⁸⁴⁾。

人間と人間のあいだのあらゆる平和な関係、これはポジティブな関係と呼んでもよいが、そこに少なくとも社会的な関係の萌芽があり、また敵意を意識的に控えることだけでもそうした萌芽がある。敢えてこう言うのは、それによって、社会学の多様な材料を射程においたことになるからである。しかし平和な関係という限定は、社会学が敵意ある振る舞いに関心を寄せないということでない。それへの関心は起きているが、それは生物学者が非有機的な物質に、また化学者が物理学的な集合状態に関心を寄せるのと同じである。いずれの場合も、研究の対象としては別である。

言い方を変えると、それらは、本格的ではない認識であり、精々、本来の認識の準備形態に属している。すなわち本来の認識が登場するには否定されねばならない《弁証法的な母

83) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Theorem der Kulturphilosophie* (前掲注10), S.20.

84) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.355.

体》に含まれる。

これらの文章のすべてをすなおに読むなら、事態は自ずと明らかになる。テンニェスがスピノザに強い関心を寄せていたことは先に取り上げた。しかしそこで考えられていたのは、常にゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念ならびに自然権の理論であった。それに対して今の引用文では、先に取り上げた思惟の延長として、これら概念を存在論への関係へ延ばすことが促される。またそこでは、完全な意志に関するスピノザの教説が見えてくる。^{*}《各々ノ物はヨリ多クノ完全性ヲ有スルニ従ツテ活動ヲナスコトガソレダケ多クナリ》(『エチカ』第5部定理40)、苦しみは小さくなる。憎悪・嫉妬・見下し等は、それらにあつては私たちが受動的であるような振る舞いであり、それゆえ自己の財産となり得るものではなく、《コノ帰結トシテ、人間ノ精神ハ、モシ妥当ナ観念シカ有シナイトスレバ、悪ニ関スル如何ナル概念ヲモ形成シナイデアロウ、トイフコトニナル》(『エチカ』第4部定理64[系])。逆に、苦しみであるようなどんな振る舞いも、私たちがそれについて明瞭・明晰な観念を形づくるや否や、苦しみであることをやめる(『エチカ』第5部定理3《受動ナル感情ハ、我々ガソレニツイテ明瞭判然タル観念ヲ形成スルヤ否ヤ受動タルコトヲ止メル》)。したがって完全な教説は完全な意志の観念に発し、またそこで終わるのであり、その観念の中には敵意やそれに類した振る舞いが入る余地はない。なぜなら、それらにあつては私たちが受動的だからである。たしかに個々の学問はこの劣った世界と取り組むことに慣れるとしても、存在論の次元あるいは哲学においては、完全意志は、否定の彼方へ、すなわち^{*}《永遠ノ相ノ下ニ》移される。またそこから見ると、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念は究極的にはどうなるかが問われよう。私たちがそれを《規準概念》あるいはイデアルテュプス的な構成とみなすなら、どんな具体的な個別事象も両者の混合であるあり得るために、現実はそのに照応する必要はない。しかし私たちがそれを存在論的な次元で考察するのであれば、そもそも現実はそのに照応する必要はない。なぜならそれは、完全意志の(純粋に概念的に重要な)観念の表現となっているからである。そもそも完全意志は現実のなかに対応するものをもつことができないが故に、定義の面ではそれを欠いている。

もっとも、この脈絡で事が解決しないのは、テンニェスが釈明をしたわけではないことから明らかであろう。しかし示唆に富むことだが、テンニェスは意志の諸形式に関するその存在論において、17世紀の自然権学説も《ゲゼルシャフト》も、また18、19世紀のロマン派的・歴史的学説をも、《洗練された自然権》(これは^{*}マイネッケが^{*}ヘルダーを論じたときの言い方だが⁸⁵⁾)の意味での《ゲマインシャフト》をも総体存在論にまとめて

85) Friedrich MEINECKE, *Die Entstehung des Historismus*. 2 Bde. München 1936, Bd.II, S.472.

いる。総体存在論 (Gesamtontologie)、これは基本的には社会性の位相において呈示された哲学であり、それゆえ歴史とも現実とも、そもそもかかわらない。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、この時点から、《規準概念》でもイデアルテュプス的な構成でもなくなる。むしろ、(自然哲学への本質的な補完を呈示する) 社会的な意志世界の《潜在力》である。これは、テンニェスが屢々繰り返す命題《社会学は哲学的な学問である》⁸⁶⁾とも重なる。しかし他面では、何はどうであれ、テンニェスのこの形而上学的な観点が他の(現実の様相をきわめて多義的に現出させる)一聯のモチーフとも手を携えていることも看過すべきではない。すでにこれまでの記述でも、かなり多くの層を浮かび上がらせることを試みたが、最後の点について特に紙数を費やしたのは、管見の限りでは今日までそれは看過されていたからである。

先へ進む前に、タルコット・パーソンズもまたテンニェスをめぐってこの問題性を取り上げていたことを記しておきたい。そこでも、テンニェスが《非敵対的な》関係に限定し、また社会学のカテゴリー体系を打ち立てるのにわずか二つあるいは三つの主要カテゴリーでもって事足りりとしたことを集中的に問うている⁸⁷⁾。ここで注目すべきは、これがパーソンズによるマックス・ウェーバーとの取り組みと直接的つながっていることである。すなわち先に取り上げた箇所の隠れていたポレミックな脈絡に本稿は取り上げたのだが、パーソンズもまたそこを問題にした。しかし他面でパーソンズは、テンニェスだけでなく、マックス・ウェーバーや他の論者の諸々の基本概念を起点にしなければならないとの見解をも表明する。一口に言えば、パーソンズにあっては、《非敵対的な》社会的振る舞いを拡大する問題性は、衝突と権力という次元に取り入れることによって非常に深化させられた。もっとも、権力の範囲が、特定の前提(安全の喪失やそれに類したもの)の下で前面に出る攻撃性よりも本質的に広いことは、パーソンズには自明であったのだったが⁸⁸⁾。

VII 新たなゲマインシャフトの可能性

これまで専ら取り上げたのは、一般心理学的、行動学的あるいは実事心理学的、哲学的あるいは純然たる存在論的な問題性であった。が、その向こうになお瞥見程度にせよ、テンニェスのカテゴリーにおいてなお見ておくべきものとして**歴史的意味**がある。これまで

86) 例えば次を参照, F. TÖNNIES, *Wege und Ziele der Soziologie im System der Wissenschaften* (初出1910). In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, S.131.; DERS., *Soziologie als Wissenschaft und die Deutsche Soziologische Gesellschaft* (初出1911). In: eodem *Loco*, *Studien und Kritiken*, Bd.II,S.144f. その他類出

87) T. PARSONS, *The Structure of Social Action*, p. 686-694. In: DERS., *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*. Glencoe (Ill.) (初出) 1949

88) T. PARSONS, *Certain Primary Sources and Patterns of Aggression*. In: *Essays* (前掲注87), p.251ff.

専ら注目されてきたものでもあり、テンニエスのカテゴリー体系をこの面から押さえる必要があることは、いまさら言を要しない。と共に他面で強調してもよいが、テンニエスはその発言からも知られるようにオリジナリティは小さく、19世紀の多数の社会学たちが取り上げていた基本概念の図式を継承したにすぎない。しかし正にそこからテンニエスのカテゴリーの全体評価にとって最も重要性を持つ幾つかの問いが浮上する。それゆえ、僅かなりともこれを取り上げておきたい。

テンニエスのカテゴリーにおける**歴史的な意味**を検討するにあたってまぎれもなく現れる最も重要な問いは、**構造的な自然**に関わるものであり、またそれは相対的あるいは絶対矛盾的性状の**二項対立**としての思惟モデルという基本性格、あるいはゲマインシャフトからゲゼルシャフトを経て新たなゲマインシャフトへと至る**三項並列**としての思惟モデルという基本性格に関係する。この最後の思惟モデル（三項並列）は、先に挙げた意味での離散的並列とはまったく別物であること、また状況によっては非常に広範囲の実際的問題がこれと結びついていることなどはさておき、どのような道をたどって《新たな》ゲマインシャフトが導き出されることになるのか、決断ごとに、由緒ある肖像さながらのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの配置は少し違ってくる。いずれにせよ、ただの二項対比の場合でも、もちろん予測にかかわる問いは起きる。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二項対比を、白と黒や善と悪といった対比と重ねることは誰も阻止できないからである。しかしこの場合はやはり別のかたちをとる。と言うのは、ここでは価値づけは、そのままとまりを、あらゆるゲマインシャフトは最終的にはゲゼルシャフトに行き着くが、だからと言って新たなゲマインシャフトを探しもとめる必要はなく、探し出せるわけでもなく、あるいは探してよいわけでもない。かかる姿勢に照応するのは、テンニエスの場合はやはり、繰り返して言われる《高齢》のイメージであろう。これは『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の初版への序文ですでに告げられていた⁸⁹⁾。

我、生くるを楽しむとも、また死を嘆くとも、焉んぞ神慮を知らんや、悲喜は過ぎゆくのみ。

老いのつるを如何に評し得るや、テンニエスの言では《我が老ゆること、何ぞ賛否の及ぶところぞ》だが、ゲマインシャフトのゲゼルシャフトへ移り行くカテゴリーもこれと等しく、人の論じ得るところに非ずとなる⁹⁰⁾。

89) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 1. Auflage* (前掲注13), S.42/3.

90) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposion* (1931前掲注12), S. 134/5.; DERS., *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S.77. Baron Cay von BROCKDORFF, *Persönliches von F. Tönnies*. In: *Reine und angewandte Soziologie*

この種の評言・商量に、客観的な学術思惟はほとんど関係しない。それは、若く成長し花咲く有機体が一方にあり、老いて枯れゆく者の他方にある以上、若い命の好ましきことが結果されるとしても、生物学者には関係ないのと同じである。

それは彼の研究活動を通じて、しかも初期から終焉に至るまで一貫してそうである。要は、純粹社会学の基本カテゴリーをニュートラルに価値自由に理解することであった⁹¹⁾。だからと言って、他面では、(下落は上昇に転じるのが頻繁であることは言わずもがな) 端的にペシミズムを意味するわけではない。ちなみに、テンニエスの最後の著作はこの問題を論じて擱筆される⁹²⁾。

……下降もまた自然の必然、すなわち法則的に条件づけられている。とは言え、下降が新たな上昇と進歩、さらに(場合によっては)新しい偉大な文化エポックの不可欠の条件であるとの推測を放棄しなければならないほどの根拠ではない。

これより遡ること三十有余年(1899年)、テンニエスは、同じ見解を表明していた⁹³⁾。

私のペシミズムは、精々、現今の文化の将来についてであり、文化そのものの将来を言うのではない。

他方で、テンニエスが世界の没落を感得していたことも時に聞くことになる。たとえば、第一次世界大戦の直後である⁹⁴⁾。

(前掲注6), S.372-73.

91) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.74.; DERS., *Wege und Ziele der Soziologie im System der Wissenschaften* (1910前掲注86), passim; DERS., *Soziologie als Wissenschaft und die Deutsche Soziologische Gesellschaft* (1911前掲注86), S.146. 《(私たちのいみでの) 社会学者は、正に価値判断を放棄することを以て客観性とする。彼は、人々をよりよきものにできるとも宗旨替えできるとも考えてはおらず、人々を把握し理解することで満足し、これが果たして(またどこまで) 人々の変えることに役立つかに決着をつけずにおく》。; DERS., *Troeltsch und die Philosophie der Geschichte* (1925). In eodem loco, Bd.II, S.420, S.426. この箇所ではテンニエスはマックス・ウェーバーの側に立ち、理論的要請が《文化総合》(Kultursynthese)へ進むことが不可避とするエルンスト・トレルチに反対している。[訳者補記] トレルチ(1865-1923)は《文化総合》(Kultursynthese)の語を歴史主義の克服の課題に因んで、人間の個人化という普遍的趨勢と、自然法に由来する倫理との調整・総合として説き、また晩年には第一次世界大戦による荒廃に対するデモクラシーの基礎としてもそれを説いた。

92) F. TÖNNIES, *Der Geist der Neuzeit* (1935 前掲注6), S.210.

93) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.74. Anm.1.

94) F. TÖNNIES, *Autobiographie*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.I, S.232.

明快かつ断固たる欲求が（残念ながらそこまでのことは稀有であるが）永く克服に至らないまま対峙する悲劇的な運命、十年余にわたり、輝かしい文化のあらゆる炎を通して浮かび上がり明らかにされる運命、しかし*アーゼの親族にラグアナロクが迫るが如く近づく運命がある。過ぐる1914年から1921年に至る7年のできごとに、また汎スラヴ主義の占拠に、悲劇の序幕をみとめるのは、当たっていないでもない。

この一節は、未来の展開に関してテンニェスが残した数少ない示唆をどう読むべきかについて、私たちに手掛かりを与えてくれる。どう見ても否定できないことだが、少なくともその発言の口吻に徴すれば、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの相反概念を価値評価と結びつけないとの姿勢をテンニェスは常に堅持していたわけではない。これはまた二つの道筋をとった。一つは、現今のゲゼルシャフト構造のなかに新たなゲマインシャフトが生成する可能性にある種のひらかれた遠望をもっていたことである。しかしまた二つ目に、ゲマインシャフトの問題性をゲゼルシャフトの問題性に優先させ、しかもそれは歴史的なこととしてだけではなく、むしろシステムティックなことがらとしてであった。ここでは、先ずは一つ目を検討することにし、（より重要な）二つ目は後に立ち返ろう。

すでに1912年にテンニェスは、たとえば*生活協同組合（Genossenschaft 同胞体）について見通しを示していた⁹⁵⁾。

（生活協同組合において）ゲマインシャフト経済の原理が新しい生命を得て、この生命はこの上なく意義多い展開の能力をもっている。社会生活の純粋理論にとっても、この対極的な動き（これは*シュタウディングーの呼び方だが）多大の関心を呼び起こす。

また1922年の「補論」において、テンニェスは、イギリスのギルド社会主義との関聯で、《メシア的な希望》を抱くことに警告を発した。そうした希望は、もし生活協同組合が、《単なる営利事業の活動に陥るのを自らまもるとすれば（またそうである限り）》、同胞体におけるような《生命力あるいは展開能力の原理》にはつながらない、と言う⁹⁶⁾。その後にも同様の見解が示される⁹⁷⁾。

95) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft* (1912), Buch III, §14, 補論 (Zusatz)

96) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft* (1922), Buch III, §14, 補論 (Zusatz)

97) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931 前掲注8), S.55.

この生活協同組合の精神は、ゲゼルシャフト的な展開に抗うゲマインシャフト的内容の大きな成算のある対抗潮流であるかもしれない。たしかにゲゼルシャフト的な展開は、近代の国民経済と世界経済に力強く自己を刻印しているが、その刻印が最強というわけではない。

この発言には、国家の財産などの財産 (Eigentum) についてさまざまな解説について、テンニェスの見解をうかがう手掛かりがある⁹⁸⁾。

(国家の財産 Eigentum des Staates) は、現実の会衆体の必要に奉仕すればするほど、すなわち民の共通の必要事に先ず応えるものであればあるほど、物質の特質を活かして古きゲマインシャフト的な財産となり、それによってゲゼルシャフトの財産としては最高の形式となる。

この思念がテンニェスにとって枝葉末節ではなかったことは、重要なさまざまな箇所でも繰り返されていることから知られよう。とりわけ主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』においてであり、そこでは《ペシミスティック》な文化予測と新たなゲマインシャフトへの希望がペアになる⁹⁹⁾。

全文化がゲゼルシャフト的・国家的文明に変化したからには、散在せる文化の萌芽が生きながらえたり、ゲマインシャフトの本質や理念がふたたび養われて、滅びゆく文化のなかに新しい文化がひそかに発展したりすることがないかぎり、文化がこのようにその形態を変えることは、文化そのものの滅亡を意味する。

しかしここでのテンニェスは、その見通しをこう語る¹⁰⁰⁾。

ゲゼルシャフトの理性としての国家は、ゲゼルシャフトを否定するか、あるいは少なくとも変革するべく決心しなければならないであろうが、その試みの成功する蓋然性は非常に少ない。

98) F. TÖNNIES, Art. „Eigentum“. In: A. VIERKANDT, Hrsg., Handwörterbuch der Soziologie. Stuttgart 1931, S.112.; DERS., Art. Das Eigentum. Wien und Leipzig 1926.

99) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. Anhang, §6, S.251. [邦訳] p.340.

100) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. Anhang, §5, S.249. 参照, [邦訳] p.339.

それに対して、1907年の重要な論文「社会学の本質」では、テンニェスは《社会主義の問題》についてずっとポジティブであった、と思われる。そこには、社会主義が次の疑問を含んでいることが述べられる¹⁰¹⁾。

今日の社会的欲求と思惟は、現今の国家を現実的かつ（財産をも併せた）支配的なゲマインシャフトを変革するに十分なほど強力である。たぶんそれを変革（umgestalten）と言ってよいだろう。

その数年後の1910年、テンニェスは、その可能性をきっぱりと否定した¹⁰²⁾。

私たちは、あらゆる未来のプログラム、あらゆる社会的・政治的課題を埒外におこう。それは私たちが、それらを見下しているからではなく、学問的思惟の一貫性からである。すなわち、そうした諸理念を学問的に根拠づける困難はどうてい克服し得ないとみるからである。・・・

ちなみに『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』第三編 §29の終わりの辺りには次のような記述が入っている（[邦訳] p.319）。

国家がゲゼルシャフトと同一のものと認められる場合には、国家は資本主義的施設であり、またそのような施設として存続する。したがって、労働者階級が資本主義的生産を破壊するために国家の意志の主体となる時、国家は終わりを告げる。このことから、労働者階級の政治的努力は、その目標から見れば、国家や政治をその意志の必要欠くべからざる表現・形式として含んでいるゲゼルシャフトの枠外に在る、という結論が生ずる。

この箇所に対応するのであろうが、テンニェスは、その第三版（1919）への序文では、こう記した¹⁰³⁾。

この文章の意味せんとする（また意味せざるを得ぬ）ところは、労働運動の理念とはゲマインシャフトの理念である。

101) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.376.

102) F. TÖNNIES, *Wege und Ziele der Soziologie im System der Wissenschaften* (1910前掲注86), S.130.

103) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft. Vorrede zur 3. Auflage* (1919前掲注14), S.60.

しかした、おそらく第一次世界大戦の直後というエポックの然らしめるところであつたろうが、極度の諦念の中、こう続けた。《かの千年王国の観念を共にするのではない》。その数頁あと、同胞体（生活協同組合）にちなんでまたもや逆戻りし、ほとんど幻覚のような言い方で新時代に言及する¹⁰⁴⁾。

より高度に人間的なゲマインシャフトの新時代、これぞ、我らが後の人々に残さんとする遺産。

さらにその数年後のテンニェスは、またもやペシミスティックな声調と中立的姿勢のなかにある。論文集「進歩と社会発展」（1926年）はそれをよく伝えている¹⁰⁵⁾。

現代の文化は、絶えざる解体過程のなかにある。その進歩は没落である。そのなかで自己を見出し、自己を肯定したその推移を望みもすること、それどころか嬉々として共に歩み、悲劇を直視し、恐れと希望の間を通りつつ、その二つを振り捨て、演劇の純化作用をたのしみもする、それは思うだに難く、至難ですらあろう。それができるのは認識、すなわち哲学において（つまり世間知としてだが）自己を変えるほどに熟しているときの認識である。

別の箇所では、正にスピノザを想起させるトーンで、こうも言う¹⁰⁶⁾。

学問的認識の目的は、慰めをあたえたり助言を垂れたりすることではない。それは、有用か有害かを問うのではない。それは問うことに終始し、したがってそれが本来の目的である。もっとも、特定の見地あるいは見方が役立つのか害になるのかという問いは、学問的な検討に開かれてはいるが、単純な解決をゆるさない。最初の副次的な問いは、誰に、であろう。どんな認識も愚者たちには有害かもしれない。認識が、彼らの精神を、現にそうである以上に混乱させるだけの作用にとどまるとしても。逆に、認識は、それが希求される度合いに応じて有益となる。認識に深い憧れを感じる者だけが、意図通りに、また完全に認識を自分に取り入れるだろう。認識への渴望を静めることができるのは真正の認識だけである。そしてこの鎮静は渴

104) 上記, S.64.

105) F. TÖNNIES, *Fortschritt und soziale Entwicklung. Geschichtsphilosophische Ansichten*. Karlsruhe 1926. 引用した論文が発表されたのは1922年であった。

106) 上記 S.44. この論文自体は1924年である。

望者に常に満足を与えてくれる。その満足は、藝術を味わうのと親近であり、それゆえ宗教的な教化とも親近である。—認識されたところのものには喜ばしくないとしても。

この関聯で何度ももちいられる言葉に《安楽死》、また老化のイメージがある¹⁰⁷⁾。

テンニェスのこうした揺れ動き、とりわけ国家が《新たな》ゲマインシャフトを作る可能性をめぐるそれを見ると、テンニェスの思惟のある層には疑いもなくヘーゲリアンの面があった（これを言うのは良心の痛みがあるにせよ）と言いたくなる。テンニェスのその立ち位置は、カール・マルクスを介してであったかもしれない。しかし、いずれにせよ、テンニェスの本来の思念は、本質的に、二項の対比概念ゲマインシャフトとゲゼルシャフトであることは動かなかった。もっとも、私たちは、テンニェスは（心ならずもであったとはせよ）価値づけ的な見方に踏み入ってしまった、とのレーオポルト・フォン・ヴィーゼが投げかけた非難からテンニェスを完全には解放できない¹⁰⁸⁾。

しかしこうした多分に哲学的な解説をやや離れて、二項の対比概念にして対立概念であるゲマインシャフトとゲゼルシャフトに焦点を合わせるなら、それがオリジナルなものであり、しかもテンニェスが繰り返し告白した通りであることには同意する他なくなる。それはドイツの伝統に照応するドイツ語の学術用語であるのは言うまでもないが、またそれ以前から、すなわち19世紀の第2三半世紀以来ヨーロッパの社会学の分野で形成された語彙の系譜に列なる。事実、テンニェスは、オーギュスト・コントの対比概念 „ordre“ と “progrès” を引き合い出したことがあった¹⁰⁹⁾。またハーバート・スペンサーはその生物学のアナロジーのゆえにテンニェスによって散々批判されたが、そこに後者が類似の一对の概念を見出した事実は動かない。すなわち社会の同質的相関と異質的相関という多分に形式的な対比、また封建制的・軍事的な社会秩序と産業的社会秩序という歴史性の勝った対比である¹¹⁰⁾。これ以外にも、多くの近似した概念システムを挙げることができ、またそれらのいずれも、テンニェスの中にながしかの残響をとどめている。しかし中でも、殊のほか意味大きい先例に注目したい。事実、それを讀んだことによって独自の対比概念を着想したことをテンニェス自身がみとめているものでもある。ここで言うのは、イギリスの法制

107) 同じく上記 S.44, 77/8.

108) Leopold von WIESE, *Tönnies Einteilung der Soziologie* (1925/26前掲注66), S.450.

109) F. TÖNNIES, *Contes Begriff der Soziologie*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, S.119 (初出は1909年).

110) F. TÖNNIES, *Herb. Spencers soziologisches Werk*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.I, (初出は1889年), S.99 では、産業システムは、“Contract-Régime”と重ね合わせられる。同様の見解は、スペンサーへの言及の随所で見受けられる。

史家ヘンリー・サムナー・メイン卿 (⇒p.184) である。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』のなかでテンニェスは、《このような見解に対する人々の関心を高めたところのある学識ある賢明な英国の著述家》として長文の引用を行なった¹¹¹⁾。また主著の初版以来、テンニェスは何度もこれを特筆した¹¹²⁾。また第二版への「序文」では、次のような言い方までしている¹¹³⁾。

本書の思想が熟したのは、メイン卿の『古代法』のなかの当該箇所（これはドイツ語に訳して収録したが）に出遭ったときであった。…ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの理論仮説と、それと不可分の本質意志と選択意志の理論仮説が成り立った。

テンニェスは、自己のオリジナリティを、むしろ、この二つの基本カテゴリーの定式化として、次のような《重要な認識》にみとめた¹¹⁴⁾。

慣習法と聖界法の中で、それが、自由で計劃に適い学問的理論にも支えられた立法に定着するような社会的欲求の異なった表現があるだけである。

その著作の他の数多くの箇所でも、テンニェスは、常に彼の思想のこの源泉¹¹⁵⁾に立ち返り、またそのときには二項揃ったこの唯一の対比を屢々強調した。ドイツにおける基本概念をめぐる平均的な議論の深部は、特にテンニェス自身がゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二律背反の源泉とみとめたこの問題性に取り組んでいた大半の人々によって看過されたことになる。

そのさい、(またもやテンニェスの考え方によれば) テンニェスの特殊な営為をどこに

111) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft* (1935前掲注6), S.184/5. [邦訳] p.256f.

112) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 1. Auflage* (1935前掲注13), S.43. ここではサムナー卿は《広い地平に立つ哲学的な法制史家》と呼んでいる。また第二版への序文ではメイン卿の《光彩あふれる数々の講演》について述べている。

113) 同上, S.54/5.

114) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907 前掲注19), S.359.

115) F. TÖNNIES, *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jahrhundert* (1908前掲注55), S.93, 95/6. 特に重要なのは S.98 の詳しい論説で、そこで重要なのは、テンニェス自身が、“Status“ と “Contract“ に関して、別の対比である本質意志と選択意志によってその基礎をなさしめた自己の功績を特筆していることである。同様の発言はF. TÖNNIES, *Neuere soziologische Literatur* (1891/92前掲注72), S.153/54.でもおこなわれる。《筆者もメイン卿の定式“Status“ と “Contract“ の対比を確認する立場をとっており・・・それは現実に存するの。しかもそれが場を占めるどこでも、“Status“ は自然的・家族的にして性向と慣習によって肯定される共生であり、他方 “Contract“ は、目的のために、おそらく不本意ながら、また困窮によって余儀なくされたまとまりであり、状況次第では服従させるのである。》

見定めるのかを問うことは後退した。それでいながら、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトというペアの対比概念は、世界の社会学へのドイツの寄与とみなされるのである（実際にはそれが強度にイギリス起源であり、他にも畢竟そこへ行き着くような多くの源泉があるにもかかわらず）。だからこそ、ここでは（既に言及したように）テンニエスの意志学説の哲学的・存在論的背景を明るみに出したのである。正しくそこがテンニエスのオリジナルな哲学思想の心臓部であるが、また押し止めようもなく社会学から離れてゆく。

VIII 思想史と社会学におけるテンニエスへの影響源

これまでに検討した意味でのテンニエスの特徴を言えば、テンニエスは、その二種の基本概念が経験的に適用されるような受けとめ方をされていることに満足せず、**概念の対比性の意味を哲学的に導きそうとする追加的な試みに取り組んだ**。これはテンニエスの十全な理解にとって重要性をもたないどころではない。ヘーゲルならびに*ローレンツ・フォン・シュタインなどのヘーゲリアンへのテンニエスの関係を決定的にしているのはそこだからである。すでに『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』初版の序文においてテンニエスは、歴史的・有機的観点と合理的・形態的観点の違いを説明していた。この二つの観点は、法学でも国民経済学でも裂け目を見せていた。テンニエスはその論議に独自に寄与したが、それは、形体的・合理的視点に対して歴史的・有機的視点を《否定的に対置させ》、前者を《それ自身のなかで掬いあげ、自己自身に依拠するものとして押さえることを試みた》¹¹⁶⁾が故である。1894年の論文「歴史主義と合理主義」のなかでテンニエスは、当初は示唆するだけであったこの理念の流れを追った。すると、テンニエスの見るところ、《有機的な国家理論》とは何もかもが折り合わなかった。その国家理論とは、ヘーゲルの思弁の延長線上、しかしまたとりわけロマン主義の延長線上で、国家と自然法とのあいだの対比へと組み立てられたものだった¹¹⁷⁾。ここにおいて、法学と国家学の展開は、国民経済学の展開とは異なった変転を遂げたことが見えてくる。

*歴史法学は……民の中に《有機的なもの》すなわち《静的な作用力》、また国家とその恣意のなかに機械的な作用力をみとめた。逆に*歴史学派の国民経済学は、孤立した諸個人の（対照的に根拠づけられた）諸々の関係性のなかに単なるメカニクな諸関係を見てしまう傾向がある。それに対して歴史法学は《有機的な国家理論》の上に成り立っており、個体は《偏に国家の中で生きる》ことができるとの教説

116) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 1. Auflage* (1935前掲注13), S.42.

117) F. TÖNNIES, *Historismus und Rationalismus*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.I.(Jena 1925), S.108/9.

と親近である。なお、それは決まってアリストテレスの政治的動物 (Zoon politikon / ζῷον πολιτικόν 都市国家に生きる者) と取り違えられるのだが。

テンニェス自身はこの考え方に断固として反対しており、そこにはカール・マルクスの諸要素が明らかにみとめられる¹¹⁸⁾。

しかし私が主張したいのは、ゲゼルシャフトと国家に本質的なのは、合理主義への傾向すなわち個人的か集合的かはともかく自由で功利主義的な思想、ということだ。同じ傾向は、(学問に本質的な) 目的適合的な諸概念の自由な形成という傾向は、また《歴史的》思惟 (もともと、それが通常意味するものは別だが) という社会的な生き方という事実に関連する合理的思惟の新たな形状への経過でもある。

その数年後の 1899 年の論説「社会学への序説」の中では、こう言われる¹¹⁹⁾。

国家は、自己を個々の人格として、(自然な) 個々の人格に対置せしめるゲゼルシャフト以外ではない。

これによって、最終的にはこう決論づけられる¹²⁰⁾。

加えて、私の理論は、外面的には、有機的な見方と機械的な見方の対置、歴史的な見方と合理的な見方の対置を結合するものとして呈示される。しかし当面の意図は、両者をあり得べきものとして主張することのみ向かう。事実、その可能性は、現実によって証明される。

それは、二つの見方のどちらも新しいものではなく、それらを呈示する仕方に新しさがあるということに他ならない。すなわち、両者を《並列し、しかも一方を誤り、他方だけが正しいというような呈示をしないことにある》。ここから、この考え方では、二種の整然と分かれた軌道に分岐させられる。その考え方は、**一面では**両者を《人間的意志の理論》のなかに同等に根拠を得させると**共に他面では**どちらの見方も《それぞれの仕方で正しさを持ち、真実のかけらを分有し、そして**全体は仲介作用を果たすさらに高次の見方**にもと

118) 同上, S.110.

119) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.70.

120) 同上, S.71/72.

められる》(強調は引用者=ケーニヒ)といったことはきっぱりと拒否される。テンニェスはむしろ、すでに初版序文でも、形体的・合理的な見方を有機的な見方に《依存する》ものと主張していたが、《その意味は、<有機的な>見方は同時に原初的で包括的、つまりその限りでは自足していること》にある¹²¹⁾。

この最後の言い方で、上で取り上げた考え方が現される。すなわち、ゲマインシャフトは歴史的にゲゼルシャフトに先立つ秩序であるだけでなく、システムティックには上位の秩序とされる。さらにテンニェスは、新たなゲマインシャフトの意味での**未来の展開**をも斥ける。しかし、システムティックかつ歴史的にゲゼルシャフトがそこから生成する《弁証法的な母体》との関係において、つまりその母体を他のすべての上に配置することによって、きわめて明白に価値づけをもおこなった。しかし同時にその母体を特定の過去と照応させたことによって、テンニェスは、語の原義において**後ろ向きの預言者**となった。そこではっきり見えてくると言ってもよいのは、テンニェスにはポジティブな使命が欠けていることである¹²²⁾。

したがって《ゲゼルシャフト》の概念とは、すべての《ゲマインシャフト》が没落する法則通りで規準的な推移の謂である。これが真実であることを言い表すには没落過程を押さえる以外にはないが、それがもはや形成途上ではなくなっているとすれば、形にしてみる他ないだろう。もっとも、それは、没落の条件やその真正の意味への予感など無いままに起きたことではあったのだが。

これによって、テンニェスの思惟モデルはまたもや変化する。今や、過去の立脚点のみが《唯一正しさをもつ》ものとして立ち現れ、他方、近代ゲゼルシャフトの経済学的運動法則は《ヴェール下の露呈》に至り(ここにはカール・マルクスへの共鳴がみとめられる)、厳密な意味において《没落構造》を表示するものとなる。これは一面において、先に言及した事情をより明るみに出すだろう。すなわちテンニェスが、社会的関係性について語るときには偏にポジティブで《非敵対的な》関係性を視野に入れていたことである。ここでは、**過去のゲマインシャフト構造に関するテンニェスの価値づけの姿勢が社会的なもの**(das Soziale)というその総体概念に影響したと思われ、またその総体概念は、社会哲学的なもの、あるいは社会倫理的なものと言ってよいような現れ方をする。と共に他面では、他面で、これは(私たちが見るところでは)、ゲマインシャフトの本質的な展開過程は《没落》

121) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.70.

122) 同上

しかないと見えるところから、ゲマインシャフトの《脆さ》¹²³⁾への珍しい評価である。しかし詰まるところ、ゲゼルシャフトはゲマインシャフトへの関係ではどのように見えるのかという問いになる。ゲゼルシャフトは、実際に、没落したゲマインシャフト以上のものやそれ以外のものなのであろうか？そもそも、本来の意味で、概念のこの二律背反が存するのかどうか、また基本的には、この上ないまでに二義的で哲学的な性格の唯一のカテゴリーがはたらいているのであろうか？哲学がまっとうではないやり方で社会学のいわゆる基本概念の形成過程にまぎれこんでいるとすれば、メイン卿の壮大な失意を振り返り、もう一度嘆くことになる。

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』第二版の序文において、テンニェスは《対比の外に、また対比の上に》立ち位置を占めようとしていると強調したのだったが、その自己認識の欠如には驚くほかない¹²⁴⁾。

理論は、事物とその推移に対して批判的、つまり何よりも認識を旨として省察と観察を以てすべきである。

たしかに、誤った理論で進めているのを解体する意味で《批判的》と解するなら、テンニェスは自己の立ち位置を正しく見ていたと言えるだろう。実際、有機的国家理論の神学的背景を再三攻撃したのはそれを示している¹²⁵⁾。だからと言って、テンニェスの見地がカントの意味での批判的と結論づけることはゆるされず、できもしない。テンニェスのそれはあらゆる《教義》に反対しているからである。同じことは、1913年の論説「社会学と歴史」に対してもいうことができる。そこでテンニェスは、社会学の《自然科学的傾向》を強調したのである¹²⁶⁾。ともあれ私たちは、テンニェスを決定的かつ十分に位置づけることが如何に難しいかを強調しておかなければならない。なぜなら、テンニェスは、あらゆる過去への責務にも拘わらずロマン主義者ではないからである。それは、1908年の強烈な印象をあたえる論説「19世紀ドイツにおける社会学の発展」が教えるところでもあり、そこでテンニェスは、多数の新しい影響源が自分に関係したことを明らかにしたからである。事実その中でテンニェスは、あらゆるロマン主義的な過去の浄化を斥け、むしろ彼には《自

123) この《脆さHinfälligkeit》という表現は、オスカー・ベッカーの次の論考からとった。参照,Oskar BECKER, *Von der Hinfälligkeit der Schönen und der Abenteuerlichkeit des Künstlers*. In: *Ergänzungsband zum Jahrb. für Philosophie und phänomenologische Forschung*, Halle 1929, S.27-52.

124) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 2. Auflage* (前掲注15), S.50.

125) 同上, S.52 その他類出

126) F. TÖNNIES, *Soziologie und Geschichte* (1913前掲注42), S.196/7.

然法と歴史法学の間の相克が大きな意味をもった》ことを再度力説した¹²⁷⁾。そのさいテンニェスは（これがその立ち位置を最もよく特徴づける、とも言い）、歴史法学に反対して、歴史法学には《あらゆる哲学が欠如している》と強調した（この指摘をテンニェスはそれ以前にはヒュームの経験主義に対しておこなっていた）。またそこから自己の課題が培われた、ともテンニェスは記した¹²⁸⁾。

彼（＝ヒューム）は、人間のあらゆる関係、したがってあらゆる主観的な関係もだが、その存在根拠は、群生動物の諸関係や結合と現実と異なることにある。それは、人間の場合は、自己の欲求と思惟に見出されねばならない。……共通かつ本質的なメルクマールとして、人間の関係・結合のあり方は典型的な場合、自由な欲求から、すなわち自由だけが持ち得る正しく深い意味合いにおいて肯定されるところにある。つまり対比的な理念が生成するのは、一面では関係・結合が直接的に、つまり自己意志で肯定されることによってである。もっとも、それは同時に意識によってではあっても、その価値としての有効性と目的適合性のゆえに、他面では手段として純粹である。すなわち明快な弁別と区分、最初の自然からは個的な目的に応じて、それどころか場合によっては目的に背くかたちにおいても。正にここに、概念が違ったものとなる分岐点、すなわち基準が存するように思われる。

テンニェスは、この他にも影響源を幾つも挙げて、その都度、そのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念を具体的な内容で満たす上で助けになったテキストとその論者を挙げた。それに徴すれば、私たちは、自ずと三つの区分をほどこすことができる。

- 1) ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの発展過程を説明するために引き合いに出されたテキストと論者。
- 2) ゲマインシャフトの概念それ自体を具体化するのに役立つテキストと論者。
- 3) ゲゼルシャフトの概念それ自体を具体化するのに役立つテキストと論者。

もちろんこの三つの区分のいずれにも名前を挙げて然るべき論者もあれば、明らかにいずれかにかかわる人名もある。私たちはここでは個別的には（それはあまりに長くなるおそれがあるため）立ち入らない。しかしテンニェスに中心的な影響をあたえた人名だけは列挙しておきたい。

第一のグループに属しているのは次の論者たちである。ヨーハン・ヤーコプ・バッハオー

127) F. TÖNNIES, *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jahrhundert* (1908前掲注55), S.97

128) 同上, S.97.

フェン (⇒p.184)、*ヨーハン・カスバル・ブルンチュリ、*カール・ビュッヒアー、オーギュスト・コント (⇒p.184)、*ハインリヒ・クノー、*フリードリヒ・エンゲルス、*アダム・ファーガソン、ヘーゲル (⇒p.201)、*ヨーゼフ・コーラー、*ジョン・ラボック卿、*ジョン・ファーガソン・マクレナン、ヘンリー・サムナー・メイン卿 (⇒p.184)、カール・マルクス (⇒p.184)、*ローベルト・フォン・モール、ルイ・M・モーガン (⇒p.184)、*サン＝シモン、*グスタフ・シュモラー、ハーバート・スペンサー (⇒p.184)、ローレンツ・フォン・シュタイン (⇒p.223)、*エドワード・バーネット・タイラー卿。

第二のグループは特にゲマインシャフトの概念との関係で挙げるべき論者たちである。特に*フェステル・ド・クーランジュの著作『古代都市』(初版1864年)はゲマインシャフト概念の形成において、ドイツのあれこれの伝統以上に後見人の位置にある。次いで*オットー・フォン・ギールケは、ゲマインシャフトの一般文化的性格を闡明する上でテンニエスの負うところすこぶる大であった。またオーストラリアの*ウィリアム・ハーンやフランスの*エミール・ド・ラヴェレ、さらに*ライスト、*パウル・フォン・リーリエフェルト、*アルフレッド・コミン・ライオール卿、*アルベルト・シェフレ、*フリードリヒ・ユーリウス・シュタール等も数えられる。

第三のグループは特にゲゼルシャフトの概念との関係で挙げるべき論者たちで、*ヨハネス・アルトウジウス、*トマス・ホップズ、*ルードルフ・フォン・イエーリング、カント、*ヨーハン・カール・ロートベルトウス、アルトゥール・ショーペンハウアー (⇒p.186)等である。

繰り返しになるが、このリストはあらゆる点において不完全である。これを挙げたのは、偏にテンニエスの関心がすこぶる多岐に渡っていたこと、またフランスからもアングロサクソン文化圏からも多大の影響を受けていたことを確認するためである。同時にそれは、ハンス・フライヤーのテンニエス評への直接のコメントにもなるだろう。フライヤーは、個人的な見解としてだけでなく、時事として流布している世評を取り上げ、そこからテンニエスが際立って《ドイツ的な》社会学と謳った。たしかに、呈示の仕方をみればテンニエスは《ドイツ的》なのではあろう。また(ドイツという)地域性と共に、強度に個人的な色合いのスタイルと言ってよい。しかし彼の思惟の中身は、断じて《特殊な》すなわちドイツの特徴なのではない。その意志理論はショーペンハウアーを経由して、スピノザとホップズに遡る(ただしライブニッツは後景に退く)。と言うのは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二項対立は、特にメイン卿に行き着くところ大きいからである。少なくとも私たちには、かかる事情を直視するなら、テンニエスについて、社会学における特殊ドイ

ツ的類型を特筆するのは適切ではない¹²⁹⁾。

IX ゲマインシャフト概念の先行する諸例

テンニエスの著作の総合評価のためにも、純粹社会学の基本概念として提示されたゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念をさらに分析することは緊要であろう。それは、一部では、**テンニエス以後の社会学の基本概念をめぐる議論にもつながり、現在の状況につながる経過をも目にする**ことになるだろう。またこの段階でもすでに留意すべきだが、これらの概念を理解するには二つの根本的な異なった道がある。それらはテンニエスにおいても含まれる二種の可能性でもある。一つは、ここで挙げた行き方の下で順番にあらわれる歴史的な構造概念である。この意味では、たとえばハンス・フライヤーがこう述べている¹³⁰⁾。

ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの構造は、この秩序において、またこの秩序においてのみ時間的に継起する。それはゲゼルシャフト的な共生の二種の可能性だけでなく、ゲゼルシャフト的な現実の二種の階梯でもある。ゲマインシャフトはゲゼルシャフトにのみ成ることができる。すなわちゲゼルシャフトはゲマインシャフトからのみ生成する。実際の経緯は、決してその逆ではない。

二つ目に、これとは逆に、形体的社会学の意味でのゲゼルシャフト的な共生の二つの可能性が本来的に問題になる。テンニエスがその概念の理念型的構造を浮かび上がらせ、またそれらは先ずは《混じり合って》現れる、と言うとき、これを常に見ることができる。多言を費やす代わりに、後者に関するテンニエスの発言を挙げておこう¹³¹⁾。

ゲマインシャフトの要素とゲゼルシャフトの要素が同時に存在しないような文化状況を私は知らない。

129) 先に挙げたフライヤーの論説を参照, Hans RREYER, *F. Tönnies und seine Stellung in der deutschen Soziologie* (1936前掲注7), S.1.その他. またこれとは反対の見解は早くからドゥンクマンが表明していた。参照, Karl DUNKMANN, *Die Bedeutung der Kategorien Gemeinschaft und Gesellschaft für die Geisteswissenschaften* (1925/26前掲注59), S.37.; しかしテンニエスにおけるドイツという地域的モメントについては最近でも次の論説が見られる。参照, Friedrich HOFFMANN, *F. Tönnies im Gedenken seiner heimatlichen Verbundenheit zu seinem 100. Geburtstag*. In: *Zeitschr. der Gesellschaft für Schleswig-Holsteinische Geschichte*, Bd.97 (1955).

130) Hans FREYER, *Soziologisches als Wirklichkeitswissenschaft*. (1930前掲注8), S.182.

131) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposium* (1931前掲注12), S. 135.

ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの категорияに関するかかる見解はカール・ドゥンクマンにおいて強く見られる。少なくとも彼がテンニェスに接近した最初期にはそうである¹³²⁾。

私たちはその区分を経験的様相に還元せず、それぞれの内的な変化の必然性において理解することを学んだ。

この二つの問題設定への批判的解説は幾つかの異なった視点から行なうことができるだろう。先ずは特に適正性すなわちゲマインシャフトとゲゼルシャフトについて言われるこうした展開の有意性についてである。二つ目は特に、これらの概念を相互排他的と同時に社会的な相互関係性を開示するような対比は、果たして現実の対立として存在するのだろうか、またどんな対立か（相対矛盾的吗、それとも絶対矛盾的吗であるのか）、という問いである。はじめの場合、そこで言われるのは、すでに言及した意味に関する問い、すなわちテンニェスは《ゲゼルシャフト的》状態のより完全な到達に向かう進展、言い換えれば《新たな》ゲマインシャフトへの道をどのように考えていたのかという問いである。したがって私たちが既に示したように、テンニェスは、ここでは決して明快ではない。彼が屢々吐露するペシミズムにも拘わらず、（これまた先に列挙したことだが）あらゆる価値ニュートラリズムにも拘わらず、（少なくとも可能性としては）新たなゲマインシャフト成立の方向を指し示す多数の徴候がみとめられるのである。しかしこの契機にゲゼルシャフトからゲマインシャフトへの進展があるとみなするなら、歴史展開の図式を根本的に破産させることになるだろう。それゆえこれによって私たちは、歴史的観点から再び形体的観点へ押し戻される。その観点に立つなら、私たちが関わるのは本当に絶対矛盾的な対立なのだろうか、との問いが起きる。もっとも、詳しく検証すれば判明するように、テンニェス自身はきわめて明快に、ゲマインシャフトはゲゼルシャフトの上に位置すると考えており、従ってそもそも対立と言うには当たらない。しかしそこには分かり難さが重なっており、それが不安をつのらせるのも故ないことではない。

これら一聯の難問の主因はゲマインシャフトという語そのものにあるように思われる。テードル・ガイガーが明らかにしたように、この語がはじめから曖昧であった¹³³⁾。加えてゲマインシャフトとゲゼルシャフトという二つの言葉の相互の関係が、これまた少しも明

132) Karl DUNKMANN, *Die Kritik der sozialen Vernunft*. Berlin 1924, S.40.

133) Theodor GEIGER, Art. „Gemeinschaft“. In: A. VIERKANDT, Hrsg., *Handwörterbuch der Soziologie*. Stuttgart 1931, S.173.; また重要な資料としてグリム国語辞典の当該箇所を参照, J.und W. F. GRIMM, *Deutsches Wörterbuch*, IV., 1.Abt., 2.Teil. Leipzig 1897.見出し語 „Gemeinschaft“ 及び „Gesellschaft“.

白ではないが、それには、本来のこの二語の意味は定まっていなかったことが与っている。18世紀末でも、ドイツ哲学の伝統では、今日私たちがゲゼルシャフトとして解しているものがゲマインシャフトと表記されることが多く、またその逆も見られた。原義については、ゲマインシャフト (Gemeinschaft またゲマイントシャフト Gemeinschaft とも) はゲマインデ (Gemeinde) とほとんど同義であった。何かを手を同じくして持つ (etwas zur gemeinen Hand haben) は、ほとんどの場合、町村体の地所 (Gemeindegrund) が考えられており、入会地 (Allmende) や町村体の域内 (Gemeindegebiet) について言われたのである。またこれとは別に、この語は、《共生や共存の他のあらゆる形式》を意味した (グリム)。この意味では、教会による語法がある (Gemeinschaft der Heiligen 聖者たちの世界)。しかし世俗的には、親族関係や政治的関係のあらゆるあり方にも用いられるようになり、遂には人類全体にも拡大された。ここで決定づけるものは、純然たる社会的関係性にあるように思われる。と共に、最初の事例では、人間の集まりと事物の集まりの間の関係性が考えられている。さらにゲマインシャフトの語が、《狭い緊密な圏、あるいは共生の諸関係》、例えば夫婦と愛情など総じて親密な交際 (familiaritas) すなわち生活共同体 (Lebensgemeinschaft) に適用されるや否や、ゲマインシャフトの語の純然たる社会的意味は特殊な極端化をきたす。ここから、ゲマインシャフトの語は、至高の価値感情の意味で強調されることになる。また共に、あらゆる種類の交流や交際 (commercium) としてまったく色あせた意味が並ぶことになる。結論として特筆すべきは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの語義を明白に区分しようとしたテンニエスの数々のよく知られたコメントも¹³⁴⁾、仔細に見れば、特殊な語法とわずかに触れ合うのみで、一般的な語彙使用とは照応しないことである。殊に《利害共同体 Interessengemeinschaft》の概念もまことに古くからであるが、テンニエスのターミノロジと鋭く対立する¹³⁵⁾。ゲマインシャフトの語については、要するに以上のような調子である。

しかし注目されるのは、今日まで、逆にゲゼルシャフトの語が (パラドックスながら強調しようと思うが)、元々、《ゲマインシャフト的》な意味をもっていることで、それはグリムの国語辞典から端的に明らかになる。そこではこう説明されている¹³⁶⁾。若者 (徒弟) たち (Geselle)、同僚 (Genosse)、王侯の家の子郎党、戦争の扈従、旅行の伴揃い、従士団、仲間衆 (Genossenschaft)、騎士たちのきづな (Bund) あるいは兄弟的結束 (Bruderschaft)、騎士修道会、身分仲間 (Standesgenossenschaft)、都市における同族の総員、あるいは宗教的な会衆 (Gemeinde) もそうであり、《内的なゲマインシャフト!》の意味まで含む。また

134) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8. Verbesserte Auflage (1935前掲注6), S. 3ff.

135) J. und W. F. GRIMM, *Deutsches Wörterbuch*, IV., 1. Abt., 2. Teil. (1897前掲注6), S. 3264-3268.

136) 同上, S.4049ff.

夫婦のゲマインシャフト、友人同士の共同・同盟、とあり、そこでは、(ゲゼルシャフトの意味説明に)ゲマインシャフトの語が実際に同義として頻繁に用いられる。グリム国語辞典の記述を見わたすと、これらと並んで、テンニェスが考えていた意味でのゲゼルシャフト、例えば商業ゲゼルシャフト (Handelsgesellschaft) もたしかに載ってはいる。しかしそれは下位の位置づけでしかなく、また座団 (Korporation [訳注] 学術用語としては前近代的・因習的な諸組織を一般的に指すことが多い) と密接とみなされている。さらに《上位の》ゲゼルシャフトや《良き》ゲゼルシャフト、またそのものずばり集い (Geselligkeit 社交) やそれに類したものが副次的に意味されていた。

これらすべてを見た上で疑いもなく言えることだが、テンニェスは両語の意味の違いはドイツ語では自明と説いていたが、それにはまったく根拠がない。テンニェスは、意味を引き出したのではなく、意味を付与したのである。この意味付与は、語の歴史に照らすと、正しく恣意的であった。それだけでなく、その意味付与が果たして目的に適ったものかどうか、という問いも立てられよう。少なくとも全体を見渡すなら、もともと語意の不明確さは紛れもないだけに、わざわざこれらの語を社会学のカテゴリー論の出発点で選んだこと自体が適切だったかどうかとの疑問は不可避である。とは言え、まだその妥当性を本格的に問題にする段階ではないことも強調しておきたい。むしろ当面は、なお語意と意味論の次元に集中しなければならない。

ゲマインシャフトの語意の最も無理のない輪郭をもとめるなら、ゲマインデ (Gemeinde [訳注] 町村体・教会の会衆) との重なりであろう。そこで先ず意味されるのは、事柄の共有 (たいていは所有) 関係である。テンニェスにおいても、この意味が入っている。それは『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』初版のサブタイトル「経験的文化形式としての共産主義と社会主義に関する論考」において明白である。ゲマインシャフトと重なる原初の共産主義的《共有財産》(Gemeineigentum) の観念が取り上げられたのも、同じ方向であった¹³⁷⁾。最後に、テンニェスの頃、人々を熱っぽくさせた独特の教説も加わる。《事物とのゲマインシャフト》もあるのではないか、この問いにテンニェスが肯定を以て臨んだことは注目されよう¹³⁸⁾。それゆえテンニェスのゲマインシャフトの語法は、見ようによれば、古い語義と重なっている。さらに発展史の意味では、この語法は (これが使われる限りで

137) F. TÖNNIES, *Das Eigentum*, S.16ff.; DERS., Art. „*Eigentum*“. In: *Handwörterbuch der Soziologie*, S.107.

138) 多くの箇所を挙げる代わりに、ここではテンニェス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』S.4.を挙げるにとどめよう ([邦訳] p.18: 《例えば田畑、林、牧場の共有 Gemeinschaft des Besitzes という言葉は存する……》)。《ゲマインシャフト》の概念を純粋に社会的に解する (すなわち人間のあいだの関係性) に限定する) 人は、この点ではネガティブな判断をする他ないだろう。たとえば次を参照, Th. GEIGER, Art. „*Gemeinschaft*“. In: *Handwörterbuch der Soziologie*, S.178.; 逆に見解では次を参照, Hermann SCHMALENBACH, *Soziologie der Sachverhältnisse*. In: *Jahrbuch der Soziologie*, Bd.III. Karlsruhe 1927.

だが) 有意であり、したがってその語法は正統性をもつ。もっとも、妥当性を問うことにはここではまだ立ち入らないでいる。つまり、共産制的な共有財産が出発点になるのかどうかという問いだが、そうした不分明を引きずったものへの問いは今日の研究からは後景に退くだろう。何であれ社会的結合を指すゲマインシャフトという語法はまことにありふれたもので、一般ずれしている。それは断じてテンニェスが分かち持っているものではない。後者のゲマインシャフトとゲゼルシャフトという二項対比の語法はすこぶる特殊なのである。もともと一般語としてのゲマインシャフトは社会的関係という以上ではないと言ってよいだろう。そこでテンニェスに残されたのは、唯一つ、社会的結合の格別に緊密でこの上なく昂揚した肯定的形式をこの語に託すことであった。かくして《すべての信頼できる、ひそかな排他的な共生》を意味する独自の語法が成り立った¹³⁹⁾。

この最後に取り上げた問題と共に、改めてターミノロジーの不快なまでの混乱が浮かび上がる。それは特に18世紀末から19世紀初めであるが、狭い結びつきの類型としてのゲマインシャフトと、外的な結びつきの形式としてのゲゼルシャフトとの区分は元々不分明というのが事実である。のみならず、ゲゼルシャフトが緊密な結びつきの形式と見なされ、片やゲマインシャフトはその反対という対比すら浮かび上がった。加えて混乱に拍車を加えたのは、**両概念が一般的に人間的な結合一般の意味でもちいられていたこと**である。あらゆる相互作用という最広義でのゲマインシャフトでは、カントが好個の事例である(『純粹理性批判』第一部第一篇第二章)。それに照応するゲゼルシャフトの概念については、後に見ることになる。また*フィヒテは、《ゲゼルシャフト》という言い方で、今日私たちがゲマインシャフトと名指しているものを解していた。すなわち、内的かつ《有機的なゲマインデ》と結びついた倫理的な諸人格のゲマインシャフトである¹⁴⁰⁾。そしてこれらに国家が《人工的な施設》として対置する、とされる。もっとも、フィヒテの思念も時おり揺れ動いた¹⁴¹⁾。そして最後にヘーゲルが国家を《人倫的イデーの現実体》として指定したが、後にテンニェスによって、国家は本来のゲマインシャフトに対立するもの、すなわち《ゲゼルシャフト的》作り物にすぎないとして解体されることになる。フィヒテとのアナロジーのなかで、たとえば*シュライエルマッハーはゲゼルシャフトを《目的とは無縁な社交》と言い、それに対してゲマインシャフトはシュライエルマッハーにとっては外的な目的と結びついていた¹⁴²⁾。少し前に特筆したように、シュライエルマッハーは、ロマン

139) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8. Verbesserte Auflage (1935前掲注6), S. 3.

140) J.G. FICHTE, *Ges. Werke* (Ed.Fichte), VIII, S.114.

141) フィヒテの思念が時に揺れ動いたことについては次を参照, Nico WALLNER, *Fichte als politischer Denker*. Halle 1926.

142) F.E.D. SCHLEIERMACHER, *Versuch einer Theorie des geselligen Betragens*. 1799.

主義の影響の下、テンニェスを予見するかのような方向へ見解を変えていった¹⁴³⁾。これによってゲマインシャフトとゲゼルシャフトという概念的な二項対立をめぐって、(先に言及したような)歴史主義と合理主義の克服として提示される展開への軌道が敷かれることになった。

もとよりここでは、概念の歴史を隈なく広げようとしているわけではない。僅かに、システムティックな推論のために二三の手がかりを挙げただけである。とまれテンニェス自身は、後の展開のために十分な資料を集め、揃えてもいた¹⁴⁴⁾。またテンニェスの後では、*ゲルハルト・レーマンがそれに取り組んだ¹⁴⁵⁾。ここで挙げておくべき重要なこととして、同じような試みは、ドイツではテンニェスの意味での歴史主義と合理主義の克服の試みが、テンニェス以前からなされていた。そしてその場合にも、テンニェスの意味でのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの語法が決定的なものとして問題になった。それに属するものでは、とりわけチューリヒで活動した法分野の改革者ヨーハン・カスパル・ブルンチュリ(⇒p.386)であった。出発点はローマ法で、その段階でも部分的に自然法に関心を寄せていたが、やがてゲルマン法、殊にドイツ中世の法に向かった。このブルンチュリは、ゲマインシャフトを古いもの、それに対してゲゼルシャフトを新しいものと考えた。それによれば、《ゲゼルシャフト》は《民(フォルク)概念》ではなく、《第三身分》にすぎない。したがってゲゼルシャフトは近代《市民社会》に、片やゲマインシャフトはより古い《民(フォルク)の文化(Volkskultur)》に属し、これによって後者は古いゲマインデ概念(Gemeindebegriff)と合体するとみなされた¹⁴⁶⁾。テンニェス自身は、主著のなかでこの先行者を殊のほか称賛したが、そのさい奇妙な勘違いをおかした。ゲゼルシャフトを《事実としても名称としても》新しいものと見たのである¹⁴⁷⁾。たしかにテンニェスの意味ではゲゼルシャフトは恐らく新しいと見てよい事実ではあろう。しかしゲゼルシャフトの概念は

143) 参照, Gerhard LEHMANN, *Sozialphilosophie*. In: Karl DUNKMANN, *Lehrbuch der Soziologie*. Berlin 1931.

144) F. TÖNNIES, *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jh.* (1908前掲注55). この他にも同種の見解は著作の随所に見受けられる。

145) Gerhard LEHMANN, *Das Kollektivbewußtsein*. Berlin 1928.

146) J.C. BLUNTSCHLI und Karl BRAHTER, *Deutsches Staatswörterbuch*, 11 Bde., 1857-1870, Bd. IV, Art. „*Gesellschaft und Gesellschaftswissenschaft*“. そのさいGesellschaftとGeselligkeitが屢々混同されている。

147) ブルンチュリへの言及については次の箇所を参照, F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8. Verbeserte Auflage (1935前掲注6), S. 4.[邦訳] p.18. [訳者補記] この箇所を抜き出すと、《事実としても名称としても、ゲマインシャフトは古く、ゲゼルシャフトは新しい。このことは一学者によつて認められている。この学者は、この点を除けば、深く究めることもせずあらゆる方面にわたつて政治論を説いた人であるが・・・》とあり、テンニェスは語史に限定してブルンチュリに賛同している。; DERS., *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jh.* (1908前掲注55), S.85.; また次を参照, Theodor GEIGER, Art. „*Gemeinschaft*“. In: A. VIERKANDT, Hrsg., *Handwörterbuch der Soziologie*. (1931前掲注133), S.175. ここでガイガーは、ブルンチュリをロマン主義者と呼んでいるが、これはどう見ても不適切である。

言葉としてはゲマインシャフトの語と同じくらい古い。この他、同じ意味でのもう一人の先行者は、ドイツでは*ルードルフ・グナイストがおり、やはりテンニェスはその名前を挙げている¹⁴⁸⁾。ここでは、ゲマインシャフトが、古いゲマインデ、すなわち人間と事物との相関としての意味でもちいられていることには注目するべきだろう。さらに最後になお挙げておくべきは、これらの先行者の場合は、いずれももっぱら語法を追跡しており、事態そのものを追ってはいないことである。先行者についてはこの点で欠を補う必要があることは上でもふれた。

次にゲゼルシャフトの語史をもう少し追う前に、ゲマインシャフトの意味の歴史の枝分かれに簡単に目を走らせておかねばならない。するとそれは、またもや一面的な様相を浮かび上がらせる。すなわち、純然たる精神的な結合としてのゲマインシャフトである。テンニェスも取り上げているが、もっともそれは、血のゲマインシャフトと場所のゲマインシャフトの次に来る第三のゲマインシャフトとしてである。すなわち朋友 (Freundschaft) であるが、これは《人為的な》ゲゼルシャフト構造にすでに強く向いている。ちなみにこれはたいい価値づけを伴うゲマインシャフト理解であり、先に、際立った価値意味として特筆したものである。それは基本的には二つの形式をとる。厳格な意味での精神ゲマインシャフトとロマン主義の意味での感情ゲマインシャフトである。個別の諸点には立ち入らずに、このゲマインシャフト概念は疑いもなくヘーゲルにおいて中心的な役割を果たしており、ヘーゲルに接続してローレンツ・フォン・シュタイン (⇒p.223) においてもそうである。すでに*フリードリヒ・シェリングにあってもフィヒテの理念が受け継がれており、先に強調したように、そこでは、純粋な精神秩序における《有機的なゲマインシャフト》が現れる。ヘーゲルではそれがいっそう引き延ばされるが、それは弁証法的であった。すなわち、精神の直接的な実在性としての家族からその感覺的統一性が成立し、また《市民社会》の中での統一性には《差異の階梯》が対置し、最後は国家の中に《人倫的イデーの現実体》を、すなわち人倫的精神性が開かれ、自己をみずから明らかにする一体的意志として》呈示する¹⁴⁹⁾。ここにおいてゲマインシャフトは、実態的な人倫の中にみとめられるようになり、この実体的人倫は《意識された一般性》の形式で《自己意識による

148) Rudolf GNEIST, *Der Rechtsstaat und Verwaltungsgerichte in Deutschland*. 2.Aufl. Berlin 1879, S.4. 《かつて財産と仕事によって結び合わされていた諸個人の生きる共同体[persönliche Lebensgemeinschaft]の溶解は、人間を、新しいあり方での(すなわち新しい需要や新しい要求をもつ)国家と風土に置くことになった》。; またグナイストへのテンニェスの言及は次を参照, F. TÖNNIES, *Entwicklung der Soziologie in Deutschland im 19. Jh.* (1908前掲注55), S.83.; F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft*. (1926前掲注31), S.267.

149) G.W.F. HEGEL, *Grundlagen der Philosophie der Rechte*. Ed.Lasson, Leipzig 1930, §§158ff., 182ff., 257ff.

人倫的実体》にまで上昇する可能性を獲得する¹⁵⁰⁾。ヘーゲル自身が《全体性の位相》においてこの問題をみとめ、またヘーゲルは、現実を精神との宥和にもってゆくことに成功した。一方、それによってすでにゲマインシャフトはただの精神、あるいは精々、殊のほか親密な結合の意味における感受性とみなされる危険を帯びた。かかる理解は（上述のように）テンニェスにも及んでいる。しかしテンニェスの場合、明らかに、決然としたものではない。それがよくうかがえるのは、論文「ゲマインシャフトの概念」における論及であろう。そこでテンニェスは、外的なゲマインシャフトと内的なゲマインシャフトとを区分し、また両者の《架橋》を明示した¹⁵¹⁾。注目すべきは、テンニェスが結合形式として《同胞体》(Genossenschaft)を名指したことである。同じく「社会学入門」では、この同胞体について重要な解説をほどこされた。正にそこにおいて再び見えてきたことだが、結合の精神は本質的であるが(内的なゲマインシャフト)、**それと並行して具体的な共通の活動にも行き着くとされることである**¹⁵²⁾。ヘーゲルとテンニェスの本質的な違いは(すでに何度もふれたことだが)、基本的には次の点にある。すなわちヘーゲルにとっては、国家は市民社会の彼方のテンニェスの意味での《新たな》ゲマインシャフトを示していたが、(テンニェスでは)それが故に国家偶像化として斥られ、代わって国家は《一般的・ゲゼルシャフト的な結社》として把握された¹⁵³⁾。ローレンツ・フォン・シュタインの場合も、国家をゲマインシャフトの人格化された意志とすることから、ヘーゲルの立ち位置が継承された言ってよい。しかし他面では、ゲマインシャフトは社会的紐帯一般の一般形式と解され、そこでは国家とゲゼルシャフトは《人間的ゲマインシャフトの二種の生命エレメント》とされる¹⁵⁴⁾。ヘーゲルにあっては、ゲゼルシャフトは経済ゲゼルシャフトであったが、今やそれは(シュタインの場合は)工業的な経済ゲゼルシャフトとしてさらに特殊化されたのである。

以上の簡単な解説は、ゲマインシャフトの概念が19世紀に単一とは程遠かったことを

150) G.W.F. HEGEL, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*. Ed.Lasson, Leipzig 1933, §535: 《国家は自己意識された人倫的実体、すなわち家族の原理と市民社会との合体である。家族のなかでは愛の感情であるところのこの統一体が本質であり、この本質は同時に識知ならびに自己活動の欲求という二つの原理を通じて、意識された普遍性の形式を得る、普遍性は、(知識の中で自己発展を遂げる諸規定と同様)内実および絶対的目的へ向かう識知主体を得る。すなわちこの理性的なるものを自己のために欲するのである》。(ヘーゲル『エンツィクロペディー』)

151) F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft* (1926前掲注31), S.270/2.

152) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S48ff.

153) F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 8. Verbesserte Auflage (1935前掲注6), S. 228 その他、類出[邦訳] p.312ff. (第三篇§28)

154) Lorenz von STEIN, *Der Begriff der Gesellschaft und die soziale Geschichte der französischen Revolution bis zum Jahre 1830*, hrsg. von G. SALOMON, München 1921, S.13ff., 31.

示さんがためである。主たる分裂は、すでに示唆した通り、第一には多かれ少なかれ共産制的な所有秩序を土台にした古きゲマインデの意味でのゲマインシャフトがあり、第二には（精神的あるいは感情に即した）紐帯という特殊に狭い形式としてのゲマインシャフトが思念されたためである。この分裂はその後の差異の進展によってさらに強まった。それはゲマインシャフトが、人間と人間とを、また人間と事物とを同時に結びつけるかと思うと、他所では単なる人間対人間の関係でしかない傾向を示したからである。それに加えて《諸々の人格》の間にこの関係が存するとなると、それは取りも直さず一層の（これまでふれることがなかった）次元を開くことにもなった。テンニェスについて言えば、ゲマインシャフトの第一の形式を中心に据えていることは明白であるが、また第二の形式も看過されてはいない。ただそれは、共同の活動の赴くところとしてであるにすぎず、本質的にはそこに潜んでいるものと考えられている。また別の場合では、これに対して第二の意味がまたもや第一の意味から切り離され自立させられる。もっともこれが起きるのはまったく例外的で、*オットマル・シュパンのグロテスクな一面がそうであった。シュパンにあっては、ゲマインシャフトは、活動する同胞体に対抗する純然たる精神様態として解されたのだ¹⁵⁵⁾。そのさいシュパンは、テンニェスとは反対の立場をとり、またテンニェスを意識して《ドイツにおける哲学的教養の深部》を呼号した。そこでは、テンニェスその人は無感動の無味乾燥と評された¹⁵⁶⁾。それに対して大きな射程をとったのは*マックス・シェラーの見解で、そこではテンニェスと類似の一对の概念が措定されたほどである。しかしテンニェスと異なるのは、生活ゲマインシャフトの理解にあたって《共に生きる》ことにアクセントが置かれたことで、しかもこの紐帯の狭さのゆえに、共に生きる上での《同一内容》が説かれることになった¹⁵⁷⁾。かくしてゲマインシャフトは特定の精神構造に接近し、最終的に、問題性は、シュパンにおけるのと同じようなロジックに入っていった。実際、シュパンにおいてはロジックが目を惹くが、それ以上に明白なのは*ハンス・ピヒラーであろう。なおこのピヒラーでは、ゲマインシャフトは完全な意志の教説を結びついている¹⁵⁸⁾。また先にふれた枝分かれでは、*ディートリッヒ・フォン・ヒルデブラントの人格主義があり、そこではゲマインシャフトは（全体と構成項との関係の議論において）ロジックに入ってゆくのではなく、精神の王国に向かい、その中で、人格化された価値が

155) Othmar SPANN, *Gesellschaftslehre*. 3.Aufl. Leipzig 1930.[訳者補記] 書誌データは訳注を参照。

156) F. TÖNNIES, Art. "Gemeinschaft und Gesellschaft" (1931前掲注40), S.191, Anm.13.; O. SPANN, *Gesellschaftslehre* (1930前掲注155), S.34.

157) Max SCHELER, *Der Formalismus in der Ethik und die materielle Wertethik*. 3.Aufl. Halle 1927, S.548/9.

158) Hans PICHLER, *Zur Logik der Gemeinschaft*. Tübingen 1924.

相互に関係し合って相互関係をつくり上げる¹⁵⁹⁾。ゲマインシャフト問題と全体・部分（＝構成項）の関係が結合されると共に、社会学だけでなく、社会哲学も哲学・形而上学へと移ってゆく。もとより*フェーリクス・クリューガーとその学派におけるように、当該の関心が《発達心理学》的な動きをすることもあった¹⁶⁰⁾。

以上の簡単な概観は、ゲマインシャフトの語が過去も現在も決して一様ではなかったことを明示していよう。最後にテンニェスの場合について言えば、あれこれの語法が入り混じっていると見てよく、それに徴して最後の問いを立ててもよいだろう。すなわち、社会学の基礎概念の問題性を、敢えてこうした過度に不安定かつ意味の核心において明瞭ではない語つまりゲマインシャフトに關聯づけるのが、果たして目的に適っているのであろうか、と。そのため、もしメイン卿（⇒p.184）の概念《身分と契約》（status and contract）に留まり、そこから手探りをしていたなら、はるかに事ははかどったのでは、と疑念なく思えるほどである。

X ゲゼルシャフト概念の先行する諸例

以上の概観だけでも込み入った様相がうかがえるが、これからゲゼルシャフトの語を検討すれば、錯綜の度合いはさらに増すだろう。もっとも、これまでの検討でも多少それを示唆してはいたのである。しかし今しばらく、ここに焦点を合わせて、混迷の拡大を睨んでみよう。

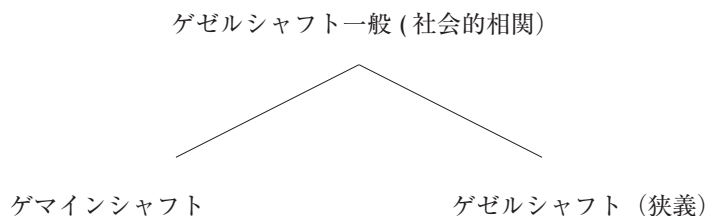
すでにテオドル・ガイガーが指摘していたように¹⁶¹⁾、このゲゼルシャフトの語の背景には、幾つもの異なった意味が隠れている。とりわけそれが特殊な意味をもちはじめたのは、18世紀の最後の三分の一の時期であった。当初、この語はグリム兄弟の国語辞典で見ることができるように、ゲマインシャフトの語に大きく溶けこんでいた。ゲマインシャフトと同じくゲゼルシャフトも、初めは非常に幅広い意味をもち、人間の共生のほとんどあらゆる形態を指していた。その点ではゲゼルシャフトは、人間と人間の普遍的な相関を指しており、したがってギリシア語の *Zōon politicōn* / *ζῶον πολιτικόν*（[訳注]ポリス＝都市国家の生き者）の訳語と言ってよかった。事実、カント（⇒p.188）やフィヒテ（⇒p.233）において、また部分的には*ゲーテにおいてもその意味でもちいられており、それは《世界市民的な》オリエンタリストも同様であった。オーギュスト・コント（⇒p.184）やハーバー

159) Dietrich von HILDEBRAND, *Metaphysik der Gemeinschaft*. Augsburg 1930.

160) 概括的な文献として次を参照, Felix KRÜGER, *Lehre von dem Ganzen: Seele, Gemeinschaft und das Göttliche*. Bern 1948.; またそれより早く適切にまとめた文献として次を参照, Heinz WERNER, *Einführung in die Entwicklungspsychologie*. Leipzig 1933.

161) Theodor GEIGER, Art. „Gesellschaft“ (1931前掲注133).

ト・スペンサー (⇒ p.184) も例にも漏れず、この語を全人類を測る尺度のような意味で使った。とりわけ先例となったのは、18世紀イギリスの偉大な社会思想家たち、アダム・ファークソン (⇒ p.228) や*アダム・スミスである。もとより他にも幾人もの名前を挙げる事ができる。しかしここでの意図はそこにはなく、語意の厳密な把握にある。ゲマインシャフトの語におけるのと同様、ここでも一般的・社会的な関連を話題にし、またそれにあたっては唯一の区分を明らかにしておきたい。すなわち、ここで頻繁に思念されているのは、人類の類としての一般性である。ちなみに、これは当然ながら（ここでは取り組むわけにはゆかないが）さらに克明な検証を要することがらであろう。またフランス語の場合は、18世紀の*フランソワ・フェヌロンから19世紀のオーギュスト・コントまでは普遍的な意味での社会的関係を指すには *humanité* が好んで使われ、片や *société* はむしろ集いあるいは《良き (=品行方正な)》社交にあてはめられた。それに較べると、イギリス人とドイツ人のあいだでは、ゲゼルシャフトあるいはソサエティ (*society* また *civil society*) を用いるのが優勢であった。これらの差異をテンニエスの思考モデルにあてはめると、以下のような図式が得られよう。



ここで分かってくるのは、(個別のことがらに立ち入ることはできないが) すでにかなり早くから、一般的・人間的な社会的相関のなかで様々な性格のゲゼルシャフトができていたことである。なおこれを明瞭に示すのは、たとえばファークソンによる社会的分業の理論であろう。これによって、ゲゼルシャフトの語の**狭義での意味**をたずねる道筋が開けたのではあるまいか。であれば、ドイツ語の言語使用に絞って、もう少し先へ歩もうと思う。

すでに*エーバーハルト・ゴータインが指摘していたように、ドイツ語のゲゼルシャフトには**ローマ法の契機**が作用しており、それはまたラテン語の *societas* の訳語でもある¹⁶²⁾。事実として法学の思索は、古くから、法的人格の概念に取り組んできた。そこでは

162) Eberhard GOTHEIN, Art. „*Gesellschaft und Gesellschaftswissenschaft*“. In: Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 3.Aufl. 1909.

複数の人間から成るものも併せて考えられてきた。そうした複数者は、何らかの仕方で互いに協同することを特質としている。その場合の法的人格は基本的には人為的であり、また特定の目的のために形成される。その法的人格は観念のなかにもみ存し、そこでは契約が決定的な役割を果たす。それゆえゴータインはこう記す¹⁶³⁾。

契約理論については、学問的には疾うに決着がついているにも拘わらず、日常の言語使用では、暗黙のうちにゲゼルシャフトが併せて考えられている。

自然法とローマ法はすでに早くから融合し、そのため今日から見ると、両者は密接に影響し合っていた。それにも拘わらず、両者は、ここでの目的との関わりでは分けてみなくてはならない。主因は、それぞれの多数体が様々な性格にあることによる。ある場合は、非常に明瞭に経済的性格をもっており、ホップズからアダム・スミスを経てカール・マルクスに至る自然法の脈絡になる。この脈絡には、テンニェスに強い影響をあたえたカール・マルクスの市民的経済社会（ゲゼルシャフト）が位置づけられる。普通ゲゼルシャフトと言われるとき、視野に入るのはもっぱらこの脈絡でもある。しかしここでは、**経済的に特化した目的によるのではない自由な集団形成**をこれと区別しようと思う。やはり、法秩序の意味では明瞭な規則づけられた性格を示している自由な集団形成である。これは基本的には、*ルードルフ・シュタムラーが広義に解して矛盾の論証をおこなったときの核心部分でもある¹⁶⁴⁾。したがってこの意味では、ゲゼルシャフトは、多かれ少なかれ、形体的には、多数の人間の規則だった行動を意味し、そこではその多数者の人々は先ずは自由かつ依存せず互いに対置している。そのさい、この自由は、実定法に対しても押し通すことができる。その面からは、自然法とローマ法の合体が《エキスタス (aequitas 正義・平等)》の概念の中で起きるのを見るのは非常に興味深い。とりわけ異邦人との交流の度合いが強くなった後にこれが現実のものとなったりする場合である。すなわち、この（エキスタスとしての）法は、どんな目的にせよ人間どうしとの、それも出自の関りなく自由に相互に対置しあう人間どうしの、何を目的にするのであれ、申し合わせ認めることになる。これはメイン卿によって強調された観点であったが、テンニェスもまたそれを踏襲した¹⁶⁵⁾。

ゲマインシャフトと対照させて、テーオドル・ガイガーは、ゲゼルシャフトというこの

163) 同上, S.681.

164) Rudolf STAMMLER, *Wirtschaft und Recht*. 5.Aufl. Berlin und Leipzig 1924.

165) Sir Henry James Sumner MAINE, *Ancient Law* (初版1861), Chap.II: Law of Nature and Equity.; F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲注8), S.230f.

概念を次のように論説した¹⁶⁶⁾。

ゲゼルシャフト、すなわち、ラテン語の *societas* の訳語として、法曹者の間では、契約当事者どうしとなる自然人 (*natürliche Personen*) による自由な契約関係を意味する。それと並んで、ローマ法は、善意の団体 (*universitas bonorum*) を、諸個人から完全に解放された目的財産として認識する。《共同の *gesamte Hand*》という考え方はドイツ法に固有である。朋友は共同で、共有財産を所有し、ゲマインシャフトを形成し、そこでは朋友は対置的なのではなく、《一体的で》である。この形式と、さらに緩やかな人間集団の間には、後のドイツ法は、多様な段階を多数の特殊形態において認識している。

しかしこの点において、法学のゲゼルシャフト概念と社会学のゲゼルシャフト概念の結びつきもみとめられる。その結合は最終的には、規約と集会と決まりと契約のあらゆる形式の下、人間と(財産と称される特殊な)事物を結合することにおいて非常に特殊な意味を持つからである。それゆえ17世紀以来、イギリスでもフランスでも、後にはドイツでも、法学のゲゼルシャフト概念はもう一つの概念([訳者補記]=市民)との緊密な結合へ移ってゆき、かくして非常に特定の歴史的かつ近代に属するゲゼルシャフトが《市民社会(市民的ゲゼルシャフト)》と表現されることになった。^{*}ジョン・ロックとトマス・ホブズにあってはなお自然法的・抽象的構成であったものが、アダム・ファークソン(⇒p.228)とその *civil society* の概念では、次第に社会学の構造概念となっていったのである。しかしこの概念が初めはなお長期にわたって明瞭ではなかったことは、テンニェスがコメントを加えた通りである¹⁶⁷⁾。また、原初のローマ法的・自然法的背景にあっては特に奇異の感じをいだかせるようなものでもなかった。普遍的・人文的なゲゼルシャフト概念の諸要素が、市民的(経済的)ゲゼルシャフトの諸要素と絡みながら進行することも永くつづいた¹⁶⁸⁾。旗幟鮮明になったのは19世紀の古典的な自由経済(*Wirtschaftsliberalismus* 経済自由主義)の考え方においてで、そこでは《力の自由な活動》に立脚し基本的には全ての人々にまたがるゲゼルシャフト(社会)が願わしいとされた。そこには混同があったことになるが、これを以てようやくローレンツ・フォン・シュタインとカール・マルクスが結論を導いた。また両者のその面での先行者は、ドイツでは特にヘーゲル、フランスではサン＝シモンとオーギュスト・コンドであった。ちなみに今日では市民社会(*bürgerliche Gesellschaft*)とい

166) Theodor GEIGER, Art. „*Gesellschaft*“ (1931前掲注133), S.202.

167) F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft* (1926前掲注31), S.266

168) これについてはガイガーをも参照, Theodor GEIGER, Art. „*Gesellschaft*“ (1931前掲注133), S.202, 203.

う言い方がなされるが、これが、ヘーゲルをマルクスの論じた意味で解釈する啓発的な傾向のなせるわざであることは、近年*ジェルジュ・ルカーチによって強調された¹⁶⁹⁾。

しかしゲゼルシャフトの概念がローレンツ・フォン・シュタインとマルクスとテンニェスにおいて最終的な形態に落ち着く前には、なお全般的な批判が向けられていたことを押さえておかねばならない。先に明示したように、市民社会としてのゲゼルシャフト概念には、初期には普遍的・人文主義的要素と形而上学的要素とが絶えず交錯していた。やがて市民社会 (bürgerliche Gesellschaft 市民的ゲゼルシャフト) が歴史的な構造概念となったが、それまたデータに即してみれば、先ずは特定の地域 ([訳注] イギリス、従って語としては society) に限定されており、やがて 1789 年を境に徐々に一般化し実際に使われるようになっていったのである。ゲゼルシャフト概念をそうしたものと見ると、その識者は先ずは*エドモンド・バークを筆頭とするイギリスの保守主義者たち、次いで*ド・ボナールと*ド・メーストル伯に代表されるフランスの復古主義思想家たち、そして彼らの影響を受けたドイツ・ロマン派の*アーダム・ミュラーであった。しかしゲゼルシャフト概念における彼らの意図は非常にポレミック (論争的) かつポリティッシュ (政治的) であり、しかもそれは従来どこにもなかった種類であった。それは同時に思想圏、すなわち《メカニクなゲゼルシャフト》に《有機的なゲマインシャフト》が対置させられる一般的文化批判が生長し、最終的にはゲマインシャフトが良きもの、片やゲゼルシャフトは悪しきものとなった思想圏であった。かくてロマン派の人々は、このメカニクな概念を批判したが、それは、このメカニクな概念が彼らには進行しつつある没落過程にすぎなかったからである。彼らは、このメカニクな概念に、《有機的な》ゲゼルシャフト概念を対置したが、そのさい所与の経済的諸関係を前に、そうした《新しい》ゲマインシャフトが再び作り得るものかどうかを問うことはなかった。彼らはまさにロマン主義者であり、おそろしい現在から中世へ逃げこんだのである。そしてこの瞬間から、中世のゲゼルシャフトをまとまりのあるゲマインシャフトへとイデオロギー的に転換させることが始まった。そこでは、中世のゲゼルシャフトがもっていたあらゆる軋轢や緊張や特殊な《ゲゼルシャフト的》な要素を削った解釈がほどこされた。しかしここではこの議論には立ち入らないでおこう。ここで決定的に大事なのは、ゲゼルシャフト概念へのポレミックにおける文化批判の動向である。もっとも、最初からそこにはたらいっていた強度にイデオロギー的な補強も見逃してはならない。とまれ、その文化批判は、現行の《諸関係》よりも、ゲゼルシャフトという《概念》により激しく向けられた。それは後年のオットマル・シュパン (⇒ p.237) におけるのと同様であった。つまり、ロマン主義者たちは、とどのつまり、現在の立ち位置をまっ

169) Georg LUKACS, *Der junge Hegel*. Zürich 1946, 特に S.444. またこの見解は全編を通じてみとめられる。

たく放棄して、《後ろ向きの預言》になっていったのである。

しかし、ロマン主義者たちが、市民社会（市民的ゲゼルシャフト）の概念を激しく論難しただけではなかった。これまでもその名前を挙げたマルクスとエンゲルスにあってもそれが起きた（精神はプロイセン国家と《調和する》とした1816年以後のヘーゲルの影響であるが）。マルクスとエンゲルスにとっても、市民社会（市民的ゲゼルシャフト）はアトム的にメカニックであり、そこでは最終的には人間の《自己疎外》が完了する、とされる。そしてこれまた、《人間というイデー》としての古き普遍的・人文主義的イデーの残響のなせるところであった。《資本主義的ゲゼルシャフト》という概念には、ありとあらゆるポレミックなエネルギーが一語につめこまれた。この時期以後、文化批判の特定の形態にとって、批判が非市民的な論調であると市民的な立場であるとかかわらず、この一語が本質的な導きの糸になっていた。

それゆえ、市民社会（市民的ゲゼルシャフト）としてのゲゼルシャフトの概念的な一面と並んで、もう一つの面がすでに前から準備されていた。それは、テンニェスが決定的な刺激を受けたとするマルクスとエンゲルスでも作用していた文化批判のあり方である。たしかにテンニェスは、合理主義とロマン主義の対立を克服することには成功したとは言えるであろうが、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二律背反についても、またゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの展開、さらにゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの展開の後の《新たな》ゲマインシャフトという文化批判的な約束についても決定的な明快さを欠いているのは注目してよいだろう。そこでは、発展史的な哲学は未来に関する哲学に転換していたのだったが。とまれ、ゲマインシャフトの概念の場合とまったく同様、ここでも、かくも多義的であり得る語を社会学の基本概念に取り上げることが目的に適うかどうか問われるだろう。ちなみに、ここでも繰り返すのは、私たちはゲゼルシャフトの語を意味論的にあつかっており、その適正性問題にはふれてはいないことである。言い換えれば、市民社会(市民的ゲゼルシャフト)としてのゲゼルシャフトという概念は、本当に、現実の本質的特徴を表現しているのだから、という問いにもなる。

XI 二律背反の検証

意味論的な難しさはさておき、何度も述べているように、重要な事実関係においてもうひとつ隔靴搔痒の感がある。それは究極的には、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの関係に、すなわち、二律背反そのものが本当は二律背反などではないことへ延びてゆく。なぜなら、押さえておきたい事実として、たしかにテンニェスは一方では絶えず二律背反に言及するが、他方ではみずからそれを決然と止揚しているからである。論説「社会学序説」のなかでテンニェスは、両カテゴリーを《並列》させ、また《一方を誤りと決めつけ、他

方にもっぱら正しをもとめるようなこと》ではないと説いた後、問いを立てる¹⁷⁰⁾。

(両カテゴリーの) どちらも真理の一部を分け持っているだけで、全体は仲介的なさらに高次の観点に求めるということだろうか。

これに対するテンニエスの答えは、すでに『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』初版の序文において強調されていた通りである¹⁷¹⁾。

この理論では、これまで《歴史的》見解や《有機的》見解が《否定的に》対置していた自然法の見解を……自己の中へ取り上げ、また自己に関わることを試みた。

《自己に関わる》はまことに陳腐な言い方だが、これが何を意味するかは、先に挙げた論説のなかで直截かつ明快に述べられる¹⁷²⁾。

これによって言わんとするのは、《有機的》観点は原初の観点にして同時に包括的観点ということであり、それゆえこれが唯一正しい。筆者の見解は徹頭徹尾ここにある……

この箇所には一聯の不明瞭が重なっているため、しばしここに留まって、問題の様々な側面を明らかにしなければならない。

まずは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトについての互いに矛盾する少なくとも二つの見解である。一つは古くからの意味において、二律背反あるいは二極対立と定義される見解、もう一つはゲマインシャフトを端的にゲゼルシャフトの上位に置く見解である。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対立の多様な可能性については、すでにこれまで取り上げた。ここでは、そもそもそうした対立は存在しないことから出発し、さらに、ゲマインシャフトがゲゼルシャフトに対して《上位に位置づけられる》様々な可能性を問いたい。もとより、古くからの対比関係についてできるだけ多くを救い出したとの望みも無理はなく、その場合、まずは、ゲマインシャフトがゲゼルシャフトに**歴史的**に先行するという理解があり得よう。これについて考えを進めると、歴史の推移からは、ゲマインシャフトが《没落する》ことを本質的に意味し、そうなると、テンニエスが（それに抗うあらゆる発言に

170) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.71.

171) F. TÖNNIES, *Gem. und Ges. Vorrede zur 1. Auflage* (1887前掲注13), S.43.

172) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.71.

も拘わらず)ロマン主義者そのものであったとの見方はもはや維持できなくなる。しかし、本当にそれが全てであろうか、との問いが起きる。本節のはじめにふれた箇所からも、《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》からも、テンニェスには少なくとも**なお二つの見解**が含まれていることが分かってくる。その二つは、共通の根をもっている。すなわち、はじめのテーゼとは反対に、**ゲマインシャフトは、展開の推移と共に弱まりはしても、まったく消滅するわけではない**ということである。これはまたもや一部では歴史的な見方にして社会層に即した見方、一部では妥当性の仕組みの意味ではもっと基本的な見方と解することができよう。

この二つの可能性のうちはじめの方は、こう言い換えてもよい。テンニェスはこう強調した¹⁷³⁾

本質意志やゲマインシャフトによつて示されるような共同生活の外的形態は、家・村・町として区別された。これらは現実的・歴史的生活一般の永続的な類型である。初期および中期の発展せるゲゼルシャフトにおいても、人間はこれらの種々なる仕方で共同居住をしている。

それゆえこれは、特定の過去の構造は現今も生き続けていることを語っている。これは、(何らかの十分な結合は欠いてはいても)純粹に歴史的な延命として、あるいはそれに対立することになるが、社会的存在のある種の《層》のいずれかとしてとらえることができる。なお後者は、過去から現在にまで延び、現在にも《たとい委縮し、さらには死滅せんとしているにしても》¹⁷⁴⁾現在のなかに自己を持ち伝えている。ちなみにテンニェスは、*《民族性の文化》と呼んだように、この層に独自の名称([訳者補記]民族性 Volkstum)を用意した。

しかし、民族性とその文化が保たれるのは、むしろゲマインシャフト的な生活・秩序においてである。したがって国家性(Staatstum)(この概念によつてゲゼルシャフト的な状態を総括することができよう)は、それが民族性から離脱して遠ざかる程度に応じて、このゲマインシャフト的な生活・秩序に憎悪・軽蔑感をもつて対立する。

173) F. TÖNNIES, Art. "Gemeinschaft und Gesellschaft" (1931前掲注40), S.245. [邦訳] p.334 (「附言」 §4)

174) 同上, S.246. [邦訳] p.334. [訳者補記]《民族性》と《国家性》の語が用いられる箇所は原書で数頁離れていること(S.243. [邦訳] p.331「附言」 §2の末尾に近い箇所)、また術語が特異であるため、その術語を含む文章を引用扱いとして補足した

この文化の上に、文明的な国家性の層あるいはゲゼルシャフトの層が乗るのである。しかしこれから独立して、同じ箇所で、なお別の思念が表明される。それは、他の二つと分かち難く絡み合っていることもあるが、その即物的な意味合いの故に、両者から取り出されねばならない。それが論説「社会学序説」のなかでテンニェスが述べた簡単な言い回しに他ならない¹⁷⁵⁾。それは、上に挙げた自己解釈に続いて引用される。《有機的観点は原初的観点にして同時に包括的観点ということであり、それゆえこれが唯一正しい》の少し後で、さらにそれは、つぎの論説へ延びてゆく¹⁷⁶⁾。

ゲマインシャフトの力は、消滅しつつあるとはいえ、なおゲゼルシャフト時代にも保たれており、依然として社会生活の実体を成している。

これを聞くと、テンニェスの別の文章を思い起こす。そこでは、本質意志と選択意志とが相互に対立し、同時に対立的ではない、とされる¹⁷⁷⁾。

したがって人類の社会的・歴史的な生活においても、本質意志と選択意志とは、非常に緊密に関連していることもあれば、並列的・対立的関係にあることもある。

テンニェスについての踏み込んだ検討の赴くところ、発言の趣旨は、近づこうとしても絶えず掌からこぼれ落ちる。

それゆえゲマインシャフトがゲゼルシャフトの対立物とみなされる一方、今、ゲマインシャフトは《社会生活の実体》であり続けるとも綴られる。そうなると、ゲマインシャフトはゲゼルシャフトへの《可能性》へのシステムティックな前提として現れることによって、またもや、先行するどれとも違った意味をあたえられる。しかしまた注目しておかねばならないのは、それによって、私たちがまったく新しい次元へ誘うような根本的な変化が予測されることである。これまでテンニェスは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトという自己の両概念については、心理学的な基礎付けを試みていた。もっとも、その心理学はすこぶる省察的で、またすでに見たようにスピノザ流の存在論へ移っていた。そして今、事態はまったく異なったものとなってきた。テンニェスが、その二つのカテゴリーの一方すなわちゲマインシャフトによって、もう一方すなわちゲゼルシャフトを《根拠づけ》ようとするからである。これは、以前にはどちらかと言えば素っ気無いものだったが、場

175) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.71.

176) F. TÖNNIES, Art. "Gemeinschaft und Gesellschaft" (1931前掲注40), S.252. [邦訳] p.343 (「附言」 § 8)

177) 同上, S.243. [邦訳] p.331 (「附言」 § 2の末尾)

所を変えてそれがありありと意気込みを見せるようになった。それは、テンニェスにおいて新たな次元が開けたことに他ならなかった。端的に言えば、後期のテンニェスにおいて前面に現れる《妥当性》の次元である。とは言え、テンニェスの早い時期の主著に何らかの変化がおきたわけではない。論説「社会学序説」では、先に引用した説明につづいて、次の一節が来る¹⁷⁸⁾。

したがって《ゲゼルシャフト》の概念とは、すべての《ゲマインシャフト》が没落する法則通りで規準的な推移の謂である。これが真実であることを言い表すには没落過程を押さえる以外にはないが、それがもはや形成途上ではなくなっているとすれば、形にしてみる他ないだろう。もっとも、それは、没落の条件やその真正の意味への予感など無いままに起きたことではあったのだが。

それゆえゲゼルシャフトの概念の《真実》は、ゲマインシャフトの《没落》である。しかし他面では、ゲマインシャフトはすべてのゲゼルシャフトの《条件》である。この二つの説明は次元が異なるが、テンニェス自身はそれに思いあたっていなかった。一つは、歴史的推移を睨んでおり、他方はシステムティックな（カントの意味での先験的と言うことへ誘われるような）関係性への要請である。しかしテンニェスが気にとめずにうっかりしてそうなのではない。それは、この思念を伸ばすような数々の言説が証している。たとえば1907年の論説「社会学の本質」では、この新しい考え方に直接向き合い、自己の早い時期の古い意志心理学とのかかわりで、欲求の《完全な》性格を取り上げた¹⁷⁹⁾。

欲求とは、言い換えれば、目論んだ、決めた、意図に着手した、決断した、ということになる。

しかし、それと共に、こうも言われる。主観的事実としての欲求の向こうには、なお客観的内実があり、それが《妥当性》をもつことが押さえられる。この《理想的な》要求は、何が《あるべきか》を語っている。この問題はテンニェスの「社会学入門」（1931年）において注目すべき発展を遂げた。《妥当性》の問題は、一方では本質意志と選択意志の心理学、他方ではゲマインシャフトとゲゼルシャフトの本質性、その間にあるものとしてシステムティックに整理されたのである（§§ 2,3,4）。ここから、ゲマインシャフトとゲゼル

178) F. TÖNNIES, *Einleitung in die Soziologie* (1899前掲注17), S.71.

179) F. TÖNNIES, *Das Wesen der Soziologie* (1907前掲注19), S.357/9.

シャフトのあいだの妥当性は、こういうことによって整理ができるだろう。すなわち、(歴史のあるいは層に即してだけでなく、システムティックな前提を持つものも併せて) ゲマインシャフト無きゲゼルシャフトはあり得ないのは、秩序の(本質意志によってになわれた) 妥当性こそ、一般にゲゼルシャフトやそれに類したものが成立することができる前提であるとおなじである、と。これについて言えるとするれば、こうであろう。テンニエスの意味での《ゲゼルシャフト的》存在それ自体は、それ自身から社会的秩序が成立し得るようなものではなく、それも(多様な意味での) 前提とされたゲマインシャフト秩序のなかではそもそも秩序の感覚が確かではなく、それと共に理想的かつ事実的な妥当性も確かではない、とするばなおさらである、と。テンニエス自身は、その《自画像》においてだが、《欲求と思考をもつばら合理主義的な表現へ》帰せしめるのは《不十分》である、と述べたことがあった¹⁸⁰⁾。

私の思索の核心は、《ゲマインシャフト》の根源を前合理主義的(それは合理主義超越的でもある) 思考と欲求(これを私は本質意志と名付けるのだが) のなかに置いてみることにある(テンニエス「自分を語る」)

これらの発言よりもさらに分かりやすいのは、どんな現象もゲマインシャフトとゲゼルシャフトを《入り混じるかたちで》含んでいるとしたときのテンニエスの観念であろう。この完全に形体的で《純粋な》基本概念は、正にそれゆえに、**歴史的であれシステムティックであれどんな上位のものをも含まず**、そのためまちがいに個々の対象に(同時にあるいは継的に) 行き着くことになり、その点ではゲオルク・ジュームの形体概念を思わせる。テンニエス自身もこう述べている¹⁸¹⁾。

ゲマインシャフトの要素とゲゼルシャフトの要素が同時に、つまり混じり合って存在しないような文化状況を私は知らない。

かかる前提の下で、純粋に形体的な概念としてのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの本来的内容を問うのは、殊のほか啓発に富んでいる。事実、両概念は、これまでの全てと異なる現れ方をする。テンニエスの言い方では、《概念的に最も先鋭な対立》において現れ、そのため、《一面では、形象の肯定がそれ自身のために、他面では肯定は外的な目的のた

180) F. TÖNNIES, *Selbstdarstellung* (1922前掲注47), S.211.

181) F. TÖNNIES, *Soziologisches Symposion* (1931前掲注12), S. 135.

めになされる》¹⁸²⁾。またそれに照応して、論説「社会生活の目的と手段」(1923年)でもこう述べる¹⁸³⁾。

本質意志は人倫的価値に直接向かい(すなわちそれ自身のために)、選択意志は人倫的価値の作用を役立てることから、それを捉えそこなう。

もとよりこの可能性は当初からテンニエスの関心事であった。とは言え、その《肯定》に関する教説の発展ともにはじめて緊要になった面はある。しかし先に挙げた《混じり合い》がどのようにして現実になるのかについては、テンニエスは次の「ゲマインシャフトの概念について」における言説をはじめ、何度も言及した¹⁸⁴⁾。

たとえば結婚だが、このきわめて個人的な関係をこの意味で観察すると、それは十全の感動とそれ自体のために進んでゆく。が、しばらくすると、夫婦のどちらからも、《人々のために》、すなわち社会的な外観のために、また生まれた子供たちをもゲゼルシャフトのなかで主張する手段として、確かであることがもとめられ肯定される。言い換えれば、正規の結婚としてである。

同じ論説のほんの数頁先では、またこうも論じられる¹⁸⁵⁾。

こういうコメントを加えておくべきだろう。内的なゲマインシャフトのどんなあり方も、そこに結合する者たちが実際の現象として敵意や敵対行為へ進むのを排除するものではない。たとえば夫婦のような関係は、結合者としての意識のなかでは本質的なゲマインシャフトであり得るが、その関係は上のような感情や振る舞いによってしばしば乱される。かく結合者がゲマインシャフトを破壊し内部から喪失へ進むこともあり得るが、その場合も、結合者の意志によって、なおゲゼルシャフト的關係として外面的な結びつきを持続させることがある。

別の脈絡では、またこうも綴られる¹⁸⁶⁾。

182) F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft* (1926前掲注31), S.269.

183) F. TÖNNIES, *Zweck und Mittel im soziologischen Leben*. In: *Studien und Kritiken*, Bd.II, Jena 1926, S.37.

184) F. TÖNNIES, *Der Begriff der Gemeinschaft* (1926前掲注31), S.269.

185) 同上, S.271.

186) F. TÖNNIES, *Zweck und Mittel im soziologischen Leben* (1926前掲注183), S.17.

たとえばエゴイスト、それは僭主のことも、あるいは個人のこともあるが、身勝手にふるまい、勝手放題を押し通そうとするその者が、自己の属しているゲメインシャフトを、自己の目的のための手段としか評価せず、それを利用するだけになると、ゲメインシャフトは、その者にとってはゲゼルシャフトになる・・・

したがってここでは、行動の《モチーフ》が決定的なものとして現れる。なおこれが記された論説が掲載されたのは、マックス・ウェーバーへの追悼記念集であった。そのため、これによって、他ではみられないほどテンニェスはウェーバーに歩み寄ったと言っても差し支えあるまい。あるいは、むしろこう強調しておきたい。これが、ゲメインシャフトとゲゼルシャフトの一組の概念が今日まで何らかの意味をもって生き続けるにあたっての唯一の意味合いでもある、と。

しかしゲメインシャフトとゲゼルシャフトの二概念の間の違いは、この点ではもともと《絶対的な二律背反》あるいは二項対立とは異なったものであった。それは、両概念が、歴史的展開を越えた何ものか含んでいるからではなく、また二項あるいは三項もしくはそれ以上の数の基本概念の上に聳える何ものかを抱えているからでもなく、端的に、所与のケースごとでの目的・手段＝関係におけるモチーフの違いを押しさえるだけだからである。それは、無数・多種多様な概念システムに反映されることができ、事実、ここで言うところの差異は、テンニェスが微塵もかかわらなかった多数の概念装置に反映される。

ここで、ゲメインシャフトとゲゼルシャフトの概念とその相反的な関係がもつ（ちょうどのこの説で取り上げている）多様な意味を、これまでのもの（たとえば本編の第VI節）と併せて総括を試みるなら、数多くの所与の可能性について最初の見通しを得ることになる。

先ず全体を、決定的な二者択一が貫いている。それに徴すると、ゲメインシャフトとゲゼルシャフトの二概念は、ある場合は真正の二律背反あるいは二極対立を呈するか、また別の場合はそれほど明瞭ではないか、どちらかである。二律背反的な問題構造から見ると、概念の純粹に形体的な使用は除外されるのは、これまでに取り上げた。そうした形体的使用は、それ自体、また基本的には、テンニェスの思考複合とは縁遠く、それゆえテンニェスがそこにはまったく関与していないことは多くの脈絡から明らかであろう。これが、一対の概念ゲメインシャフトとゲゼルシャフトの**一番目の意味**である。ここから、この両概念を以て社会的行動の二つのあり方を《分類する》のではなく、本来の構造を把握する（概念）使用が弁別されよう。その構造は、概念的にも事実にも即した論理としても重要で、それに照らして、特定の全發展を言い表そうとするようなところのものである。これに因んで、先には、二種の対立、すなわち相対矛盾的な対立と絶対矛盾的な対立を挙げた。相対矛盾的な対立では、事態は、概念構造的に相互に排斥しあう二種類だけの概念があるので

はなく、少なくとも三種類、時にはそれ以上の数になり、また論理的（離接的）に並ぶことになる。これが一対の概念の**二番目の意味**になる。それ以外の諸々の意味は**三番目**として、ここではもともと対立が問題なのではないとの前提が力を発揮する。特に先鋭なのは**四番目の意味**にあたる純粋にロマン主義的な方向で、唯一つのゲマインシャフトをリアルとみなし、他の全てを《没落》とする行き方である。またそれと並んで、比較的《脆弱な》**五番目の意味**を取り上げることができる。この場合、ゲマインシャフトは、過去の時代から《生き延びている》限りで、ゲゼルシャフトに先立った位置づけを得る。そこから分かれるのが**六番目の意味**で、国家という文明に対抗して民族性（⇒p.245）のなかで自己を実現する持続的な類型が重視される。最後に行き当たる**七番目の意味**は、純粋にシステムティックに、妥当性の次元でゲマインシャフトをゲゼルシャフトの原理的な前提とみなすが、それと言うのも、それ無くしてはゲゼルシャフトが長期的には存在し得ないような秩序一般の根拠になるのがゲマインシャフトだからである。またこの根拠から、**ゲマインシャフト一般がゲゼルシャフトの《生命》であるがために、ゲマインシャフト一般もまた消滅することはない、**と推論することもできよう。

まとめとして特に明らかにしておくべきであろうが、これら様々な意味は、いずれもテンニェスが異なった時期に、多様な変化を含みながら見せたものであった。言い換えれば、それらが同時に現れていたとは言うことはできない。個々に現れることもあれば、幾つかが重なって、しかもアクセントが変化して現れることもある。時には何もかもが混じり合い、そのため事態を明瞭ならしめるどころではないこともある。もっとも、ここでは、個々のニュアンスはすべて捨象するしかない。それは、断じてこれらが重要性に欠けるからではない。たとえば、ゲマインシャフトへのさまざまな見方がある。自然的な視点や伝統的な視点、習慣に即した見方や感情に沿った観点、最後はメンタリティとの結合などである。こうしたヴァリエーションを取り上げたいとは思っても、それに取り組んでいると全体は際限なく不透明にならざるを得ない。代わってここで肝心なのは、少なくとも次の諸点であろう。すなわち、先に意味を列挙するにあたってそのはじめに、二つの局面の《混じり合い》が《ラフな》様相を示すことを先ず押さえた。それを、分類学的な概念を介して人工的・形体的に分割したのだが、そこまで絞ると、最終的に行き着くのは、部分的にはアナロジー的ながら、究極的には別の状況である。ここでただちに見えてくるのは、**ゲマインシャフト無くしてゲゼルシャフトは存在しないが故に、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトのあいだには従来の意味での対立は成り立たない**ことである。その検証にはかなり多くの頁数を費やしたが、またそれを通じて最終的には、**テンニェスの思考モデルのみならず、その概念言語のすべてが放棄されるまで進んだ。**このただいまの聯関で生じた設問は繰り返されるまでにはゆかないが、ここからまた次の論議へ向かうことになる。

XII 社会学か哲学か

本編ではかなり深く分析したが、そこから全体を見渡して言えることがある。テンニェスにおいては、強度の二律背反が却ってそうではない顕著な傾向を示す、と。基本的に、テンニェスの唯一かつ本来の関心はゲマインシャフトの理念で、それは具体的なりアリティの意味ではなく、あるいはまた概念的な構造でなく、(すでに示したように) 挙げて存在論的な方向で説かれている。基本的には、テンニェスにとってゲマインシャフトは存在の単一性のためのゲゼルシャフト的なメタファーであり、それ自身との宥和あるいはバランスであった。これによって、テンニェスをめぐる全体評価に関する中心的課題は解決される。ちなみにテンニェスについては、哲学的社会学という言い方がすでに屢々なされてきた。本編のこれまでの検討を踏まえると、その面からテンニェスを読み解いてもよいのではなからうか。では、哲学的社会学だろうか？ そうではなく、社会学ではなく哲学とすべきだろう。そしてこれが解決になると思われる。これに慣れるしかないが、今後、テンニェスはもはや社会学の歴史に場所を占めるのではなく、哲学の歴史に位置づけられることになるだろう。

この帰結はさておき、なお押さえておきたいのは、テンニェスが狭義のゲゼルシャフトについては、そもそも適切なイメージをもっていないことである。ゲゼルシャフトは、ゲマインシャフト (A) への関係では、ゲマインシャフトのあらゆる本質的なメルクマールの否定として対置させられており (つまり A ではないというだけのことで)、ゲゼルシャフト自体のポジティブな規定 (すなわち B) をまったく欠いている。そこで残る脱出路は、これまた先に言及したことだが、ゲマインシャフト無きゲゼルシャフトは考えられないということになり、これまた (この見解のあらゆるシステムティックな意味と並んで) 疑問を起こさせる。これだけ苦勞をして切り離して、最後にふたたび一緒にする意義があるだろうか、と。さらに、言葉だけが空疎な問題で堂々巡りしているだけではなからうか、という懽然たる思いに誘われる。それも故ないことではなく、言葉だけで言えば、ドイツ語のゲマインシャフトとゲゼルシャフトはそもそも対立的でもなければ同等でもなく、単に不明確で不確定な関係でしかないとの自覚もここに加わる。事実、この脈絡はピョートル・ストルーヴェによって強調された。曰く、《概念的にはもともと流動的で、概念硬化が起きたのはずっと後になってからだった》¹⁸⁷⁾。もちろん、作業全体はまだ終わっていない。しかしそのさい、名うての言語的不明瞭という厄介な抵当をとって、社会学の基本概念的論議を端から縛るのが賢明かどうか、これは常に念頭に置いておきたい用心である。その

187) Peter STRUVE, *Ferd. Tönnies (1855-1936). Zur Würdigung seines sozialphilosophischen und soziologischen Schaffens* (1937前掲注7), 57, Anm.4.

点では、これらの概念を使わないか、それとも、数年前にレーオポルト・フォン・ヴィーゼが提案したように精々《発見法的原理》とみなすか¹⁸⁸⁾、どちらかに決断するのは事態に裨益するだろう。しかしそれまた、突きつめれば、かならずしも危険性のない調整とも言えない。経験的にも分かることだが、場合によっては、解決よりも混乱を助長しかねないからである。

ゲゼルシャフトが、ゲマインシャフトの否定としてしか考えられないという（つまりAではないという）決定的な状況に立ってみると、この概念はすこぶる不安定なものとなってくる。なぜなら、**ゲゼルシャフトの概念は現実とはまるで関係せず、もっぱら文献から読み取られるだけのもの**だからである。これによって、ゲゼルシャフトの概念は、精々、イデオロギー的な意味をもつことができるだけで、それもガイガーが指摘した文化ユニヴァーサルなイデオロギー概念の意味においてである¹⁸⁹⁾。そもそもテンニエスの元になったのは現実の何らかの特徴ではない。もしそれであれば、それらを途切れなく引き延ばすことによってイデアルテュプスの抽出して読み取り、体系に組むこともあり得たであろう。しかしこの場合は、純然たる歴史的なテキスト、すなわちアルトゥジウスからホッボズ、スピノザ、ヴォルフ、カント、フィヒテ、ヘーゲルを経てマルクスとエンゲルスに至る文献である。留意してよいであろうが、こうした前代の文献が圧倒的に優勢で、これもあってテンニエスの場合、いかにも古い人らしく、商業資本主義と産業資本主義を混同するか一緒にするかしてしまっている。そもそも産業資本主義をテンニエスはまるで問題にすることができなかった。また商業資本主義のイメージも、起源出所がおそろしくばらばらの自然法が混入し、何らかの足が地についた経験の可能性をかき消してしまっている。ちなみに、本編の始めで言及した精神史の新たな方向がここで入ってこなければならなかったところであろう。またその新たな方向が、社会学の思考の中の古い世俗的な自然法の名残りに（たとい、これらの後ろ向きの結びつきの何もかもを放棄するところまではゆかないにせよ）少なくともそれまで以上に大きな懐疑をもって対置せねばならなかったところだろう。もっとも、ここはこうした刺激をさらに追っている場所ではない。これらは、むしろ、テンニエスとはかかわりのない別の脈絡で啓発の光を投げしてくれるだろう。

これによって、すでに随所で示唆しておいた**テンニエスの基本概念の適切性への根幹的な問い**を取り上げたことになる。この設問を純粹にシステムティックに相手取ろうとするとなれば、基本的には、証拠不十分 (non liquet) の壁が勃然と立ちはだかる。なぜなら、あらゆるリアリティ指定をかすんだものにする存在論の霧の中で、一方の概念と他方のリ

188) Leopold von WIESE, *Soziologie. Geschichte und Hauptprobleme*. Berlin – Leipzig 1926, S.122.

189) Theodor GEIGER, *Ideologie und Wahrheit*. Stuttgart - Wien 1953, S.156ff., 162.

アリティの間の本義での物の直視 (intentio recta) は顕在化しないからである。しかしそこまで厳密にとらなければ、書物から得られたモデルは、《規準概念》の経験に即したコントロールへの希求を浮上させない位には強力である。この点で注目すべきは、(先に挙げた) テンニエスの視点で、それによれば、唯一《ポジティブな》、したがって非敵対的な関係性が社会的に重みをもつことができ、他方、時に起きる《ネガティブな》あるいは敵対的な関係性の分析は社会心理学のなかへ押し退けられる。《本来的》すなわち形而上学的な認識と《非本来的》な思念という*プラトンの古い区分に思いを致すことを、誰が妨げることができようか。しかしリアリティの措定と共に、適切性への問いは**純粹社会学の外へ移し替えられる**。テンニエスの存在論は、*前カント的な存在論の意味では《非批判的》であり、これはテンニエスのスピノザへの依拠を少しも不思議とはしないであろう。

これによって、テンニエスのゲゼルシャフト概念は、二つの次元において、現実から押し退けられる。一つには、その概念が文献資料からとられ、純粹にイデオロギー的に ([訳注] 思想として) 用いられていることであり、しかしまた**二つには**、それ (= ゲゼルシャフト概念) はテンニエスの存在論的な基本姿勢からは現実分析につながる**主導理念**としてではなく、単に (偏にゲマインシャフトではないことにおいて際立つところの) 一般的な《潜在力》を图示せんがためにもちいられるだけである。任意の所与を non-A として規定することからは、それが B であると定義する道はあり得ない。もちろん、概念を手立てにした現実のポジティブな克服の意味において着手するのはどこなのか、といったことは微塵も意識しないまま鏡像を鏡像と対照させる欺瞞、そうした欺瞞とはきっぱり縁を切るなら話は別である。かくてこう言っても構うまい。テンニエスのゲゼルシャフト概念が現実を素通りするのは、それが《極端化される (誇張される)》(これ自体は、あらゆる抽象的な概念形成について言えることだが) からではなく、**現実とはまるで照応せず自己自身とのみかかわる非概念だからである**、と。事実、何度も見舞われる抗いようもない印象を言うなら、この概念をめぐって純粹に文献的に大きな弦が張りわたされ、さらに下位概念の網が広がっているかのようなようである。さらに忘れようにも忘れられないのは、網を覗いても、魚がまったく入っていないことである。実は魚は逃げたのではなく、もともと網は乾いた地面に投げ出されていたのだった。

この言い方をもう一度もちいると、ゲゼルシャフトのなかにある元はゲマインシャフトの特徴の全てが、(それらが古い秩序の名残である限り、それだけでなく新たな生活条件のなかで自ずと発展するものでもある限り) テンニエスから逃げてゆく。テンニエスの一般哲学の装置の土台に残るのは、ただ一つの逃げ道だけである。すなわち、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの展開の彼方に《新たな》ゲマインシャフトへの入り口をつくっ

ておくことだけである。実際、テンニェスはそれを行なった。望むらくはそうでありたくないとの思いに背き、また良心のやましさをも感じつつ。心ならずも受け入れた周知の《約束》、すなわち、ロマン主義的な後ろ向きの預言が未来学さながらの前向きの預言に転換したからだ、これはテンニェスをとどのつまり不幸な状況に至らしめた。将来のヴィジョンを携えて、所与すなわち自己を取り巻く現在に関する具体的分析の一切合財を《押し退け》なければかったからである。これによって、テンニェスのゲゼルシャフト概念をめぐる適正性問題は、ネガティブな意味で回答を得るように思われる。たしかにそれは、この概念の個々のモメント（契機）が現実と経験的に重ならないことが証された故だけでなく、カントが解していたような《先験的演繹》という厳密な意味においてもあった。概念《一般》が対象にどのようにかわるのかとの批判的な問いをテンニェスが発するならば、先験的演繹となる他あるまい。

ゲゼルシャフトもまた（これを A に対する non-A という構図で否定をおこなう）ゲマインシャフトへのイデオロギーに調整された回答であるなら、この概念は崩壊しており、それゆえその後で、せめてものことに残る正当性をもった見解はこうなるだろう。すなわち、ゲマインシャフトだけは、それを純然たる存在論の構成体にまで押し戻せば、何らかの決定的なものであり得る、ということである。ゲマインシャフトとしてのこの概念が、多少とも共産制的な土地所有の秩序にあるローカルなグループとしての《ゲマインデ》という特殊な対象を指すとすれば（テンニェスはこれをたいそう強調してもいる）、ゲマインシャフトは具体的な意味をもつ。しかし問いは、この意味づけは、整合性の上で、テンニェスがそれと結びつけたものと重なるであろうか、という問いでもある。言い換えれば、ゲルマニスティク概念に対する適正性問題を浮上させることで、それはまずは（ゲゼルシャフト概念にそうなったのと同じく）経験的なかたちでの問いになるだろう。

テンニェス自身もその絶えず立ち返るのはゲマインデよりもゲマインシャフトであるが、そうではあれ、（その思考全体の方向に徴すると）それと結びつくのは、特定の所有秩序に関する発言である。端的に言えば、《ゲゼルシャフト的な》形成体には欠けている特殊に内的な結合の事実性である。しかしまた、そうした推論が正しいかどうかも大きな設問になる。本編でも、他の脈絡においてだが、ゲマインシャフトの術語をこの意味でのゲマインデ（町村体／ムラ）に適用することを強く排除した。なぜなら、小さなゲマイデでも強度な権力の層序を組み込んでおり、こまやかな結びつき（innige Verbundenheit）とは決して言えないからである¹⁹⁰。歴史的にも、この点では、たとえば村落市民ゲマインデと住民ゲマインデの間の差異を指摘しなければならない。前者は、特権を持つ者たちと小

190) René KÖNIG, *Die Gemeinde in soziologischer Sicht*. In: *Handbuch der kommunalen Wissenschaften*, Hrsg. Hans

さな権利の者たちとの顕著は階級差をつくっている。しかしまた多様な権利の市民たちが存在するところでは、親密な結びつきの意味でのゲマインシャフトはあり得ず、むしろ抑圧が規範となる。ちなみに、共産制的な土地所有秩序のゲマインデには何らかのかたちで《原初の》事象がみとめられるといった考え方を、近年の経済史研究や発展史研究は放棄したことを、この脈絡で示唆しておいてもよいだろう。事実はそうした見解とは逆で、そうしたゲマインデにおいても、《プリミティヴ》あるいは《原初の》生き方をいささかも反映していない高度に発展した生活形態に出会うのである。しかしテンニェスは、その生前にはすでに盛況をきたしていたそうした研究に注目せず、エミール・ド・ラヴェレ流(⇒p.386)の情念ゆたかなプリミティヴな立脚点に最後までとどまっていた。もっとも、そこでは過去と未来に目を向けているだけでなく、同時に浮上する共有財産と私有財産の分節を含む所有形態にたどりついてはいたのである。なお近年ではオランダの*J.P. クロイトが、いわゆる《プリミティヴな》ゲマインシャフト村制のなかにも《ゲゼルシャフト的》エレメントが現れることを説得力ゆたかに呈示した¹⁹¹⁾。

しかしテンニェスにとっては、そうした知見は概して偶然的であり、基本的にはそこに目を閉じていた。社会的存在をポジティブかつ非敵対的な関係性とするテンニェスの見解は、この点では致命的な作用を及ぼさずにはおかなかった。もちろんテンニェスも、たとえば家族というゲマインシャフトの一員が端的にエゴイスティックに自分本位をふるまう(ゲゼルシャフト的な)場合があることをみとめてはいた。しかしテンニェスには、それは単なるアクシデントにとどまった。なぜなら現実のなかで何ごとも純粋なかたちで存在せず、そうした抽象のなかで活動するのが正に《規準概念》だから、とされた。しかしこの問題は、まったく違った局面でもみとめられる。たとえばそこに立ったのはマックス・ウェーバーであるが、言われるところのゲマインシャフトと暴力関係は決して排斥しあうものではなく、精神的な弱者が端的に暴力に屈することもある。そうした視点は、テンニェスには生涯とざされていた。それは決してその視点への物質的な制約によるのではなく、テンニェスの存在論的な基本姿勢の故で、リアルな視点は遮断されていたのである。そこで言えるのは、テンニェスのゲマインシャフトの概念は、社会哲学的な課題の重さはそれはそれとして、極端なまでに一面的だったことである。肯定的な営為への限定のゆえに、テンニェスが眼にした現象でも、完全な姿では視野には入ることはできなかった。

ここでは、先にゲゼルシャフトの概念をめぐって適正性問題を検証したのと同じく、この概念言語をもう少し先までたどろうと思うが、そうするとこう言わなければならない

PETERS. Berlin 1955, S.21.

191) F. TÖNNIES, *Einführung in die Soziologie* (1931前掲8), S159ff.; J.P. KRUIJT, *Gemeenschap als sociologisch begrip*. 1a.a.O.S.9ff.

ことになる。ゲマインシャフトの概念を見るテンニエスのレンズは、彼をしてゲマインシャフトにふくまれることに疑念の余地のない《ゲゼルシャフト的》諸契機を看過させるほど狭かった、と。(ゲマインシャフトの実際がそうであるのは) それも、(テンニエスが言うような) 両概念が現実には当然ながら《混じり合っている》からだけでなく、根本を考えればそうならざるを得ないからで、要するにゲゼルシャフト的な諸契機を欠いたゲマインシャフトは不可能だからである。ところがテンニエスは正にこれを見過でしてしまうのだが、それは、先に、あらゆるゲゼルシャフト的な現象においておのずと現れるゲマインシャフト的な結合をテンニエスが認識できなかったのと同工である。そして、今、ようやくこう言えるところまで来た。ゲゼルシャフト無きゲマインシャフトは成り立たず、それは逆のゲマインシャフト無きゲゼルシャフトについても同様とすれば、ここから非常に明白になるのは、すべてが勘違いされていたことであり、それゆえこの見かけの対立でしかない対立の彼方の層に関心を誘われる、と。

この上なく明瞭になったのは、ゲゼルシャフト無きゲマインシャフトもまた考えられないとの命題であり、またテンニエスの存在論的姿勢ならびに限定への距離である。もとより、先に何度も明らかになったような、テンニエスが支配の概念を疎かにしていたとの意味でこれを言うのは当たらない。事実、テンニエスは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念に第三の基本概念を加えてもおり、それは早くフランツ・シュタウディングガー (⇒p.217) やヴィルヘルム・メッツガー (⇒p.187) において見られたのと重なっていた¹⁹²⁾。この点では*ルードルフ・ヘーバーレが正しく指摘したように、テンニエスは、ゲマインシャフトにおいてもゲゼルシャフトにおいても、独自の支配関係を認識していたのである¹⁹³⁾。なおこれはテンニエスの主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』では非常に明白というわけではないが、「社会学入門」(1931年)によっても、テンニエスがその考え方を持っていることはいささかも疑えない。しかし本来の問題はそこにあるのではなく、メッツガーが明言している事実、すなわち存在論的な基本的立ち位置が原理的に変化することにある。その言い方を借りればこうである¹⁹⁴⁾。

しかし強調しておくべきは、本書で《社会的 sozial》というのは、諸個人間の相

192) Franz STAUDINGER, *Wirtschaftliche Grundlagen der Moral*. Darmstadt 1907.; DERS., *Kulturgrundlagen der Politik*. Jena 1914.; Wilhelm METZGER, Besprechung von F. TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 2.Aufl.1912. In: *Weltwirtschaftliches Archiv* 1913.; DERS., *Gesellschaft, Recht und Staat in der Ethik des deutschen Idealismus*. Heidelberg 1917.

193) Rudolf HERBERLE, *Zur Theorie der Herrschaftsverhältnisse bei Tönnies*. In: *Kölner Vierteljahreshefte für Soziologie*, Bd.V.(1925/26).

194) W. METZGER, *Gesellschaft, Recht und Staat*. 1917, S.6, Anm.1

関のあらゆる種類を含むことである。《非社会学的 unsoziologisch》、《敵対的 feindseitig》、すなわち《ゲマインシャフト》と《ゲゼルシャフト》に背馳するものをも含んでいる。

もとよりこれは、元の一对の基本概念に第三や第四、あるいは第五の基本概念を追加する意図とは別で、またそれ以上に重要である。それはさておき、ここではっきりさせたいのは、テンニェスの独自の存在論の赴くところ、その権力 (Macht) の概念はきわめて一面的にならざるを得なかったこと、またテンニェスがマルクスとエンゲルスに学んだにも拘わらず、あらゆる支配の基本現象の様態としての暴力を簡単に除外していることである。テンニェスでも暴力関係が話題にされることがあるが、先に見たようなアクシデントの意味で片隅に置かれるにすぎず、存在論的な観点の前に埃にまみれて消えてゆく。これにちなんで、テンニェスはメツガーの著作を書評したことがあったが、自己との違いを感じとるや、それを指摘するのをためらわなかった¹⁹⁵⁾。

私の著作の一頁目に明示したことだが、《双方の》肯定の関係に考察を限定した。しかし暴力関係にそれを見とめることはできない。強制や暴力が社会生活において果たす測り知れない役割を片時も視野の外に置くことはない。しかし人間的に社会的な諸関係の理論を、その中に正義の芽が宿っていることにおいて理解することを常に欲してきた。すなわち、理論は自ら欲せられた諸関係として、自己主体によって感得され思惟されるということである。もちろん、それへの千差万別の立ち位置を両類型に即して測ろうとした。その一方は、関係が直接的すなわちそれ自身のために、他方は、専らかつ意識的に、主体の個人的目的のための手段として肯定され欲せられる。目的とは鋭く分離し区別される手段として、しかも目的とは対立する場合（従って不本意な欲求）ですらその手段は実行される。メツガーは、私の好意的な他の批評家と同じく、これらの概念の合一的な (synthetisch) 性状を十分には評価しなかった。

言われるところのこれらの概念の合一的な性状をないがしろにしたとは思わないが、私見では、これらが理解されるのは、は社会学の分野においてではなく、偏に存在論の枠内であろう。逆に社会学にとっては、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、それに暴力も、最初から（特定の特徴は現今においてはじめて鋭さを高めてアクセントをもつことになるとしても）一緒に現れるのである。しかしそこで特に重要と思える認識は、結合の親密な形式

195) F. TÖNNIES, Besprechung von W. METZGER. In: Studien und Kritiken, Bd.III, S.450/52, 引用はS.452.

としての全てのゲマインシャフトはゲゼルシャフトの諸要素をも含んでおることであり、その結合形式は、**外的な規制の意味でも、ゲマインシャフト的諸関係の制度に暴力を組み込む意味でも考えられる**。たしかにテンニェスは、ゲマインシャフトのなかでの慣習と法の遵守に目を光らせる神々をよく話題にする。しかしテンニェスに抜け落ちているのは、これらの神々が暴力と威嚇とを以て世界を支配しており、そこには容赦はないという実態である。なぜなら、人間は命じられた道にタブーによって組み込まれており、世界秩序の全てを危うくする覚悟なくしてはそこから逸れることはできないからである。そうした秩序の安定を確かにするために、魔法を手立てとした数々の規制があり、とりわけ因習的なセレモニーを覆っており、そのセレモニーの故に、ゲマインシャフトは多分に特殊極まるゲゼルシャフト的な相貌を呈する。しかしこれら全てに対して自己を閉ざしていたテンニェスの神々は、19世紀末の上級教員の人文主義に特有の書物の黴の匂いを放つばかりで、神々の秩序に陶醉する者の前に現れても*戦慄的な神秘を帯びていなかった。

本編の意図は、テンニェスの二つの概念ゲマインシャフトはゲゼルシャフトの呈示にあり、この論者の全作品を取り上げるのでもなければ、その後の展開を評価しようと言うのでもない。しかしながら、後続の全てはテンニェスの刺激を受けていると考えられるところから、最大の注目を払うのは、この高貴な精神に対する責務であろう。しかし他面では、用心ももとめられる。基本概念をめぐる議論そのものの弱点はすでに何度も取り上げたが、延いてはテンニェスの思索に走る不足を躊躇せずあばくことにもなった。論者の生誕100年を経た今日から見れば、さらに、なお旺盛に研究にいそんでいた論者を死が襲って20年をけみした今日からみると、瓦礫の山が横たわっているのではない。定かならぬ巨大なものが聳えているのである。なまじいな美化をほどこしたとて、何の足しにもなるまい。テンニェスを今日の精神世界に救い出すただ一つの道は、文化史の原理論を追求したテンニェスの存在論的哲学への逸脱を受け入れることである。しかもその哲学は、社会的アナロジーを駆使し、また生物学的アナロジーにも手を染める体のものであった。他面で、もともと哲学に抵抗力の弱いドイツの社会学は、テンニェスの要請を直線的に受けとめてしまい、テンニェスにとって社会学はヘーゲルからスピノザへと延びる存在論という本来の関心に被せた仮面にすぎないことを理解しなかった。しかしその誤解は、社会学の基本概念をめぐるすこぶる生産的な議論を誘発した。20年の歳月がなおそれを全うしてはいないのは遺憾である。今日生きている私たちにテンニェスがなおも及ぼす作用力が余すところなく測り得るのは、私たちがテンニェス以後の社会学の基礎に関わる議論をシステムティックな内容に練り直し、その全てを、今日の状況と突き合わせる事ができた時であろう。が、それはまた別の話である。